

---

# モンスターハンター 神ヲ狩ル者

ゼロ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

モンスターハンター 神ヲ狩ル者

### 【Nコード】

N5619Q

### 【作者名】

セロ

### 【あらすじ】

白き神 ウカムルバス 崩竜が数多の英雄達に討伐されて10年

崩竜による被害を受けながらも見事に復興を成し遂げた北の街ノーティスで一人の新米ハンターがデビューする。

普通の新米としての普通の狩猟生活。

だがそれはある力を発現させたことで少しずつ変わっていく。

やがて起こる世界と神をも巻き込んだ戦いの中、彼は何を狩り何を守るのか。

（キャラ等は完全オリジナルです。モンハンを知らない方にも読んでいただけると嬉しいです）

（登場人物紹介、上げてみました

<http://nk.syosetu.com/n1511t/>）

## プロローグ 白き神

——雪山深奥部

そこはあらゆる生命を拒絶する極寒の地

そこは全てのものを雪が覆い尽くす白銀の世界

だが、今だけは違った。

雪原は無数のハンターの死体で埋められ、一面が血で赤く染まっている。

——動くものはただ3つ

吹きつける雪と

身体<sup>ウカムルバス</sup>の至るところに刃を突き立てられながらも、尚 君臨する  
“白き神”崩竜

そして最後の一人となりながら、神に刃を向け続ける一人の男

男は頭から大量の血を流しながらも構えは崩さない。

手にした太刀に込めるのは最後の力。

——長い睨み合いの末、白き神は咆哮した。

大地を揺らしながら男に向かっていき、その巨爪を降り下ろす。

男はそれを避けようとはしなかった。

否、男にはもはや避けるだけの気力も残っていなかった。

だからこそ、ここで決着を。

渾身の力を振り絞り、太刀を突き出した。

——鈍い音が響いた。

男の剣が神に届いたのと、神が男の心臓をえぐったのは同時

神の眉間から激しく吹き出す血。

長く尾を引く絶叫を残し。巨体を大きく仰け反らせ、崩れ落ちた。

その眼から光が消える。

それを見届けた男もまた、膝をつきその場に倒れこむ。

男には自分の傷がどれ程のものかわかっていた。

雪原に男の流す血が広がっていく。

「モニカ……ごめんな………すぐ帰るって言ったのに………」

誰にも聞こえないような声で男は呟いた。

脳裏にはこれまでの記憶が走馬灯のように駆け抜けていく。

故郷。 親しい友のこと。 残してきた幼い一人娘のこと。 ま

だまだ危なっかしいたった一人の弟子のこと。

——心残りは山ほど有る。  
だが心は満たされていた。

彼は大切なものを護り抜いたのだ。

満足気に笑い、静かに眼を閉じる。

そして、二度とその眼を開けることはなかった。

——それから十年の時が流れ、物語は始まる。

## No.1 『新米ハンター』

「ね……ねえラルドゥ？　こんなところでお肉焼いてないで早くドスゲネポス探さないと……」

「ちゃんと僕の言ったこと聞いてた？　この場所はドスゲネポスの巡回ルート。　待ってればそのうちむこうから来るよ」

ここは灼熱の砂漠の地下に広がる地底湖。

自然にできた巨大な鍾乳洞で、底まで見えるほど清んだ湖に天井から垂れ下がる無数の鍾乳石はなかなか神秘的で魅力的な光景だ。

狩場への立ち入りが禁じられている一般人には見る事ができない、砂漠の隠れた名所でもある。

その場所に二人はいた。

一人は、黒曜石のような色の黒髪と瞳。　背中には背丈程もある大太刀を背負った青年。

まだ幼さが残る、大きな眼の中性的な顔立ちで、見ようによっては少女と間違えそうになる。

彼の名はラルドゥ・ヴァンクール

この地底湖は今回の討伐対象であるドスゲネポスの巡回ルートなので、肉でも焼いて待っていようと言い出したのも彼である。

そして吞気に肉を焼いている状況を不安そうにしているもう一人。ややぽっちゃりした短い茶髪の、ラルドと同じ年頃の青年。

名前はデイビス＝ダブラス

愛用のアイアンガンランスの手入れをしながら不安そうに辺りを見回す。

「ねえ、もう一時間も経つけど来ないよ？ このままじゃ前みたい時間に時間切れに……」

「だ！ か！ ら！ 街の先輩ハンターが言ってたんだから大丈夫だって。それに、探しに行ってもどこにいるかわからないんだから同じでしょ？」

「だけど」

「もう質問しなくていいように紙に書いてその顔に貼り付けてあげようか？」

「う」

デイビスはしぶしぶ納得して銃槍の手入れに戻る。

ラルドもため息混じりに焦がしてしまった肉を地底湖に放り投げた。

——ちょうどその時、地底湖と砂漠を繋ぐ出入口を一つの影が駆け抜けて行った。

砂色の鱗に特徴的なトサカ。　鳥竜種と呼ばれる小型の竜のシルエット。

ラルド達の今回の討伐対象。　ドスゲネポスだ。

ドスゲネポスは肉が焼ける匂いを感じたのか立ち止まり、首を伸ばして周りを見回す。

そして並んで座っているラルド達を見つけた。

ラルド達はまだ気付いていない。　ドスゲネポスはよだれを滴らしながら二人の後ろに回り込み、距離を詰めていく。

——デイビスははかどらない銃槍の手入れに飽きたのか銃槍を投げ出して伸びをした。

「ね、ラルド」

「探しには行かないからね？」

「違うよ。ドスゲネポスってどんなモンスターなのかな？」

ラルドは少し考える。

「僕も見たことは無いけど……たしか砂色の鱗でトサカのあるドスランポスみたいな……」

——瞬間。

ラルドは弾かれるように立ち上がり鞘に差したままの太刀で、今まさにデイビスに食らい付こうとしていたドスゲネポスの牙を受け止めていた。

「まあ、こういうモンスターみたいだね」

そのまま抜刀、流れるような動きで初太刀を浴びせる。

一方のデイビスは慌ててしまい、銃槍を拾おうとして転んでいた。

「ふっ！」

初太刀で怯んだところに突きで追撃する。

反撃で噛み付いて来たのを切り払いながら横に避けながら、ドスゲネポスの動きを見る。

筋肉の動き、予備動作、視野の範囲。攻撃を避けながらそれを慎重に見極めていく。

「だいたいドスランポスなんかと変わらないか……」

——なら恐くはない。

意識を太刀に集中させ強引に踏み込んだ。  
降り下ろされる爪を紙一重で避け、懷に潜り込み太刀を振るう。

「はあああつ！！」

——氣刃斬り。

“練氣”で練り上げた“氣刃”を太刀に纏わせ、一気に敵を斬り刻む太刀の大技。

ドスゲネポスの鱗が弾け、血飛沫が上がる。

ラルドはそのままの流れで身体を捻り、尻ぎ払うように太刀を振るった。

——大回転斬り。

ドスゲネポスの胸元から一気に血が吹き出した。

小さく、空気が漏れるような鳴き声を上げ、その身体が地に沈む。

「……ふう」

ドスゲネポスの呼吸が止まるのを確認する。ラルドはほっと息を吐き地面に転がっていた鞘を拾い上げると静かに納刀した。

「討伐完了……と」

「うー、また失敗しちゃったよ……」

デイビスは落ち込んだように肩を落とす。  
ラルドは笑ってデイビスの肩を叩いた。

「気楽にいけばいいよ。　まだハンターになって一週間の新米なんだし」

「ラルドだって僕と同じ一週間なのに……。　それにしてもよく後ろから来てるってわかったね」

「ん？　ああ、うん」

ラルドはポリポリと頭を掻いた。

「なんとなく危険が近づいてくるとわかるんだ。　首筋がチリチリするって言うか……」

「へー、なんだか凄いね」

デイスは素直に関心したように眼を輝かせている。

そういう眼で見られると悪い気はしない。

ラルドは照れた顔を隠すようにドスゲネポスの死体から素材を剥ぎ取りにかかった。

——二人を見つめる赤い瞳の存在にはまだ気付かずに

## No.2 乱入

「——っ?!」

ドスゲネポスの剥ぎ取りを終えたところでラルドは突然立ち上がった。

首筋の毛が逆立つような感覚。

自分の何かが危険を伝えるサインだ。

しかも先程のドスゲネポスの襲撃より遙かにはつきりと感じ取れる。

「どうしたのラルド?」

デビスが麻痺牙を剥ぎ取りながら聞いてきた言葉には答えない。

背中の太刀に手をかけ地底湖の奥、暗闇になっている場所を睨む。

気配は無く。何かいるかは暗くてよく見えない。

しかしラルドはそこに何かいると確信を持っていた。

ゆっくりと太刀を抜く。

すると突然そこに二つの紅い光が現れた。

ラルドは我が目を疑った。

だがそれは間違いなくそこに存在している。

ゆつくりと闇の中から現れたのは漆黒のなめらかな体毛、鋭い棘の生えた尻尾と前足に付いた冷たい輝きを宿す刃、そして紅く妖しく光る双眼の持ち主。

「じ……迅竜……ナルガ……クルガ……？」

ラルドは驚愕した。

“密林の暗殺者”とも呼ばれるナルガクルガ。本来ならばその二つ名が示すように、木々が生い茂った密林などの土地を好む。

砂漠に現れるなど聞いたことがない。

しかし今はそれは些細な問題だった。

「逃げるよ……デイベス」

「う……う、うん」

ナルガクルガは熟練のハンターでも手を焼くような飛竜だ。

勝ち目は無い。選択すべきは逃げの一択。

ラルドとデイベスは地底湖の出口に向かって走り出そうとした。しかし、3歩も進まないうちに回り込まれる。

「はや……っ!？」

次の瞬間にはラルドの身体はナルガクルガの尻尾に尻ぎ払われて

いた。

硬い地面に叩き付けられる。

「か……は……」

あまりの衝撃に息が止まった。

デイベスが半分悲鳴のような声を上げて駆け寄ってくる。

なんとか立ち上がろうとするが足に力が入らない。

ナルガクルガは喉を鳴らすとラルドとの距離をギリ…ギリ…と詰めてくる。

膝をついたまま太刀を構えるが、ラルドの手は震えていた。

デイベスに至っては半泣きになりながらラルドにしがみついている。

ナルガクルガはチロリと舌を出すとラルドに狙いを定め、飛びかかる体勢に入る。

「く……」

立ち上がろうとするが、すでにラルドの身体は恐怖に飲まれていた。

筋肉が硬直してしまい動かない。

ラルドは絶望を感じた。

次の瞬間、ナルガグルガは前足の刃を振りかざしながら飛びかかって来た。

——ラルドは思わず目をつぶった。

だがその瞬間に思いがけない声が聞こえた。

「動くなよ新米!!」

突然の声。ラルドの耳に金属が激突するような音が聞こえた。

(……………何だ?)

ラルドは恐る恐る目を開ける。

と、目の前には紅い大剣を片手で構えた赤髪の青年と、その隣で弓を構える腰まで届く金髪の、小柄な少女という見知らぬ二人組がいた。

「よお、大丈夫か」

赤髪の青年が振り返り尋ねてきた。

「え? ……あ、あなた達は?」

ラルドの口から真っ先に頭に浮かんだ疑問が出た。

「ん? ああ、俺はクロウでこっちのちっこいのがモニカ、俺達は……………」

「クロウさん、今はそんなことしてる場合じゃないと思うんですが……」

モニカと紹介された少女がクロウと名乗る赤髪の青年をたしなめた。

「……それもそうだな。」

クロウは赤い前髪をかき上げると片手で大剣を持ったままナルガクルガの方に向き直る。

ナルガクルガは狩りを邪魔されたせいかかなり気が立っているようであった。

「おい、新米二人組、しばらくそこで伏せてろよ」

クロウがナルガクルガの方を向いたまま言った。

「ちゃっちゃと終わらせるからよ」

そう言い終わると同時に、クロウは大剣を持っているとは思えない俊敏さでナルガグルガの懐に入っていた。

ナルガグルガにとってもその速度は予想外だったらしく、一瞬動きが止まる。

クロウはその隙を逃さずナルガグルガの身体を尻ぎ払った。

信じられないことにナルガクルガの身体が一撃で吹き飛ばされた。

鮮血を巻き散らしながら硬い地面を転がる。

ナルガクルガも立ち上がり、反撃を繰り出すもののクロウはそれを容易く大剣で受け流し、反撃を加えていく。

完全に動きを見切っている。

だがナルガクルガも黙ってやられてばかりではなかった。

突然に攻撃のパターンを変え、クロウの振るった大剣をバックステップでかわし、空振りの隙を狙って飛びかかって来る。

「危ない！！」

ラルドは思わず声を上げた。

だがクロウは避けようという素振りさえ見せない、それどころかその口元には余裕の笑みさえ浮かんでいる。

ナルガクルガの攻撃がクロウに当たる寸前、それまで全く手を出さなかったモニカが動いた。

数本の矢をまとめて弓につがえ、一瞬で放つ。

放った矢の一つがクロウを切り裂こうとしていた刃翼を碎いた。

さらに残りの矢がナルガクルガの腕や目を貫く。

あまりの苦痛にナルガクルガはふらついた。

それと同時に最初に見せた以上のスピードでクロウはナルガクルガに肉薄し、大剣を両手で握りしめる。

——そこから先はラルドの眼で見ることは叶わなかった。

ただ気付いた時にはナルガグルガの首が宙を舞い、少し遅れて辺りに血の雨が降ってきていた。

### No.3 ギルドカード

「うっし、討伐完了。生きてるか新米」

クロウは大剣についた血を拭き取りながら言った。

本来なら腕力自慢のハンターでも両手でしっかりと持たなければいけない大剣を、まるで重さなど感じていないかのように片手で軽々と扱っている。

(……どれだけ力あるんだ?)

ラルドがそう思っているとモニカが走りよって来て、ラルドの身体を触り始めた。

「ちよっ……！ なっ、何して!？」「動かないで下さい!」

大人しそうな見た目からは意外な程強い口調で遮られる。

そのままラルドはしばらくの間、モニカに身体のおちこちを触られていた。

女の子に触られるというのには慣れていない。ラルドはばつが悪そうにデイベスと眼を合わせる。

「骨は……折れてませんね」

モニカはほつとしたように胸を撫で下ろすと、自分がしていたことが恥ずかしくなったのか急に顔を赤らめた。

「あ……す、すみません。初対面の相手にいきなり……と、とりあえずこれをどうぞ」

モニカは慌ててそう言うとラルドに回復薬を渡した。

「あ……うん、ありがとう」

そう言うとラルドはすっと立ち上がった。

「それで、あなた達は？」

「ああ、そっぴや自己紹介の途中だったか？ まあ、詳しくはこいつを見てください」

と、クロウはギルドカードを差し出した。

モニカもそれに習いギルドカードを取り出す。

ギルドカードの交換はハンター同士の挨拶。名刺交換のようなものだ。

ラルドとデビスも慌ててギルドカードを取り出した。クロウ達と交換し、眼を通す。

まずはクロウのカード。

ラルドの安っぽい紙製のものではなく、何かの鉱石を散りばめた金色だ。

名前：クロウ＝レッドハート

HR：9

出身地：ノーティス

年齢：20歳

（HR9……最高ランクのハンター……）

ラルドはギルドカードに書かれた数々の功績に眼を通していく。

隣ではデイビスが「おゝ」や「うわゝ」と感嘆の声を出していた。

一通り見終わり、次にモニカのカードに眼を移す。

名前：モニカ＝セフィリム

HR：8

出身地：ノーティス年齢：15歳……

（15歳?!）

思わずラルドはその部分を見直した。

（僕より2つ年下……なんかへこむな……）

「あの………どうかしました？」

「なんでもないよ………なんでも………」

ラルドは惨めそうに答えた。

クロウがラルドのギルドカードを読み終わり顔を上げる。

「あゝ、ラルドとデイベス……だな？」

「あ、はい」「はい」

二人は同時に返事した。

クロウは二人を順に見ると小さく頷く。

「新米がいる狩場にナルガクルガが迷い込んだって緊急依頼を受けて来たんだが、まあ間に合ってよかった。

とにかく早く街に帰った方がいいぜ、まだ他に何かいるかもしれないしな」

ラルドは先程ナルガクルガに襲われた時の事を思い出した、まだ足も少し震えている。

とにかく今は帰りたい。

「……わかりました。すぐに帰ります。……あなた達は？」

「私達はまだ少し用事があるので、少し残ります」

「そ、そうですね、じゃあ気を付けて」

そう言つとラルドはデイベスと一緒にモドリ玉を使った。

——クロウはラルドがいなくなったのを確認するとナルガクルガの死体の方を見た。

隣にモ二カがそつと寄り添う。

「砂漠に現れたナルガクルガ……か、やっぱこれも例の件がらみか？」

「そうかもしれませんね……このナルガクルガはレイスさんに引き渡しましょう」

「となると殺したのはまずかったな……」

「レイスさん、怒るでしょうね……『よくも貴重なサンプルを』とか言つて……」

二人は同時にため息をついた。

## No.4 少年(?)

——北の街 ノーティス

この街ではほぼ毎日のように雪が降り、雪の重みに耐えられるような頑強なれんが造りの建物が整然と並んでいる。

街の中央には巨大な時計塔がそびえ立ち、夜の街に鐘の音を響かせていた。

——すでに日はとつぱり暮れた。

ラルドとデイビスの二人は砂漠との気温差に震えながら雪に覆われた大通りを歩いていく。

「なんだかすごい経験しちゃったね」

「……あまり経験したい経験じゃないけどね」

ラルドは疲れたように白い息を吐いた。

いきなりのモンスターの乱入。あれがしょっちゅう起きては命がいくつ有っても足りない。

「けど僕はG級ハンターの人と知り合えて良かったな」

「……今さらだけど、デビスの神経のず太さがうらやましいよ」

「えへへ」

「あまり誉めてる訳でもないんだけどね」

そんなことを話しながら歩いていき、二人は集会所の前にたどり着いた。

一際大きな建物で、窓からは暖かい光が漏れている。

「寒い、早く入ろ」

「……………うん」

——ハンターになり一週間。ラルドは集会所に入る時 少し憂鬱になる。

ラルドは扉を開けた。

——集会所の酒場には大勢のハンターが溢れていた。

軽く酒を飲みながら大声で獲物の話をする者達や、まだ血の跡がこびりついたままの武器を背負った者、素材や報酬を数える者など

様々だ。

外とはまったく違う空気に包まれた場所。それはこの場所が、より自然や野生というものに近いからであろう。

何人かの視線が新しく入ってきたラルドとデイスに向けられる。

——この視線には二つの意味がある。

一つは、この酒場の雰囲気馴染めていない新米ハンターへの好奇の視線。

そしてもう一つは……

「おう、かわいい“お姉ちゃん”！ こっち来て一緒に飲まないか？」

そんな声がラルドに対してかけられる。

——これは別に、そのハンターの眼が悪いとか幻覚を見ている等ではなく、ラルドに対するわりと普通の反応なのだ。残念ながら。

ラルドの容姿を詳細に説明しておこう。

黒曜石のような色のぱっちりした瞳に、別に手入れした訳でもないのに艶やかな髪。

まだ幼さの残る中世的……というよりやや少女寄りな顔立ちで、ハンターとしてはかなり華奢な体型。

つまり一見すると少女に見えてしまうのだ。

ちなみに、デビスとの出会いは、ハンター登録した日にデビスの方から話し掛けて来たのをきっかけにチームを組んだのだが、その声を掛けてきた理由が『男の人と組むのは怖かったから女の子と組みたかった』である。

ラルドは思い切りため息をついて大股で声を掛けてきたハンターに近付いていく。

そしてそのハンターの手を取り、自分の胸に押し当てた。

「僕、男ですから間違えないでくださいね？」

につこりと、殺気を込めた笑顔を浮かべる。

「あ……お、おお。 すまん……」

ここに来てから毎日こんな調子だ。 幸い少しずつ自分を女の子と間違えるハンターは減ってきたがまだ相当数いる。

もう一度ため息をついてクエスト受付の方に行くと受付嬢が必死に笑いを堪えていた。

「……………クエスト達成です」

「こち……ぶっ……こちらが……報酬金です」

革袋に入ったお金を受け取る。

そしてラルドは足早に集会所を出ていった。

## No.5 ハンターの登竜門1（前書き）

とまあ書き始めたモンハン小説

ここまで読んでくれた方々ありがとうございますm（――）m

二次創作というオリジナルに比べて低く見られがちですが、そんなのを跳ね返せるような小説目指して頑張ります（o・・・）b

あと、もしよろしければ感想なり批評なりアドバイスなりもらえる  
と狂喜乱舞しますのでよろしくお願いします（笑）

（この作品は2ndGをベースにしております）

## No.5 ハンターの登竜門1

砂漠でのナルガクルガとの遭遇、そしてクロウとモニカとの出会いから二週間後。

ラルドとその友人、デイビスは森丘に来ていた。

「うゝ、緊張してきたよゝ。やっぱりまだ早かったかなゝ？」

デイビスは辺りをキョロキョロ見回しながら言った。

「今さら遅いよ？ イャンクックを狩りに行こうって言ったのはデイビスなんだから、いい加減 覚悟を決めないと」

そう、彼らはハンターの登竜門とも言うべきモンスター、イャンクックを狩りに来たのだ。

話はさかのぼること6時間前

「ねゝねゝラルドゝ、一緒にイャンクック狩りに行こうよゝ。」

集会所の酒場で朝食を食べていたラルドにデイビスはそう持ち掛けてきた。

それを聞いたラルドは少し驚いた。

ハンター登録をして成り行きでチームを組んでからすでに三週間。

デビスは人のクエストについて行くことはあっても自分からクエストに誘って来ることはめったになかったからだ。

「珍しいね、そんなこと言うなんて。どっという心境の変化？ それとも明日は槍が降る日？」

「えへへ、これだよ」

ラルドの皮肉にも気付かず、デビスは鞆から一冊の雑誌『狩りに生きる』を取り出して続ける。

「この本の特集にね、イャンクックとの戦い方が書いてたんだ、それを見てたら僕でも倒せる気がしてきてさ」

デビスは目を輝かせている。

「もろに死亡フラグ……」

苦笑いしつつもラルドは考えた。

動機は不純なもの、自分もハンターデビューして三週間、そろそろ大型モンスターに挑んでもいい頃だ。

そしてイャンクックはその最初のモンスターとしてはうってつけである。

「よし、いいよ」

かくしてラルドとデビスの初めての大型モンスター狩猟は幕を開けたのであった。

+

「さてと、まずはイヤクックがどこにいるかだね」

ラルドは地面に地図を広げていた。デビスは横からそれを覗いている。

「普段は餌を探してあっちこっち飛び回ってるらしいから居場所は不明。……とはいえ、あんまり探すのに時間はかけたくないし……」

「えへへ、ラルド、それなら良いものがあるよ」

デビスはしたり顔でそう言うと、アイテムポーチから変わった色の液体を取り出した。

「なにそれ？」

「千里眼の薬って言ってね、飲むと第六感が鋭くなってモンスターの居場所がわかるって雑誌に書いてたんだ」

デビスは得意満面といった顔で説明する。

どうやら伊達に雑誌で勉強したわけでは無さそうだ。

「へえ、便利そうだね。じゃあ早速使ってみようか」

「そうだね、じゃあはい」

そう言って当たり前のように 千里眼の薬はラルドの手に押し付けられた。

「……へっ？」

「僕はちょっと怖いからラルドが飲んでよ」

デビスは無邪気に笑っている。

「いや、怖いものに押し付けないでよ」

「だってぼく、お薬苦手だもん」

「それでよくハンターになれたね……。 とうかそれじゃ回復薬とかどうしてるの？」

「そのままだと不味いからハチミツで30倍位に薄めて飲んでるんだ」

「……モンスターにやられるより先に糖尿病で死ぬよ？」

ラルドはため息をつきながら、一息に千里眼の薬を飲み干した。

——ラルドは自分の感覚が研ぎ澄まされていくのがわかった。

森丘の風の流れ、木々のざわめき、小動物の気配さえもわかる。

そして研ぎ澄まされた感覚がラルドの求めていた気配を見つけた。

「……エリア10だ」

ラルドが静かにそう言うと、デイビスは目を輝かしている。

「凄いやラルド、本当にわかるんだね」

（…そういう薬だって言ってたのはデイビスでしょ……）

ラルドは少し呆れながらそう思ったが、まずはエリア10に向かうことにした。

約10分後、エリア10

ラルドとデイビスは木の影に隠れてイャンクックの様子を伺っていた。

「あれがイャンクック……」

「おつきなくちばしだね」

イャンクックは池の水を飲んでいた。ラルドは少し緊張しながら

太刀に手をかける。

（大丈夫……今まで通りにやればいいだけ。僕ならできる）

ラルドは自分にそう言い聞かせるとイヤンクックに向かって走り出した。

イヤンクックがこちらの気配を感じたのか辺りを見回している。

ラルドの耳には自分の心臓の鼓動の音が聞こえていた。

イヤンクックがこちらに気付き威嚇の動作に入るのが見えた。

ラルドの鼓動の音はどんどん早くなっていく。

背中の太刀を抜き払い、思い切り降り下ろした。

## No.6 ハンターの登竜門2

降り下ろした鉄刀【神楽】が肉を切り裂き、辺りに鮮血が飛び散る。

さらにラルドは同じ場所を狙い突きを放つ。

（よし、切れ味は十分……。後はいつも通り距離をとって……）

切り払いながら後ろに下がろうとしたその時。イヤンクックの突進が迫ってきた。

（——っ！）

動きはさほど速くはない。

だが、これまで戦ってきた中型モンスターとの体躯の違いゆえに引き際を見誤った。

ラルドは無理に身をよじってかわす。

そのままイヤンクックは木の影に隠れていたデイベスに向かって行った。

「まずい！ デイベス——！」

ラルドは体勢を立て直しながら叫んだ。  
しかしデイベスは意外にも落ち着いていた。

背中からガンランス特有の大きな盾を取りだし、イャンクックの攻撃を受け止める。

さらに持っているガンランスでイャンクックの顔突き刺した。

（へえ、意外に頑張る）

ラルドは太刀を握り直した。

「僕も負けてられないね」

ラルドもイャンクックに向かって行く。瞬く間に距離を詰め太刀を振るう。

「今度はさっきみたいなミスはしない！」

前後からの挟撃。常にどちらかが相手の死角に入るという集団戦の基本を二人は図らずも実践していた。

イャンクックは2人の攻撃を後ろに飛んで逃れた。さらに顔を上げ、口には何かをため始める。

「っ!!」

首筋の毛がチリチリと逆立つ感覚。

——危険。

「あわわ、ラルド逃げてっ!!」

デイベスは慌てて後ろに下がって行く。

次の瞬間イャンクックの口から大量の火炎弾がばらまかれた。

「それはちよつとさすがに勘弁……うわっ?!」

ラルドに向かって火炎弾が降り注いでくる。ラルドは地面を転がると四つん這いになりながら火炎弾をかわして行く。

その時、ラルドはイャンクックが隙だらけなことに気付いた。

（そう言えば……敵の攻撃はこちらの攻撃の時でも有るって訓練所の教官が言ってたっけ……なら）

火炎弾を地面に身を投げ出してかわした瞬間、ラルドは太刀を逆手に持ってイャンクックに投げつけた。

不意を突かれたイャンクックの身体に太刀が突き刺さった。

さらに追い打ちをかけるように後ろからデイベスが接近し砲撃を浴びせる。

たまらずふらつくイャンクック。

それをチャンスと見たラルドは一気に近付くとイャンクックの身体に刺さったままの太刀をさらに深く押し込んだ。

イャンクックの身体から大量の血が流れ出す。

ラルドは太刀を引き抜き距離をとった。

デイベスの方はさらに後ろに下がってガンランスをガチャガチャといじっている。

(デイベス……?)

一瞬ラルドの頭に疑問が浮かんだが、その疑問も、風ぎ払うように振るわれるイヤンクックの尻尾を見て吹き飛んでしまった。

とっさにしゃがんで避け、地面を転がりイヤンクックの足下を抜ける。

——背後を取った。

「もらった!」

ラルドは勢いよく太刀を振り上げた。

——その瞬間だった。

首筋の毛がチリチリと逆立つ感覚。  
しかもかなりはつきりとした気配。

何か危険が間近に迫っている。

「——あ」

後ろでデイベスの間の抜けた声が聞こえた。

「デイベス! どうし……あ?」

咄嗟に後ろを見たラルドが見た光景は、砲口から青い炎の漏れるガンランスを構えたデイビスの姿だった。

「――へ？」

ラルドが状況を理解するのに時間はかからなかった。

「……………竜撃砲？」「ゴメーン、ラルド、もう止めな…」

轟音と共にラルドはイャンクックもろとも宙に吹き飛ばされ、気を失った。

――しばらくしてラルドが目を醒ました時、最初に眼に写ったのは息絶えたイャンクックとその横でおおはしゃぎしているデイビスだった。

（……………討伐完了？）

ラルドの身体から力が抜ける。

（僕の……初めての飛竜討伐が……）

するとラルドに気付いたデイビスが満面の笑みを浮かべながら走り寄って来た。

「見てよーラルドー、このヤンクックぼくが止め刺したんだよー」  
ジロツとラルドはデイビスを睨んだがデイビスは気付かない。

「いやー、すごいねぼく。ラルドが気を失ってから頑張って一人で……」

「……ねえ？ デイビス？」

ラルドの殺気に気付いてデイビスの動きが止まった。

「え？ あれ？ ……ラルドー？ め……目が怖いよー？ ほら、笑って笑って……」

「今まで我慢してたけど、ちょっと歯を食い縛ろっか？」

「こ……怖いよラルドー。ほ、ほら、ラルドはせつかく女の子みたいな顔してるんだから笑ってた方がかわいいよー」

ラルドの額に血管が浮き上がる。

「ねえデイビス？ コンプレックスって言葉知ってる？」

森丘にデイビスの悲鳴が響き渡った。



## No.7 間近の死

——イャンクックとの戦闘から数時間後、ラルドとデイビスはクエストの成功を街の集会所のギルドマネージャーに報告していた。

「フーン、じゃあ遂にラルドちゃんとデイビスちゃんは大型モンスターを討伐できたわけね。

……それにしても」

マネージャーはボロボロになった二人の格好を見てクスリと笑った。

「ずいぶん苦戦したみたいね？」

「あゝ、これはラルドが……」

デイビスは何か言いかけたがラルドに睨まれたのでやめた。

「そうそう、二人にいいニュースがあるわよ」

「いいニュース？」

ラルドが聞くと、ギルドマネージャーはこくりと頷く。

「あなた達のHR昇格の為の試験クエストが入ったわ」

——試験クエストとは、H R 1の新米ハンターがH R 2に昇格するためのクエストである。

試験クエストは、そのハンターがギリギリ倒せるかどうかというモンスターが討伐対象に選ばれる。

これまでとは違い、生半可な準備では攻略できないクエストだ。

ただその代わり、付き添いとしてG級ハンターが同行し、万が一の時は助けてもらえるためある程度の安全は保証されている。

「具体的には何をするんです？」

マネージャーは書類に眼を移す。

「あなた達には指定されたモンスターを一人で討伐してもらうわ、討伐できれば即昇格、簡単でしょ？」

「えゝ、一人なの？」

デビスは不安そうな声を出す。

一方のラルドは「よし」と小さく声を漏らした。

「それとH R 1のハンターの試験クエストに限り、いざというときの為にG級ハンターが同行するけど、彼らはあくまでもいざというときのための同行だからそれ以外はあまり期待しないでね？」

（……G級ハンターか、どんな人がくるんだろ）

「簡単な案内は手紙でゲストハウスに届いてるわ。」

けど詳しいクエスト内容は当日発表になるから今日はゆっくり休んでおきなさいね」

「はい」

「わかりました」

二人はそう言うと集会所を出ていった。

「……僕はこの後、必要そうなのを買いに街を回ろうと思うけどデイベイスはどうする?」

ラルドが声をかけるとデイベイスの顔が綻んだ。

ラルドがまだ怒っているとは思っていたのか表情が柔らかくなる。

「ぼくは早く帰りたいかな?」

「そっか、じゃあここでいったんお別れだね」

「うん、それじゃ。二人一緒に合格しようね」

お互いに手を振り合い、それぞれ反対の道を歩いていく。

ラルドが目指しているのはギルドの近くにある、通称ハンター通り。

ハンターが使う武具やアイテムが数多く売られている場所だ。

（とりあえず買っとくのはまずは回復薬に砥石。あとは閃光玉に……念のため爆弾系なんかも。それに……）

ラルドは必要なものを指折り数えながら歩いていく。

大切な試験だ、準備し過ぎということはない。

頭の中で図鑑に有ったさまざまなモンスターを思い浮かべながら、それぞれに有効なアイテムを考える。

と、その時 胸に軽い衝撃があった。

「おっと」

「うわっ?!」

子供の小さな悲鳴。 見下ろすと少年が尻餅をついていた。

考えに集中し過ぎてぶつかってしまったらしい。

「あ、ごめんごめん。大丈夫？」

そう言ってラルドは少年に手を差し出す。

——その瞬間だった。

「っ！！！！！」

咄嗟に手を引いた。

少年に手を差し出した瞬間。 身体中が総毛立ったのだ。

普段、自分に迫ってくる危険を知らせてくれる『何か』  
その『何か』が全力でラルドに『その少年に触れるな！』と命じたのだ。

「……どうかした？ お兄ちゃん」

尻餅をついた少年はきょとんとした顔でラルドを見上げる。

よくよく見ると不思議な少年だ。

おそらく歳は十歳かそこら

焦げ茶色の髪に獣を思わせる金色の瞳

着ている服は真っ黒な黒衣で、サイズがまったく合っておらず、  
だぶだぶだ。

「お兄ちゃん？」

「え？ ああ、ごめん」

慌てるラルドを見てくすりと笑いながら、少年は反動をつけて立ち上がる。

「いたた、お尻打っちゃったよ。どこ見て歩いてんのさ、も」

「……ごめん、ちょっと考えごととしてて」

話してみると普通の少年だ。

ラルドは先程の感覚を意識の端に追いやる。

「本当にごめん。怪我は無い？」

「……まあいいんだけどさ。それじゃね、お兄ちゃん。急ぐから」

少年はそう言うラルドの横を通り抜け、駆けていく。

ラルドはその後ろ姿をばつが悪そうな顔で見送っていた。

十

「ねえ、影」

ラルドが見えなくなったところ、少年は小さくそう呟いた。

するといつの間にか、少年の後ろに“忍”と呼ばれる防具に身を包んだ男が現れていた。

「御用でしょうか……」

「さっき僕がぶつかったお兄ちゃん。知ってる？」

男は少し黙る。

「いえ……装備を見た限り下位のハンターのようにですが……いかがされました？」

「ん？　なんか面白そうだったから気になってさ」

そう言つと少年はぶかぶかの黒衣の袖から手を出す。

——その手には一本のナイフが握られていた。それも、刃には紫色の液体——毒がたっぷりと塗られている。

「おもしろいよね。」 “気付いて” 無いのに“感じた” んだ。  
何者なんだろう？　あのお兄ちゃん」

少年はけらけらと無邪気な笑い声を上げながらナイフをしまつと、そのまま街の喧騒の中に消えていった。



## No.8 試験の内容は

——そして試験クエストの朝、ラルドはゲストハウス（ギルドから提供されている家）で準備に勤しんでいた。

（試験クエスト……どんなモンスターと戦うんだろう……ドスガレオスとかババコンガとかかな？）

そんなことを考え、念のためにポーチに音爆弾や消臭玉も入れておく。

だいたいの準備が整ったところで、太刀の刃を確認した。

昨晩は眠れなくなり、その分手入れに当てたおかげか刃こぼれ一つ無い。

鞘に納め背中に背負うと軽く伸びをした。

「そろそろ行くかな」

ラルドは集会所に向かった。

+

「あゝ、ラルド、こっちこっち」

すでにディビスは集会所の前で待っていた。

「今日は珍しく早いね。吹雪でも来るかな？」

「ギルドの天気予報だと今日は吹雪が来る天気じゃないってさ」

噛み合っているようで微妙に噛み合わない会話。ディビスからは緊張感がまったく感じられない。

……そもそも試験クエストのことをわかっているのだろうか？

ラルドがそんなことを考えていると集会所の扉が少し開き、ひよこつとマネージャーが顔を出した。

「あら、二人共揃ってるわね」

ラルドとディビスはマネージャーに簡単に挨拶をする。

マネージャーは満足気に頷くと改めて二人を見た。

「じゃあまずは今回二人に同行するG級ハンターを紹介するわね。クロウ君とモニカちゃんよ」

マネージャーは扉を開ける。

「「あつ！」」

目が合ったラルドとモニカが同時に声を上げた。

そこにいたのは、約二週間前、ナルガクルガに襲われていたラルド達を助けてくれた二人組だった。

しかしそれを見ていたクロウは不思議そうな顔をしている。

「知り合いか？モニカ」

部屋の空気が一瞬固まった。

「あ、あの……クロウさん……ほら、覚えてませんか？  
少し前に砂漠でナルガクルガが出たときに……」

「あゝ、そっぴやナルガにボコられてるのがいたな。  
確か名前は……アルカだったか？」

「ラルドです……」

ラルドは苦々しい顔で言った。

「はゝ、ラルドって凄いなゝ、G級ハンターと友達なんだゝ」

デイビスはキラキラした目でラルドを見つめている。

その現場にデイビスもいたということには、あえてもう突っ込まない。

「え〜っと、話を続けてもいいかしら？」

マネージャーも苦笑いを浮かべていた。

「今回はデビスちゃんにはモニカちゃん、ラルドちゃんにはクロウ君に同行してもらっわ。

で、クエスト内容なんだけど」

マネージャーは二枚のクエスト用紙を取り出して目を通す。

「まず、デビスちゃんには砂漠でのドスガレオスの狩猟に挑んでもらうわね」

「はい」

「で、ラルドちゃんには……」

ラルドはゴクリと息を飲む。

「雪山山頂付近で大猪 ドスファンゴの狩猟に挑んでもらうわね」

「……………ドスファンゴ？」

思わず疑問符がついた。ドスファンゴはこれまで何度も狩ってきた。はつきり言っただけで楽勝な相手だ。

（試験クエストってそのハンターが狩れるギリギリの相手になるはずだけど……もしかして僕、評価悪いの？）

「いいな〜。ラルド〜」

ラルドの心配をよそにデイビスは羨ましそうな表情を浮かべている。

しかしクロウとモニカはまったく別の表情を浮かべていた。

モニカはいかにも心配そうな不安げな表情を。

そしてクロウはいかにも面白いといった感じのニヤニヤ笑いを。

No.9 猪突猛进1

「それじゃあ、よろしくお願いしますね、クロウさん」

「あゝ、敬語使うな。呼び方も呼び捨てでいい」

雪山の登山道を登りながら、ラルドとクロウは話していた。

クロウは燃えるような赤髪をガシガシ掻きながら大きな欠伸をする。

「そうは言われても僕の方が年下ですしHRも下ですし」

「だから敬語やめろっての。なんつーか……むずむずすんだよ敬語で話されると。それにハンター同士は命を預け合うこともあんだ。他人事は止めとけ。ハンターとして成功したいならフランクに、馴れ馴れしく、だ」

なるほど、とラルドは頷く。

確かにそれは一理有るかもしれない。

そういえば自分がハンターになったばかりの時も、周りのハンター達は妙に馴れ馴れしいと感じた。

「……わかった。クロウ。しばらく慣れないだろうけど努力してみる」

「上出来だ」

クロウはニツと歯を見せて笑った。

「けど、クロウと一緒にいた……モニカって子は敬語だったような……」

「あいつはいいんだよ。俺に敬語使っているのはあいつだけだ」

「なんか違う気がするんだけど……」

そんなことを話しながらクロウは周りを見回し、足を止める。

ラルドも並んで足を止めた。

——雪山、山頂付近

雪山の山頂はほぼ垂直の絶壁の頂上に有り、その回りを雪原が囲っている。

テンガロンハット形の地形とも言えはいいだろうか？

「この辺りで……ごほん、この辺りなのか？」

「ああ、……で、俺からのアドバイスだ。今回のクエストはあまり甘く見ない方がいいぜ」

「ちょっとは僕の腕を信用して欲しいな。ドスファンゴぐらいは倒してみせるよ」

「そううまくいくかな……？　っと！　噂をすれば何とかみたいだ

ぜ」

クロウはそう言つと遠くの方を顎でしゃくつた。

ラルドもそちらを見ると確かにドスファンゴがいる。

ラルドは太刀の握りを確認すると不敵に笑みを浮かべた。

「じゃあ、行ってくる」

ラルドはドスファンゴに向かって走り出した。

——走り出して数歩。僅かに違和感を感じた。

（あれ？ もっと近くにいると思ったのにおかしいな？）

——さらに数歩。違和感。

（んっ？ 少し大きいような……）

——走り出して十数歩。

近寄るにつれ、ラルドの表情はどんどん変わっていった。

「な……何ですかこれ?!」

空いた口がふさがらない。

そこにいたのはラルドがこれまで戦ってきたドスファンゴとは比べものにならない……おそらく三回りは大きいであろう超巨大なドスファンゴだった。

「クロウ！ なんなんですかこいつ?!」

思わずラルドはクロウの方を見た。クロウはすでに近くの高台に登り、高みの見物を決め込んでいた。

ラルドの反応が面白かったのか笑いをこらえている。

「しゃべり方変になってるぞ。……そいつはこの季節になると現れる超巨大ドスファンゴ……通称 おつことぬしだ。」

装備によっては熟練ハンターでも手を焼くぐらいだから気を付けろ」

そう言っ てクロウは親指を立てた。

「ちよっ……！ そんなの聞いてませんよ!?!」

「来たぜ」

「へっ?」

ラルドは振り向く間もなくドスファンゴの突進でふつとばされた。



No.10 猪突猛进2

宙を飛び顔面から雪原に突っ込んだ。

雪まみれになりながらも跳ね起き、おつことぬしの突進の追撃を避ける。

首筋に走るチリチリとした感覚。

休む暇もない。おつことぬしは見た目によらない俊敏な動作でこちらに向き直るとさらに突進を繰り返してくる。

今度はさらに速い、牙が腕を掠め鈍い痛みが走った。

突進自体は単調。だがその巨体ゆえに攻撃の範囲が異常に広く、避けにくい。

（なんで最近僕はっかり貧乏くじを引くんだ?!）

ラルドは心の中で毒づいた。

突進を避け様に太刀に手をかけ素早く抜刀切りを浴びせる。

――が

「?! 硬い……」

攻撃はおつことぬしの強靱な毛皮を斬ることができず、皮の表面を流れてしまった。

ラルドは一旦距離をとる。

「クロウ！ 体、切れない！ どう戦えば……」

ラルドが見ると、クロウは持ってきていたホットミートと特産キノコキムチをほおびりながら観戦していた。

「斬り方の問題だ。もっとこうスパーンといけば切れるぜ。スッパーンと」

「訳わからないし説得力もない！」

「わかんなくてもやれ。やりやなんとかなるかも知れないがやらなきゃ敗ける」

「……くっ」

ラルドは太刀を握り直し精神を集中させた。太刀がぼんやりとした光 氣刃 を纏っていく。

迫ってくるおつことぬし。

突進してきたところにタイミングを合わせる。

牙が自分に届くまであと数歩

掠めるのは容認するつもりで身を沈めながら踏み込み、渾身の力で風ぎ払う。

——大回転斬り。

刃が通った。

皮が裂け、辺りに血が飛び散り地面の雪が赤く染まる。

おつことぬしは前のめりに膝をついた。

「……やった」

ラルドは思わず気を抜いてしまった。

「油断すんな！ そいつはまだ来るぞ！」

「え？」

瞬間、首筋の毛が一気に逆立った。

膝が折れ、バランスを崩したと思った瞬間、おつことぬしは強靱な脚力で雪原を踏み締め、無理やり体勢を立て直したのだ。

「っ？！」

おつことぬしは牙を振り回し、凄まじい力でラルドを吹き飛ばす。

ラルドは氷壁に叩きつけられた。

あまりの衝撃に肺から空気が押し出される。

息が止まり、地面に膝をついた。

（終わったかな、こりゃ）

クロウは大剣に手をかけた。

試験クエストで、これ以上は無理と判断しG級ハンターが手を出すことは試験の不合格を意味する。

ラルドの視界の端には大剣を手にするクロウが映っていた。

「く……っ！」

太刀を杖にふらふらと立ち上がる。

そしてクロウの方に手のひらを向け、まだやれるという意味を伝えた。

クロウは小さく口笛を吹くと大剣から手を離し、再び座り直す。

ラルドは頭をフル回転させていた。

（どうする……？ 俺も限界だ……。なんとか一気に決めないと……）

そしてラルドはチラリと後ろの氷壁を見た。

(一か八かやってみるか)

No.11 猪突猛进3

ラルドは氷壁を背にしながら息を整えていた。

おつことぬしを睨みながらポーチを探る。

——閃光玉。

炸裂させると激しい閃光を放ち相手の視力を一時的に奪う道具だ。

あらゆるモンスターに対応できるようにと、念入りに準備していたのがここで生きた。

クロウは二つ目のホットミートを食べながら小さく頷く。

閃光玉の使用はハンターの基本だ。視力を奪ってしまえばこちらに圧倒的有利になる。

（だが普通に斬っても刃が通らねえし、気刃斬りも乱発できるもんじゃない。どうする気だ？ ラルド）

——ラルドはおつことぬしの突進の瞬間、閃光玉を地面に叩きつけ炸裂させた。

おつことぬしの眼が眩み、その場でやみくもに牙を振り回し始める。

——ラルドはそれには向かって行かなかった。

敵に背を向け、背にしていた氷壁に斬りかかる。

クロウはホットミートを食べる手を止めた。

「……なにやってんだあいつは」

クロウもその行動は理解できなかった。やみくもに氷の壁に斬りかかり、弾かれてはまた向かっていく。

ラルドが繰り返し斬りつけた結果、氷壁には亀裂が入っていた。

ラルドは大きく深呼吸する。首筋にチリチリとする感覚が戻ってきた。おそらく間もなくおつことぬしの視力が戻る。

「大丈夫……いざとなったらクロウさんが助けてくれる……大丈夫……多分」

ラルドは自分に言い聞かせ、ポーチから三つ、有るものを取り出した。

——小タル爆弾。

ラルドはそれを氷壁の亀裂に押し込み、一度に三つの導火線に火を付けた。

この行動でクロウにもラルドの考えがわかった。そしてあんぐりと口を開ける。

「あ……の……ば……か……！」

爆弾が爆発し、噴煙が上がった。

爆発の衝撃で氷壁のひびが、不気味な音を響かせながら広がっていく。

そしてこともあろうに、おっことぬしがラルドを狙って突っ込んできた。

ラルドはヒラリと避け、おっことぬしは氷壁に激突する。

氷壁のひびが全体に広がり、不吉な音が鳴る。

辺りを鳴動させる音。　クロウでさえも苦笑いを浮かべる。

「おいおいおいおい……マジか？」

——最初は小さな欠片。そして地響き。凄まじい音をたてながら山頂の一部が崩落した。

「あの馬鹿野郎!!」

クロウはホットミートを投げ捨てて走り出した。

凄まじい脚力で一気に加速、ラルドの元へ向かう。

「ま……まずい……！まさかここまで派手に崩れるなんて……」

次々と降り注ぐ自分より大きな氷塊。ラルドにとってもここまでの崩壊は予想外だった。

ラルドめがけて氷塊が降ってくる。

「うわああああ?!」

ラルドが悲鳴を上げたその時、クロウの大剣テスカ・デル・ソルが激しく火を吹いた。

クロウは自分に降ってきた氷塊をはね飛ばしながらラルドに向かって落ちてくる氷塊に狙いを定め大剣を投げつける。

命中。氷塊は大剣が当たると真っ二つに割れ、ラルドへの直撃を避けた。

「す、凄い……」

あっけにとられるラルドにクロウが近づいてくる。

「こんのばつか野郎！」

クロウのげんこつが飛んできた。

「……つつつ?! 痛つつた〜!!」

「おまえのせいでホットミートがなくなっただろーが！」

「怒るのそっち!？」

クロウは少し表情を和らげた。

口元に笑みを浮かべ、くしゃくしゃとラルドの髪を撫でる。

「たくつ。無茶苦茶しやがって」

「まあ……我ながら。でも討伐はできたでしょう?」

「……まあな」

クロウはチラリと氷塊に埋まったおつことぬしを見た。

身体の半分以上が潰され、飛び出した足がピクピクと痙攣している。

（無茶苦茶はしたが、こんな作戦をとっさに思いつく判断力……それにその前に見せたタフさは悪くねーな）

改めてラルドを見る。 かなりのダメージを受けていたはずなのに意外なほど元気だ。

（鍛えればいいハンターになれるかも……。  
まあそれ以前に何より）

クロウは無惨に崩れさった氷壁を見た。

（このままこいつを野放しにしてたら何するかわからねーし、  
ちよ俺が鍛えてやるか）

No.11 猪突猛进3（後書き）

なんか毎日アクセス650数が越えてくる。

前回書いたやつとペース違い過ぎてびびってますが何はともあれありがとうございます（笑）

せつかなのでこのままモンハン二次創作の頂点でも狙ってみるとしますかww

これからもよろしく願いしますm（——）m

さてさて、次は現在唯一の女性キャラであるモニカを中心に書いていきますね。

## No.12 終わって帰って

+

ノーティスの集会所に着いたとたん、デイベスがラルドに抱きついてきた。

「やったよ。ラルド、僕クリアできたよ」

「へ？ デイベスも受かったの？！」

「うん、突きと砲撃のコンボが上手いって誉められたよ」

デイベスはニツコニコだ。

腕をブンブン振り回しながら全身で喜びを表現している。

「あ、ラルドにも見せたかったな。こう盾でガードして、突いて突いて砲撃ってさ。後は竜撃砲を他の人に当たらないように使えばもっと強くなれる、だって」

「……………」

ラルドはチラリとデイベスに同行していたモニカの方を見た。

綺麗な金髪が所々すすけ、服も一部焦げている。

(デビース……またやったね……)

ラルドの視線に気が付いたのか、モニカはラルドの方に来た。

にこりと笑ってラルドを見る。

「合格、おめでとございます!」

「え? ああ、ありがとうございます。 モニカさん」

「クロウさんも言ってたと思いますけど敬語じゃなくていいですよ、私の方が年下ですし」

モニカはクスクス笑ってそう言った。

ハンターとは思えないかわいらしい笑顔。

その笑顔を向けられているだけでラルドは頬が熱くなるのを感じた。

二人きりでクエストに行っていたデビースが少し妬ましい。

モニカはラルドが頬を赤くしているのを不思議そうに見ながら続ける。

「もし良ろしければ、このあと私の家でお二人の昇格をお祝いしたいんですが……どうでしょうか?」

「へ……へえ、お祝いなんてしてくれるんだ。じゃあ行こうかな」

「僕も行くよ」

それを聞いたモニカはぱあっと花が咲くような笑顔を浮かべた。

嬉しくて仕方ないというようにニコニコ笑いながらラルドの手を握る。

「ありがとうございます。お二人に楽しんでもただけるよう、頑張りますね」

「え、あ、ああ、よろしく」

「じゃあ行きましょうか、私の家は街の外れにありますから」

モニカはそう言うとはたばたと集会所を出ていく。

ラルドは先程握られた手を見ながら、ぼんやりとクロウの方を見た。

「あのモニカって女の子、おとなしそうに見えたけどいつもあんな感じ？」

「いや、あんなはしゃいでるのは珍しいな。なんかいいことでも有ったんじゃないか？」

「……ちなみにクロウとあの子ってどんな関係？」

「んあ？ あゝ、兄妹みたいなもんか。何でだ？」

ラルドはモニカに握られた手をにぎにぎとしている。クロウの

言葉に反応しない。

「……おいラルド？　なにぼけつとしてんだ？」

「え？　ああいや、別に。　とりあえず兄妹みたいな関係なんだね？　なるほど」

「？」

クロウはうるんそうな顔でラルドを見る。

だが外から聞こえたモニカの声でそれも止めた。

「行こうぜ、モニカが待ってる」

「うん！」

ラルドは元気良く返事をする。と集会所を出ていった。

「それでね、そのあとドスガレオスを……あれ？」

デイビスはようやくラルドがいないことに気付いた。

あわててラルドの後を追っていく。

「待つてよ、ラルド、置いていかないでよ」



## No.13 アイルー

「モニカ……まだ着かないの？」

ラルド達がモニカの家を目指して歩き初めてからすでに一時間が経っていた。

すでに街並みは途切れ、森の中の道を進んでいく。

さすがに狩りから帰ってこの距離を歩くのは辛い。

「えっと、もう少しです。あっ、ほら、見えましたよ」

モニカがそう言って指さした先にあったのは――。

くすんだ色の壁、あちこちに修繕した跡らしきつぎはぎがある屋根の、大きな屋敷。正直かなり寂れた印象を受ける。

「あれが私の家です」

モニカは少し照れくさそうに笑った。

(……………なんというか……………ボロボロだな)

「うつわ、ボロッボロだね」

デビスは無邪気に言い放つ。

「……デビス……それは思っても言っちゃ駄目だよ……」

「うふふ、いいんですよ、本当にボロボロですから。じゃあ私は家の裏の畑でお料理に使う材料を取ってきますから、ラルドさん達は先に中に入ってて下さい、鍵は開いてますので」

「んじゃ、俺はモニカの方を手伝うとすっか」

クロウは腕まくりしながら言った。

「そんな……悪いですよ」

「気にすんな、ペピポパンキンなんかはお前には少し重いだろう？  
力仕事は俺がやるから、お前は持てるもんだだけでいい」

そう言つてクロウはモニカの頭をぽんぽんと叩く。

モニカの頬が少し赤くなった。

「あ……じゃあ、お願いします」

そして、クロウとモニカは畑に向かった。

一方、ラルドとデビスは屋敷の大きな木の扉の前で立ち止まる。

「『鍵は開いてますから』ってずいぶん無用心なんだな……」

ラルドは呟くと、ちらりと畑の方に向かうモニカの後ろ姿を見た。

しばらくその後ろ姿を目で追い、モニカの姿が見えなくなると扉の方に視線を戻す。

「……まあいいや、デAVIS、先に入らせてもらおう」

ラルドは家の扉を開けた。

——屋敷らしく広い、それでいて外観とは違いこぎれいなエントランス。中にいた数十匹の猫型の獣人『アイルー』達が一斉にラルドとデAVISの方を見た。

……………。

「あれ……、誰だニヤ？」

一匹のアイルーが他のアイルーに尋ねる。

「知らない人達だニヤ」

「オイラも知らないニヤ」

「うちも知らんニヤ」

「もしや……泥棒ニヤ？」

「！！ きつとそうニヤ！」

「侵入者ニヤ！」

「皆のものゝ、出会え出会えニヤゝ！」

一匹が叫ぶとどこからともかくアイルー達が湧いてくる。

あっという間にエントランスは無数のアイルー達に埋め尽くされた。

「え？　ちょ？」「なんなの？」

突然のことにラルドとデイベスはおろおろと戸惑う。

ラルドは首筋にチリチリとした感覚を感じていた。

「ご主人がいない間はオイラ達がこの家を守るニャ！」

アイルー達は一斉に思い思いの武器を構えた。

「ちょ……？！　ちょっと待って！　僕達は……」「問答無用ニャ  
！！皆の者、かかるのニャー！！！」

アイルー軍団は一斉にラルド達に飛びかかって行った。

——五分後

「本っ当にごめんなさい！　ごめんなさい　うちの子達がとんだ勘違いを……」

モニカは平謝りだった。

「いや、いいよそんなに謝らなくても」

「でも……デビースさんが……」

モニカは涙目になって、心配そうにエントランスの隅っこで伸びているデビースを見る。

「あゝ、ほら、デビースはけっこう頑丈だからさ、ご飯の時間になったら起きて来るよ。だからほら、泣かないで、ね？」

「……はい」

モニカは服の袖で涙を拭った。眼をパチパチさせ、鼻をすする。

「……汚れちゃいましたね」

モニカはアイルー達にやられてぼろぼろになったラルドを見て言った。

「よろしければ、先にお風呂でもどうですか？ 服は洗濯して、着替えはこちらで用意しますよ？」

ラルドは自分の格好を見る。

アイルー達にやられてぼろぼろ、マタタビ爆弾まで投げられて変な匂いもする。

「うん、それじゃそうさせてもらおうかな？」

「はい、そなたがゆいげいにいそぐ……」

No.14 お風呂1

+

「うわあ……」

通された浴場。ラルドは小さく歓声を上げた。

ラルドの借りている家と変わらない広さ。大理石で作られたタイルが敷き詰められ、壁からは炎王龍の給湯口が顔を出し、口からこんこんと天然温泉のにごり湯を吐き出している。

温泉旅館顔負けの浴場だ。

かかり湯をして、湯船に浸かる。

「……ふう」

自然と吐息が漏れた。

ちょうどいい湯加減。身体の疲れが湯に溶けていくような感覚だ。

ゆっくりと肩まで浸かると身体を伸ばし、ぼんやりと天井を見上げる。

まさか遠出もせずにこんな風呂に入れるとは思わなかった。

たまにならモニカに頼んでも入れさせてもらうのも有りかも知れない。

(……………つて、モニカも普段ここに入ってるんだよな)

つい、頭の中にそんな妄想が浮かんでしまった。

いくら少女のような顔をしているとはいえ、ラルドも年頃の男である。

この程度の妄想はまだ普通のことだ。

(柔らかい肌に胸……………長い金髪が……………)

「ラルドさ〜ん」

風呂場の外からモニカの声が聞こえてきてラルドは飛び上がりそうになった。

脱衣場へ繋がる、すりガラスの扉の向こうにモニカのシルエットが見える。

「服は洗濯係のアイルーに持って行ってもらいましたから。着替えはここに置いておきますね」

「あ、う、うん。ありがとう」

ラルドはあわてて返事を返すと、ほっと息をついた。

さすがにあんな妄想をした直後は話しづらい。頭を切り換えて別のことを考える。

——と、その時だった。

カチャリ、と音を立てて扉が開いた。

「お邪魔します」

「っ！?!?」

ラルドは危うく吹き出しそうになった。  
入って来たのはモニカ。

華奢な身体にバスタオル一枚巻いただけという、男なら一度は見てみたいと思う格好。

風呂場の床で滑らないようにとてと慎重に歩いてくる。

ラルドは眼を点にしたまま固まっていた。  
思考の停止。思い切り頬をつねってみるが幸か不幸かばっちり痛

い。

モニカはラルドを見てきょとんと首を傾げる。

「どうかしました？」

「いやいやいやいや、今まさにどうかしてますですよ？」

「？」

モニカはかかり湯をすると湯船に入り、ラルドの隣に腰を下ろす。

「ふう……、湯加減は大丈夫ですか？」

「ふあ？ え？ あ？ はい、大丈夫であります！」

「??？」

——ラルドは風呂の感想など述べている場合ではなかった。

嫌な予感。

モニカの方をずっとチラチラと見ながら理性をフル活用し、今の状況を判断しようと試みる。

「あ、えっと、モニカ？ は……恥ずかしくないの？」

「はい？ 何がですか？」

あまりにモニカに普通に返されて思わず面食らう。

「い、いや、その、ほら、一緒にお風呂とか……」

ラルドがそう言つとモニカはくすりと笑った。

「女の子」同士ですから大丈夫ですよ」

——ガン、と頭が殴られたような気分だった。

まさか、とは思ったが案の定女の子と勘違いされているようだ。

軽く気分が滅入る。

何にせよこれはまずい、非常にまずい。

現在、ラルドはタオルを巻いていない。

幸いにこり湯に浸かっているおかげで大切な部分は見えていないが、先にお湯から出ればもちろんあれである。

しかし、すでに少しのばせ始めている。隠し通すにしても長くはもたない。

（そうなると正直に言つべきか？　ここまで見た限りのモニカの性

格ならおそらく許してくれそうだけど……)

「ラルドさん？　どうかしました？　のぼせたのなら無理せず出た方が……」

「い、いやいや大丈夫！　お氣付かいなく！」

「そうですか……」

モニカはそう言つとゆつくりと身体を伸ばす。

ハンターとは思えない、柔らかさできめ細かな肌。着痩せするタイプなのか、服を着ている時に見た感じより胸が大きい気がする。

髪は束ねられ、うなじと首筋が見えた。

少女のかわいさに女性としての色っぽさを兼ね備えた容姿とでも言えがいいか。おそらく街を歩けばさんざん声を掛けられることになるだろう。

ラルドはごくりと息を飲む。　思えば生で女の子のこんな姿を見たのは初めてだ。

(——って何考えてるの僕は！　早く……早く言おう)

「あ——」「それにしてもすごく嬉しいです。ラルドさんみたいな女性ハンターが来てくれて」

ラルドの言葉は楽しそうに話すモニカの声に止められた。

モニカは機嫌良さそうに続ける。

「ほら、ハンターってあんな仕事ですし、私と同年代の女性ハンターって滅多にいないくて寂しかったんですよ。やっぱり女の子同士じゃないと相談しにくいこととか有るじゃないですか」

「そ……相談しにくいこと？」

「えっと……ほら、あれのこととか……」

モニカは少し恥ずかしそうに言った。

しかしそれでも話が飲み込めていない様子のラルドを見て、モニカはそっと、コシヨコシヨと耳打ちする。

——たちまちラルドの顔が真っ赤になった。

モニカの顔も同じぐらい赤い。

「あの、ほら、こんな話、男性の方には恥ずかしくてできないじゃないですか」

「あ、う……うん、なるほど」

「と……とにかくよろしくお願いします」

「う……うん、了解」

——変な空気の沈黙。

沈黙の中、ラルドは思う。

（言い出せなくなってしまった……）

No.15 お風呂2

+

それからモニカはいろいろなことを話してきた。

世間話やハンター生活のこと、狩りでの失敗談など。

ラルドの方から一度、恋愛話を振って見たがそれには真っ赤にな  
って何も答えてはくれなかった。

何にせよ、ラルドとモニカは楽しい時間を過ごした。

——ただしラルドにとっては前半のみ

+

(あ……暑い……)

先に湯から上がる訳にはいかないためずっと我慢してきたのだが、  
すでに茹で上がり限界が近い。

(あ……う……どうしょ……意識が遠退いてきた……)

もはや正常に頭が働かない。 モニカの話している言葉も右から左に流れていき適当に相づちを打っているような状態だ。

(く……駄目だ……意識が……こんな……ところで……)

ラルドの眼が虚ろになっていく。

——だがその時だった。

「ふう……、ちょっと話しすぎちゃいましたね。 のぼせて来ちゃいました」

モニカが少しぼくとなった様子でそう言ったのだ。

これにラルドは反応する。

(まだだ！ あと少し……あと少しでいいんだ……だから持つてくれ……僕の身体！)

「……先に上がらせてもらいますね、ラルドさんはまだ入ってるんですか？」

「あ、ああ」

「そうですか……私もけっこうお風呂は長い方と思ってましたけどラルドさんはもっと長いんですね……」

のぼせた様子で立ち上がり、ザバザバと浴槽の端に向かう。 モニ

力。

ラルドはその後ろ姿を見送りながら心の中でガッツポーズをする。

（勝った……僕は……勝った……んだ……）

だがその時だった。

（——ん？）

首筋がチリチリとする感覚。いつもの危険が迫ってきていることを伝える何かだ。

だが少し感覚が違う。

（……モニカ？）

あくまでも直感。危険が迫ってきているのは自分ではなくモニカである、という気がしたのだ。

ラルドにとってもこの経験は初めてで、戸惑いながらもモニカの方に近付いていく。

——モニカはのぼせてふらふらとする足取りで浴槽の段差を跨ぐ。

瞬間、モニカは足を滑らせた。

「きゃっ?!」

「モニカ?!」

モニカはバランスを崩す。ラルドは咄嗟に浴槽から飛び出した。

モニカの頭に腕を回し、頭が床のタイルにぶつからないように庇う。

そのまま二人はもつれるように倒れた。周りの洗面器が蹴散らされ盛大に音を立てる。

「く……大丈夫か？ モニ……カ？」

ラルドは今の自分の体勢に気付いた。

モニカの頭に腕を回し、上から覆い被さった状態。

先ほどまでその身体を唯一隠していたバスタオルははだけ、綺麗な肌が全て露になっている。

「う………すいません……ラルドさ……ん？」

モニカもラルドの身体を見た。

女性なら胸に有るはずのものが無い。

女性でもあまり無い人もいるが、それとは根本的に何かが違う。

モニカの視線がラルドの胸から下に下りていく。

そしてバツチリ『それ』を目撃した。

「き……き……き……」

「モ……モニカ？　ちょ……ちょっと落ち着いて？　僕の話……」

「きゃあああああああっ！……！」

——ラルドは全身の毛がチリチリと逆立つのを感じていた。

今回危険が迫っているのはどうやらラルドのようだ。

No.16 宴1

+

モニカ邸 応接間

「……………ごめん」

「いえ…………ぐすつ……………もとはと言えば……………ひつく……………私が悪いんですから……………」

——浴場での一件、あのあとは相当な修羅場だった。

まずモニカの悲鳴を聞いたクロウが駆け込んで来てラルドとモニカを発見。

モニカに覆い被さるような体勢だったラルド。

クロウは、ラルドがモニカを襲っていると判断し、大剣まで持ち出してラルドを追いかけて回した。

なお、その時に浴場は半壊状態まで追い込まれた。

モニカが何とかクロウを止めてくれたのだが、その直後にモニカがクロウにまで裸を見られたことに気付いて泣きだして

それを今度はラルドとクロウで必死になだめて謝って土下座してそしてようやく落ち着いたところである。

「ほら、あんま気にすんなよ。そういうのは見られたやつは恥ずかしくても、見たやつはわりと気にしないもんだぜ」

クロウは湯上がりで濡れたモニカの髪をくしゃくしゃと撫でた。

モニカは何かにショックを受けたような表情でクロウの顔を見上げる。

「……………じゃあ、クロウさんは……………私の……………その……………裸を見ても何とも思わないってことですか？」

「おう！ だから安心しろ」

モニカはうつむいてしまった。

気のせいかな先ほどより落ち込んでいるように見える。

と、その時応接間の扉が開いき、一匹のアイルーが入って来た。

「みつなさん！ ご飯の準備が整いましたニャ〜。 食堂の方に  
……ニャ？」

料理に集中していたため事情を知らないアイルーは、予想外に暗い雰囲気と言葉を詰まらせる。

「ニャ……、なんか場違いだったニャ？ あれ？ モニカ様なんで泣いてるのニャ？」

——沈黙。ラルドとクロウはさすがに気まずそうに顔を見合わせる。

だがその沈黙を破るようにソファーに寝かせていたデイビスが跳ね起きた。

「『ご飯できたの〜！?』」

全員が驚いてデイビスを見るが、デイビスは気にせず周りを見回す。

「あれ？ ご飯は？」

「……本当に『ご飯の時間になったら起きたね』」

「ラルド〜？ ご飯は〜？」

「……できたらしいよ。 ……本当にデイビスの神経の太さがうら

やましいよ」

「えへへ」

——二人のやり取りを見てモニカも思わず吹き出した。

表情が少し和やかになっている。

涙を拭って弱々しく笑った。

「そうですね、冷めないうちに食べちゃいましょうか」

+

「うわぁ……」

ラルドの口から本日二度目の歓声が漏れた。

食堂に移動したラルド達が見たのは、長テーブルいっばいに並べられたご馳走だった。

濃厚な香りの幻獣チーズのチーズフォンデュ。キラキラと輝く紅蓮鯛の刺身、みずみずしいソウルビーンズとシモフリとまとのサラダ 等々

いずれも普段なかなか食べられない高級食材だ。

ラルドがチラリとデイビスを見ると、眼を輝かせながらよだれを滝のように垂らしている。

「じゃあ皆さん、席の方へ」

「いや……本当にいいのモニカ？　これって高いんじゃない……」

くすりとモニカは笑う。

「いいんですよ、普段使わない分、大切な時に使わないと」

「そーそ、金なんて使わなきゃ宝の持ち腐れなんだから気にすんな。それよりモニカ、酒頼む」

「もう……あまり呑んじゃ駄目ですからね？」

軽く言ったクロウにモニカは少しとがめるような視線を送った。

ラルドはぼかんとしたままご馳走を見つめる。

「完璧に金持ちの理論……。G級ハンターの暮らしはすごいって聞いてたけどここまでとは……」

「ラルド、早く食べようよ」

デイビスに引っ張られ、席につく。

ご馳走を前にしての凄まじい場違い感。

（いくらか袋に積めて持って帰っていいかな？）

全員が席につく

そうして宴は始まった。

No.17 宴2

+

日は雪山に沈み、夜は更けていく。

モニカ邸での宴は止むことなく続いていた。

「37番！ アイルウ倶楽部！ 一発芸 二人羽織りいきますニヤ」

「二人羽織りってなんニヤ？」

「知らないのニヤ？ こうやって着物を二人で着て……」

「フムフムニヤ……」

「そしてあつつあつのおでんを……」

「ニヤ……ニヤアアア？！ 止めるニヤ！ 猫舌にそれは……ニヤアアアアアア！……」

前で芸を披露するアイルーが断末魔の悲鳴を上げている。

「ランマルさん、お酒足りないニヤ」

「マタタビサラダ独り占めしちゃ駄目ニヤ〜！」

「この間、孫が産まれてニヤ〜」

「今度はトランクアイルーが一発芸する番ニヤ？」

「キュツ、キュツ、キュツ、ニヤ〜」

「なんニヤそれ？」

「今流行りのダンスだニヤ」

本来、ラルドとデイビスの昇格祝いだった宴はすっかりアイルーのものになっていた。

だが別に悪い気はしない。楽しそうに宴に興じているアイルー達は見ていられるだけでも楽しいし、彼らの作り出す雰囲気は自然と気分をウキウキさせる。

「あのダンスって二年ぐらい前のやつだったと思うんですが……」

「まあ、いいんじゃない？ 楽しそうだし」

「それよりさ、おかわりまだあるかな？」

「……デイビスはさすがに食べ過ぎじゃない？」

「モニカ、酒たりね〜ぞ〜」

「クロウさんは呑み過ぎです」

ラルド達もすっかり打ち解けた様子で談笑していた。

ハンター同士ということもあり話題は尽きない。

クロウやモニカの話は笑いのネタになるものだけでなく、狩猟に役立つものもありラルドは興味津々で聞いていた。（ちなみにデイベスは食べ物に夢中だった）

「そつえばさ、聞きたいことが有るんだけど」

会話が途切れたところでラルドが切り出す。

「クロウはともかく、モニカはなんでハンターになったの？ 正直

……そういうキャラじゃないのかなんというか……」

「ああ、両親の影響でしようかね」

モニカはデザートプリンを食べながら答える。

「へえ、モニカの両親ってハンターなんだ。 今どこに……」

「……10年前の崩竜事変で最後の戦いに挑み、亡くなりました」

ラルドは思わず声を詰まらせた。

——崩竜事変

10年ほど前、伝説の竜にして、白き神とも呼ばれる崩竜　ウカ  
ムルバスが突如現れ、様々な街を襲ったというものだ。

最終的にはハンターズギルドの伝説級の英雄達によりどうにか討伐されたが、数万人単位の死傷者を出し、襲われた街の復興には長い年月がかかった。

「ご、ごめん！　変なこと聞いて」

「いえいえ」

モニカはにこりと笑って返す。

「私の両親はすごいハンターで、最期まで勇敢に戦い、見事に崩竜を倒しました。……こういうと変かもしれませんが、私にとっ  
ては今でも大好きな自慢の親です。ですから、こうやって親の自慢話ができるっていうのは嫌じゃないんですよ？」

モニカはそう言うのと優しい笑顔を浮かべた。

そこには言葉通り悲壮感はない。

「……強いね。じゃあ、ご両親に憧れてハンターに？」

「……まあ、それだけじゃ無いんですけど」

モニカは一瞬、チラリとクロウの方を見た。

クロウがあまり聞いて無さそうなのを見て小さくため息をつき、ラルドに視線を戻す。

「ラルドさんは？」

「僕は……成り行きというか」

「成り行き？」

「うん、ずっと昔、親にハンターの訓練学校に預けられてそのまま。親の顔も覚えてない」

今度はモニカが言葉を詰まらせた。

「すみません……」

「いや、僕も平気だよ、ハンター家業はけっこう気に入ってるし、なんだかしっくりくるんだ。……ところで」

ラルドは視線の先を変えた。

「クロウ止めなくていいの？」

「はい？」

モニカはもう一度クロウの方を見る。

……先ほどアイルーが持ってきていた一升瓶が空になっていた。

「……クロウさん？」

「ん〜？ ああこれか…黄金芋酒だよ……ヒック……」

クロウは明らかに酔っ払っていた。

真っ赤になった顔。眼がすわっている

「いや、お酒の種類なんて聞いてませんけど、何杯呑みました？」

「かゝてえこと言うなってモニカ。　　っとそゝだラルド……ヒック  
……お前にいい話がある」

「い……いい話？」

会話がいまいちかみ合わない。

ラルドは恐々と聞いた。

なぜだろうか？　首筋がチリチリする。

「今度からお前を鍛えてやる……ヒック……ほらもっと喜べ、今から行くぞ！　もちろん反論はな〜し」

「ク、クロウ？　今から反論はなしって……」

ラルドは助けを求めるようにモニカを見た。が、モニカは諦めて下さいという感じで首を振った。

直後にクロウがラルドの後ろに回り込み、首根っこを掴む。

「うゝし、じゃあ行くぞゝっと」 さあ、早速ダイミヨウとクックとババでもいくかゝ」

「ちょっと！ いくらなんでも今からは……」

「そゝかそゝか嬉しいか！ うはははははは！」

そのままラルドはクロウに引きずられていった。

まるで売られていく子牛のような眼をしたラルドにモニカは苦笑いを浮かべながら小さく手を振った。

「あれゝ？ ラルドはゝ？」

デイベイスが不思議そうに尋ねる。

「……今の見てなかったんですか？」

「んゝ？ まあいいやゝ、プリンおかわりゝ」

「.....はあ」

No.18 動き出す闇

+

——ドンドルマ 某所

時刻は深夜。小さな数個のランプ以外に明かりの無い、広く、薄暗い部屋。

部屋の中央には大きな円卓が置かれ、それを囲うように四人の人影が向かい合って席についていた。

四人はそれぞれ黒いフードを被っており、顔はわからない。

だが体格や袖から覗く手などから、一人は年端もいかない少年、一人は体格のいい老人。二人は男ということがわかる。

「……首尾は……どうなっている……？」

男が重々しい口調で尋ねた。

「一頭はかなり時間がかかるが条件さえ整えばなんとかなるじやろう。」

もう一頭は……駄目じゃな。これ以上鎖に繋いでおくのも危うい。少々惜しいが手放すしかないじやろう」

老人の声が答え、小さくため息をつく。

最初に発言したのと違う男も、つられたようにため息をつく。

「あつしは学術はからつきしですが、大將が無理と言っなんざ相当なもんなんしょうねえ」

すると退屈そうにしていた少年が円卓に頬杖をつきながら口を開いた。

「別に無理なら無理でいいんじゃないの？ 人里に向けて放つとかしちやええ？」

「坊っちゃんはそのが見てみたいだけでしょうが、ったく……」

男は苦笑いしながら言う。老人の方を見る。

「人里に放つはともかく、後々邪魔になりそうなのにつけるなら有りじゃないっすかねえ？」

「……それが得策……なれば……」

もう一人の男が頷き、老人の方を見る。

「……いいじやろう。その件に関してはわしの方で判断する……これで定例集会は終了とする」

老人は席を立つと振り向き、出口に向けて歩き始める。

「どこに行かれるので？」

「お膳立てというやつじゃよ。しばらくお前達の行動は任せる。自由によれ」

三人はそれぞれ頷くと席を立ち、部屋を出ていく。

「……お膳立て……か、我ながら血も涙も無くなったものじゃのう」

老人は自嘲気味に笑った。

部屋を出て、長い長い廊下を歩いていく。

いくつも並んだ大きな窓から見上げる夜空には黄金の満月が輝いていた。

「奴らを使うか……」

——夜は更けていく。

+

場所と時は変わり、ノーティスの街

朝日の差す中、雪が薄く積もった煉瓦道を歩く二人のハンターがいた。ラルドとデビスだ。

「うう……、今日も筋肉痛だあ……」

「大丈夫？ ラルド？」

HR昇格祝いの宴から、早いもので一ヶ月が経っていた。

そして、最初は酔った勢いによるものかと思っていたクロウ監督による訓練は、何を間違ったか一ヶ月間ぶっ通しで続いていた。

「さすがにあれは無茶苦茶過ぎるよ。体中に重りつけて戦わしたり、人を丸腰のままランポスの群れに放り込んだり。この間なんて『獅子は我が子を千尋の谷に突き落とす』とか言って本当に突き落としたり」

「よ……よく生きてたね、でもおかげで強くなれたんじゃないの？」

するとラルドはポリポリと頬を掻いた。

「まあ、たしかにそこそこ戦い慣れたし、それにこの太刀もクロウのおかげで作れたようなもんだしね」

ラルドは背中に背負った鬼斬波に触れた。

雷属性を纏う鉄刀系の太刀で、下位ハンターが使う武器としてはかなり優秀な太刀だ。

「でもやっぱりあの人は無茶苦茶だよ。教えてくれるのがモニカだったなあ。……いつそクロウは風邪でもひいてくれないかな？」

「悪いな。俺は10年以上風邪ひいたことねえんだよ」

後ろから聞こえた聞き慣れた声。

ラルドは飛び上がり、錆びかけたからくり人形のような、緩慢な動作で振り返る。

と、そこには腕を組んだクロウとその隣で苦笑いを浮かべるモニカがいた。

「どうやらまだ精神面が弱いみたいだな？　じゃあ今日は火山にクーラードリンク無しの探掘ツアーで決定だ」

そう言つとクロウは逃げようとするラルドの首根っこを捕まえた。それをずるずる引きずつて集会所に入つていった。

「クロウ君！　モニカちゃん！」

集会所に入るとギルドマネージャーが駆け寄ってきた。

慌てた様子で手にした書類を見ながら興奮気味に喋る。

「クロウ君、モニカちゃん、あなた達にすごい人から名指しで依頼が来てるの！」



## No.19 G級クエストへ(前書き)

ユニークアクセス1000件突破しました。 皆さまありがとうございます。  
ございます( ^o^ ) /

そしてそして、評価付けてくれた方ありがとうございます。 今後  
ともよろしくです。

No.19 G級クエストへ

「私たち二人に……ですか？」

後から入ってきたモニカが尋ねた。

「そうよ。依頼人はドンドルマ ハンターズギルド総本部のギルドマスター、レイザー様からよ」

ラルドはその肩書きに驚いた。

現在、ドンドルマに本部を構えるハンターズギルドは、世界中の各ハンターズギルド支部とそこに所属するハンターを管理する機関として世界中に絶大な影響力を持っている。

そのギルドマスターとなれば、それこそ一国の王にも匹敵するよ  
うな力と権力、影響力を持つ人物だ。

しかしクロウは驚いた様子もなく眠たそうにあくびした。

「なんだ、じいさんか」

（じいさん呼ばわり?!）

ラルドはむしろそちらの方が驚いた。

モニカに『クロウは相手がどんな立場の人が知らないのか』と聞こうとしたが、モニカも別に驚いた様子も無く、普通にしているのとおりあえず黙っておくことにした。

「でも……ドンドルマにはレイスさんを始め、G級ハンターが大勢いますよね？」

何故、私たちに声がかかったんですか？」

「それがね、ドンドルマのG級ハンターは全員、他のクエストに出払ってるらしいのよ」

クロウはやれやれと言う風に首を振った。

「まったく、連中 何やってんだ？  
で？ クエストの内容は？」

「……それがね、街にリオレイア希少種……金火竜が現れたらしいのよ」

「はあ?! なんて金火竜が街に出てくるんだよ?!」

これに関してはクロウは驚いていた。

金火竜というのは雌火竜の変種の一つで、極めて珍しく希少な種族。黄金のように輝くその鱗や翼膜は市場で高価で取り引きされる。

だが発見されるのは非常に稀。

普段人間が訪れない、古塔などの場所を住みかにするため発見は極めて困難なのだ。

それが堂々と街に現れるなど聞いたことがない。

「……そういえば僕達が出会った時も砂漠にナルガが出たよね？あれと何か似てない？」

「さあな、ところでラルドにデイベス」

クロウは二人の方を見た。

「一緒に来るか？」

「え？」

ラルドとデイベスは同時に声を上げた。

クロウはニカッと笑う。

「せっかくの金火竜だし、一度G級クエストがどんなもんか見せてやるよ。見るだけでも結構勉強になるぜ」

クロウはそう言うとデイベスは無邪気に喜んだ。ラルドは対象的にげんなりした表情を浮かべる。

「わゝ、楽しみだねゝ、ラルドゝ」

「いやデイベス、それってハンターズギルドの規約違反ってわかってる？ 下位ハンターをG級クエストに連れて言っちゃ駄目なんだよ？」

「気にすんな。街壁の上から見学するだけだし、もしバレたら俺が口聞いてやるからよ」

「いや、先に口聞いてからやってよ」

「めんどくせえ」

クロウは即答で返すとか言おうとしたラルドをほっぽりだしてマネージャーの方へ向き直る。

「んじゃ契約だ。街の外れに移動用の飛竜を回しといてくれ。四人分な」

クロウはまだ二人の返事を聞いて無いにも関わらずさっさと契約してしまった。

「……これって……僕達も怒られるよね」

「……私がギルドの人にちゃんと説明しておきますから」

「……うん、ありがとう」

一緒に連れていくという話の方をどうにかして欲しかったが、モニカは基本的にクロウのこういう案には反論しないというのはもう把握している。

ラルドは深くため息をついた。

——このクロウの気まぐれと思いつきが、良くも悪くも多くの人間の運命をねじ曲げるような事態に繋がるなど、この時は誰も知るよしが無かった。

——ハンターの街ドンドルマ。

古龍種の通り道に程近いドンドルマは、その立地ゆえにたびたび古龍に襲われる。

そのため、街全体が城壁のような高い外壁に囲まれ、大砲や巨大弩“バリスタ”など様々な対モンスター用の兵器が備えられている。

金火竜はその外壁から少し離れた場所にいた。

「うわゝ、ホントに金色なんだゝ、すごいねゝ」

外壁の上から見下ろしながら、デビスは子供のようにはしゃいでいた。

ラルドの方もなんだかんだと言ったものの、やはり少しは興味が有りじつと金火竜の方を見ている。

その二人をよそにクロウとモニカは準備に勤しんでいた。

クロウは大剣の刃こぼれやアイテムの最終確認。モニカは使用する各種ビンや調合素材を丁寧に整理していた。

ラルドはそちらを見る。

「……僕達にできることってある?」

「大丈夫ですよ、心配しないで見ててください」

モニカは遠回しに断ると、大きく深呼吸をし手際よくピンを弓にセツトする。

その簡単な動作だけでもモニカが凄腕のハンターであると感じさせた。

ラルドは少し緊張をほどこ、細く息を吐く。

幸い、今のところ普段危険を伝えてくる“何か”も反応しない。

「うっし、んじゃ行くとするか」

まるで散歩にでも行くかのようにクロウは言った。

モニカもコクリと頷く。

「ラルドさんとデイベイスさんは絶対下に降りちゃ駄目ですよ?」

「うん、頑張つてね。 応援してるから」

「二人も気をつけて」

「ラルド、誰に言つてんだ? 俺達を舐めんなよ?」

それぞれ言葉を交わすと、クロウとモニカの二人は柵を乗り越え

外壁から飛び降りていった。

——音も無く着地した。金火竜はまだこちらに気付いていない。

着地と同時にクロウは走り出し、モニカは金火竜に弓を向ける。

矢が放たれ、金火竜の尻尾に矢が浅く刺さる。僅かな痛みで金火竜はゆっくりと振り向く。

振り向いた金火竜の目の前に、大剣を構えるクロウはいた。

にやりと笑い、剣を握る腕に力を込める。

「よう、大将。仲良くやろうぜ」

瞬間。上から叩きつけるように大剣を振るった。

刃が厚鱗を割り重殻を砕く。

突然の強襲に金火竜は大きくよろめいた。

「まだまだあー!!」

一気に流れをさらいに行く。

降り下ろした大剣を力まかせに振り上げレイアの顎に一撃、さらに身体を回転させて尻ぎ払う。

——不意打ちからの強襲が決まった。

しかし金火竜はクロウを認識するとすぐさまクロウの攻撃をかわすように二歩後ろに下がる。

（これは……サマーソルト!!）

僅かな予備動作からすぐさま次の攻撃を予測し、ガードの体勢をとる。

それとほぼ同時に金火竜の靱尾がクロウを襲った。

「つつ!!」

ガード越しでも伝わってくるほどの強烈な衝撃。

クロウはそれに逆らわず後ろに飛んだ。

大剣を持っているとは思えない身軽な動作でバク転し、体勢を直す。

しかし吹き飛んだクロウが体勢を立て直すより早く金火竜は火球のプレスを放つ体勢に入っていた。

だがクロウは二ツ、と笑うと構わず正面から突っ込む。

金火竜はそれに向けて火球を放とうとした。だが――

「クロウさん!! 一人で突っ込みすぎです!!」

普段の控えめな感じとは打って変わってモニカが厳しい声で怒鳴った。

側面に回り込んでいたモニカは金火竜の頭に向けて数本の矢をまとめて放つ。

矢が刺さり堪らず火球の狙いがそれた。クロウはそのまま突っ込むと、金火竜に刺さった矢を打ち込むように大剣の側面で殴り付けた。

轟く金火竜の絶叫。クロウはモニカのいる場所まで飛び退くと齒を見せて笑いかける。

「ちよつとぐらいの無茶はお前がなんとかしてくれるだろ？」

「……もう、それじゃあ次は二人で行きますよ！」

そう言うと同時にモニカは走り出す。

わずか数歩でトップスピードまで加速しレイアの脇を通り抜けて行く。

金火竜がモニカの動きに氣をとられてできた一瞬の隙、それをクロウは見逃さなかった。

「くらえ!!」

金火竜の身体に大剣を突き立てる。重殻が碎け大きなひびが入っていく。だがそれでもまだ致命傷には至らない。

「浅いか……、さすがに堅いな、なら」

チラリとクロウはモニカを見た。

一瞬のアイコンタクト。

それを理解しモニカは毒ビンを設定する。

「これで中からも弱らせます!!」

十数本の矢を束ねた曲射用の矢を空に向けて放つ。

クロウが大剣を引き抜き大きく飛び退くと同時に、毒矢が雨のように金火竜に降り注いだ。

+

「す……すごい……」

外壁の上にいたラルドとデビスは二人の戦いにすっかり見入っていた。

風ぎ払い、射抜き、避け、受け止める、自分達より遥かに高い次元の戦い。

（これが……二人の本気……）

今ならクロウが『勉強になる』と言っていたのが納得できる。

一心同体とはこの事か、ある種の感動すら覚える。

先程まではしゃいでいたデビスもすっかり大人しくなって固唾を呑んで戦いを見守っていた。

——しかしその時だった。

(……………?)

ラルドは戦いから視線を外しキョロキョロと辺りを見回す。

(今……どこかで角笛の音が聞こえたような……)

あくまでもなんとなくそんな気がしたというだけ。

普段なら空耳だろうと片付けていただろう。

だが、何かがラルドの心に引っ掛かった。

しかしそんなちょっとした疑惑もデイスの声で吹き飛んでしまった。

「わ！　わ！　ラルド！　なんか凄いのが出そうだよ！」

ラルドがそちらを見るとクロウが大剣を風車のように高速で回転させていた。

金火竜も何かを感じとったのか空に飛び上がる。

それを見て、モニカは素早く麻痺ビンをセットし、金火竜よりさらに上空へ矢を放った。

曲射。金火竜の身体に矢が雨のように降り注ぐ。

矢に付けられた麻痺毒の影響か、金火竜の翼の動きがおぼつかなくなり、空中でバランスを崩した。

墜落する金火竜。クロウは大剣を回転させたまま突っ込む。

回転の遠心力をそのまま剣を振り抜く力に変え、一気に金火竜の胴を薙ぐ。

傷口から大量の血が吹き出し、金火竜が悲鳴のような声をあげた。

「うわー！ 凄い凄い！ 凄い技だねー、ラルドー！」

デビスが興奮気味に話す。

だがラルドはそれを聞いていなかった。

(……首筋がチリチリする……)

先程、角笛の音が聞こえた気がした時から感じ始めた感覚。

かなりはつきりと感じる。しかもいつぞやと同じような、危険が迫っているのは自分ではなく他の誰かだという感じ。

(けど……クロウとモニカの方はあそこから何か有るとは思えないけど……)

ラルドは、ふと空を見上げた。

すると空の遥か遠くに小さな影が見えた

(……………あれは？)

眼を凝らす。

影はどんどん近づいてきて、少しずつ高度を下げていく。

(……………っ!! あれは……………まさか!!!)

ラルドは“それ”に気付いた。  
首筋の毛が一気に逆立つ。

“それ”は突然高度を下げると、真っ直ぐにモニカに向かい始めた。

「モニカー!!! 逃げろー!!!」

ラルドは外壁の柵から身を乗り出して叫んだ。

その声にモニカが振り向くと同時に、空中から一つの影がモニカを襲った。

No.22 白銀の太陽

モニカの眼に映ったもの、それは白銀に輝いていた。

「銀色のリオレウス……銀火竜?！」

突如現れた銀火竜は地面すれすれに飛びながらモニカに迫っていく。不意を突かれたモニカは僅かに反応が遅れていた。

次の瞬間、銀火竜の毒の爪がモニカの身体を切り裂いた。

小柄な身体が宙を舞いった。

地面を転がる。

その身体はピクリとも動かない。

周りに血の池が広がっていく。

「モニ……カ……?」

突然の惨事。ラルドとデイビスは呆けたようにその光景を見ていた。

最悪の結果が頭をよぎる。

銀火竜は再び空高く舞い上がり、モニカを見た金火竜はそちらに一直線に突進していく。

「やらせるかつ！！！」

クロウは迷わず金火竜とモニカの間に割って入った。

大剣を地面に突き刺して盾とし、金火竜の突進を正面からぶつかりあい——止めた。

クロウは渾身の力を出していた。

歯を食い縛り血管が切れそうなほど腕に力を入れ、地面に足がめり込むほどの重さに耐える。

視界の端に上空の銀火竜とラルドを捉える。

クロウはギリリと歯軋りした。

「ラルドッ！！！！頼む……！！！！モニカを……助ける！！！！」

その声にようやくラルドは我に戻った。

迷わなかった。

このままではモニカがどうなるか……それをラルドははっきりと感じていた。

「デイス！！ キャンプで手当ての準備を！！」

それだけを言い残しラルドは外壁から飛び降りた。

ズシンと音を立てて地面に着地する。  
かなりの高さから降りたために足が痺れたがそんなことにはかま  
ってられない。

ラルドはすぐに走り出した。

だが――すぐに上空からの殺気を感じて足が止まった。

見上げると口に灼熱の炎を溜めた銀火竜がこちらに狙いを定めて  
いた。

（しまった！！）

一発を地面に身を投げ出して回避する。

火球が着弾した場所で爆発が起き、地面が大きくえぐれた。  
当たれば即死もあり得る。

（まだ来る……！！）

二発、三発と続け様に火球が迫ってくる。  
地面を転がってそれを避ける。

（今ので三発目……）

ラルドは体勢を立て直そうとした。

火竜が連続で火球を吐けるのは身体の構造上三発が限界。  
そうクロウには習っていたからだ。

だが――

チリチリと感じる“危険”

銀火竜の口内には四発目の炎が溜まっていた。

（そんな?!）

タイミングがずらされた。――避けられない。

「ラルド!! 目をふさげ!!」

クロウの声と共にラルドと銀火竜の間に一本のピンが投げられた。

（閃光玉?!）

ラルドはとつさに腕で目を覆った。

同時に閃光が炸裂し目の眩んだ銀火竜が怯んで墜落する。

「クロウ!! ありがとう!!」

そう叫んでクロウの方を見たラルドの目に映ったのは

金火竜の火球を受け、吹き飛ばされるクロウだった。

「ク……ロウ？」

ラルドは信じられないという表情でクロウを見ていた。

あれほど頼もしかったクロウが地面にぐったりと横たわっている。  
左腕に酷い火傷を負っているのが見て取れた。

（僕を……助けるために？）

ラルドはクロウの方に向かおうとした。

「来るな……！！」

クロウはラルドを制する。

大剣を支えにして、ふらふらと立ち上がった。

「何……やってんだ！

俺が……言っただのは……“モニカを助ける”だ！ 余計な……こと  
……考えんな……！！」

絞り出すような、しかしはつきりとした声でクロウはそう言った。

「でも！ クロウも一端手当てしにキャンプに戻らないと……！」

ラルドが懇願するように叫ぶがクロウは首を振る。

低く唸りながらクロウを見る金火竜を睨んだ。

「こいつら……、モニカの血の……匂いで……興奮してる！ 誰かが  
……食い止めないとこいつらは……街を襲うかもしれない……だ

から……俺は残らねえと……」

「けど……」

「しつこいんだよ てめえ！！ 邪魔だ！！ とつとも戻れ！！  
もたもたしたせいでモニカに何か有ったらぶつ殺すぞ！！」

「っ！！」

ラルドはこれ以上クロウに何を言っても揺らがないことを悟った。

齒を食い縛りながらモニカの方に駆け寄りモドリ玉を使う。  
緑色の煙に包まれる二人をクロウは安堵した表情で見ていた。

「悪いな……ラルドにデイス。 誘つといて……カッコ悪いとこ  
見せちまって……」

クロウは二頭の火竜に向き直る。 酷い火傷を追った左腕を一瞬  
見た。

「左腕は……、無理か。 たく……片腕で……金と銀の火竜なんて……  
…なんかの罰ゲームか？」

苦々しく笑みを浮かべ、片手で大剣を構える。

「けど……、俺はまだ死ぬつもりはないんで……。 来な……相手  
になってやる」



## No.23 手当て

+

——モニカをキャンプに連れて戻り、十数分後のベースキャンプ

「よかつたゝ、なんとか大丈夫そうだよゝ」

そう言つてほつと息をついたデイビスの前には、簡易ベッドに寝かされたモニカがいた。

銀火竜に切り裂かれた肩には分厚く包帯が巻かれ、辺りには回復薬が入っていた空きビンが散乱している。

「……本当にもう大丈夫そう？」

ラルドが心配そうに尋ねると、デイビスは額に浮かんだ汗を拭つて頷く。

「うん！ ちゃんとお医者さんに診てもらわないと駄目だけど、とりあえず大丈夫ゝ」

デイビスの言葉にラルドはようやく肩の力を抜いた。

「それにしても意外だったよ。デイビスがこんなにちゃんとした手当ての仕方知ってるなんて」

「んゝ、ぼくつてよく転んでケガするからさ、手当ての仕方だけはちゃんと勉強したんだよゝ」

ラルドは眠っているモニカの顔にかかった髪を退けた。

寝息はだいぶ落ち着いてきたが時折辛そうに顔を歪める。

「……やっぱり、すぐには動けない……よね？」

「当たり前だよゝ、そんなことしたら本当に死んじゃうよゝ」

「そっか……」

そう言つとラルドはモニカに背を向けて歩き出す。

「ラルドゝ、何処に行くのゝ？」

「……ちよつとクロウの方を見てくるよ」

ラルドはそう言つてその場を後にした。

背中に背負つた太刀を握る感触を静かに確かめながら。

ラルドが外壁の上に到着した時、下では死闘が繰り広げられていた。

金火竜も銀火竜も、そしてクロウも血にまみれながら凄まじい殺気を放ち、敵を殺すことだけを考えている。

その戦いを見てラルドの心に最初に浮かんだのは恐怖だった。

（怖い……）

クロウの戦いぶりは修行中に何度も見ているが、それとはまったく違う阿修羅のような殺気。

事実、今のクロウに近づけばたとえラルドでも一瞬で切り捨てられることになるかも知れない。

（怖い……）

だがラルドは感じていた。

自分の中の“何か”がクロウの“死”という結末が少しずつ近付いて来ていることを叫び続けている。

ラルドは背中の中太刀に手をかけたまま震えていた。

（怖い……）

いつそ解らなければこれ程苦悩することは無かつただろう。だが自分の中の“何か”ははつきりとこの戦いの結末を伝え続けているのだ。

——今すぐクロウの元に駆け付ければもしかしたら何か変えられるかもしれない。

だが何もできず死ぬかもしれない。むしろそちらの可能性の方が高い。

僅かに眼に涙を浮かべ、眼下で繰り広げられる死闘を見つめる。

（怖い……僕に何ができる？ あんな戦いで……僕は……）

足がすくむ。

（嫌だ……僕は……死にたくない……）

しかしそうしている間にもラルドは感じ続けていた。

クロウの“死”がもう間近に迫っていることを

（けど……だからって僕に何が……何もできないかもしれない。むしろ僕じゃ邪魔に……ならいっそ……）

「うあああああ！！！」

クロウの悲鳴が聞こえた。

ラルドが我に振り返りそちらを見るとクロウは銀火竜の足で地面に身体を押さえ付けられていた。

頭に喰らい付こうとする銀火竜の牙を大剣を盾にして辛うじて防いでいる状態だ。

ラルドは心臓が早鐘のように打つのを感じた。

もう目の前まで迫ったクロウの“死”

このままでは避けられない“結末”

ラルドは気が付くと外壁の柵に足をかけていた。

(……………僕は……………僕は何を考えてた！)

ラルドは背中の太刀の柄を握りしめ、外壁から飛び降りた。

——地面に両手をつけて着地し、太刀を抜く。

「ここで……何もせず見殺しにしたら……一生後悔する……」

全身に感じる“危険”

だが、まだ自分の中の“何か”は“自分”の死という結末は見せていない。

「なら……まだ！」

ラルドはクロウの元に走り出した。

だがその前に金火竜が立ちふさがる。

「どけえええっ！！！」

渾身の力で太刀を降り下ろす。

だが——聞こえたのは鈍い金属音だった。

「硬っ?!」

重殻に剣を弾き返され体勢を崩した瞬間、金火竜の靱尾がラルドを尻ぎ払った。

メキメキと骨が碎ける音。

ラルドは地面に叩き付けられ、人形のように地面を転がった。

「か……は……」

喉を血が昇ってくる。激しく咳き込んで血を吐いた。

視界の端に、口内に炎を溜める金火竜の姿が見えた。

どうにか身体を起こそうとする。

だが身体が言うことを聞かない。

金火竜は大きく息を吸い込むとラルドへ向け、巨大な火球を放った。

ラルドにはその光景がまるでスローモーションのようにゆっくりとした動きとして見えていた。

（これが……死ぬ前の……）

火球がゆっくりとうねりながら、ラルドに近づいてくる。

（僕は……死ぬの……？　こんなにも簡単に……何も出来ずに……）

ラルドは固く眼を閉じた。

（僕にもっと……力があれば……）

——力なら……有る……

（——ッ?!）

突然頭の中に声が響いた。

ただ……知らない……運命すら変える力……俺は

（いったい何!? 頭の中に……声が……）

望むなら……力を……。運命を変える力……世界を覆す力……

（ち……力……?）

ラルドは心の中でその声に問いかけた。

知らないはずの声。けど知っている気がする声

（もし本当に……そんなのが有れば……仲間を……クロウを助けられるかな……?）

力は……力……。救いであり……お前を破滅させるものでもある  
……

（それでも……今は力があるんだ……だから……）

ラルドは“何か”に向けて手を伸ばす。

その手が何かを掴んだ気がした。

閉じた瞼の裏に一瞬、紅い何かの影が浮かんた。

「……龍？」

——ここに古き力を

心で身体を解き放ち“鬼神”と化せ。



No.25 竜王の系譜2

「ラルド……！！ ラルド！！」

銀火竜に踏みつけられながらクロウは叫んでいた。

銀火竜の牙をかわしながらなんとか拘束を解こうとするが銀火竜の爪から逃れられない。

紅蓮の火球がうねりながらラルドに向かって行く。

ラルドは静かに立ち上がり、自身に迫る火球を見つめた。  
避けられない。クロウですらラルドの最期を確信した。

——だがそれは起きた。

火球がラルドに直撃する寸前、真っ二つに割れてラルドへの直撃を避けたのだ。二つに割れた火球が背後の地面にぶつかり、爆ぜる。

（——ッ?!）

クロウにも何が起きたか理解できなかった。

ラルドはうつむいたまま太刀を払うと、静かに切っ先を銀火竜に向けた。

「その足……退ける……」

——普段とはまったく違う冷たい声。

ラルドはゆっくりと顔を上げる。

——血のような紅色の瞳。

普段なら黒曜石のような、優しく落ち着いた色の瞳は、今はぎらぎらと激しく、それでいて冷たく輝いていた。

「待つてろ……“俺”が……助ける……」

ラルドはそう言うのとゆっくりと構え直す。

それと同時に鬼斬破が巨大な気刃を纏った。ばちばちと火花が弾けるような音。同時に刀身を雷が這い回る。

金火竜が大きく息を吸い込み連続で火球を放つ、それに応えるようにラルドも走り出した。

太刀筋はほとんど見えない。風切り音と共に、ラルドに向かって

行つた火球が全て切り裂かれていく。

そのまま一気に距離を詰める、それに対し金火竜はトントン、と後ろに下がった。

サマーソルトの予備動作だ。

だがラルドは速度を緩めない。

金火竜が宙を返り、靱尾が唸りながらラルドに迫る。

「遅い……！！」

一閃、神速の斬撃が迫つて来る靱尾を切り飛ばした。

金火竜が体勢を崩して墜落してくる。

だがラルドはすでにその下を通り抜けていた。

そのまま走りながら太刀の切っ先を銀火竜に向け、地を這うように体勢を低くしながら向かっていく。

銀火竜がそれに気付き対応するより早く、鬼斬波の切っ先が銀火竜の胸を貫いていた。

噴き出す鮮血。

さらに追い討ちをかけるように刀身を這い回っていた雷が一気に銀火竜の体内に流れ込んだ。

身体を駆け巡る電撃の苦痛から逃れようと銀火竜はラルドを振り切り空中へ飛び上がる。

その間にラルドは乱暴にクロウの左腕を引っ張り上げていた。

「いつってええええ！！？　ラ……ラルド！！　そっちは火傷が……」  
「まだ戦えるな……？」

クロウの言葉はラルドに遮られた。

「……人の話は」「俺は金火竜を殺る。お前は銀火竜の相手をしろ……」

「……いや、だか」「無駄話は終わりだ……。行くぞ……」

ラルドはそう言うのと金火竜の方に向かって行った。

クロウはぼかんとしたままその後ろ姿を見送る。

「あいつ……あんなキャラだったか？」

クロウはポツリとそう呟くと回復薬を一気に飲み干す。

「おまけになんだ？　さっきの動きも、金銀の重殻を斬れるレベルまで鬼斬波の切れ味を跳ね上げた気刃も、なんかもう別人すぎんだろ……」

ラルドの背中を見ながら僅かに眼を細める。

「まっ！　わかんねーことは後回しだ。今はそれより……」

スツとクロウの表情が変わり凄まじい怒気と殺気を放ち始める。

「…………お前だ」

クロウは大剣の切っ先をほとばしる殺気と共に上空の銀火竜に向けた。

「これでサシだ。モニカをやってくれた落とし前、つけてもらうぜ……………!!」

ラルドは突進してくる金火竜に向かって走っていた。

砂ぼこりを巻き上げながら金火竜の巨体が迫ってくる。

だがラルドはそのスピードを苦ともせず頭を踏み台にして金火竜の背中に飛び乗った。

「喰らえ……！」

勢いよく太刀を背中に突き刺す。

同時に激しい雷が体内に流れ込んでいく。

苦痛の悲鳴のような声をあげる金火竜。

だがラルドはそれを意に介さず傷口をえぐるように太刀を動かす。

傷口から血が噴き出し自分の身体を染めても表情一つ変えず、無言のまま傷口をえぐっていく。

激痛に堪えきれなくなり遂に金火竜は膝を折った。

ラルドは背中からヒラリと飛び降りると太刀を背中の鞘に納める。

「……終わらせる……」

ラルドは居合い抜きのような構えをとり、静かに眼を閉じた。

一人と一頭の間につかの間の静寂が流れる。

ラルドがカツと眼を見開いた刹那、無数の斬撃が金火竜を襲った。  
身体中を切り刻む嵐のような斬撃。

金火竜は弱々しい鳴き声をあげるとゆっくりと自らの作った血沼に沈んだ。

身体からおびただしい量の血が流れ、血沼を広げていく。

——ラルドが剣に付いた血を払い、鞘に納めると同時に背後で何かが落ちてくる音がした。

ラルドは視線をそちらに向ける。

——そこに有ったのは銀火竜の首だった。

「ちえっ、お前の方が早かったか」

視線を上げると返り血で血塗れになったクロウがいた。

ラルドはようやく僅かに表情を緩める。

「流石だ」

「ったりめーだろ？ 俺を誰だと思ってんだ……ってかお前はどんなってんだよ？ なんていきなりこんな……ん？」

何の前触れもなく、ラルドはフラリとよろめきその場に倒れこんだ。

先程まで放っていた殺気は消え、表情も元の優しげな顔に戻っていた。

「お、おい、ラルド！？　しっかりしろ！」

クロウは慌てラルドに駆け寄っていった。

+

「終わったようだね……」

街の外壁の上にラルド達を見下ろす影があった。

「やっぱり裏にいるのは奴等のようなだね……ああ、失敗はしないよ。……あれが完全なものになれば奴等への切り札になる」

影の輪郭が僅かに揺れる。

「運命を歪ませる存在……はたして彼は救いか滅びか……なんにせよ奴等が気付くのも時間の問題……か」

影の輪郭が大きく揺らぐ。

「こちらも手を打とうか、せいぜい幸運を、ラルド君」

そう言い残し、影は煙のように消えていった。

No.26 竜王の系譜3（後書き）

↑お知らせ？

体調崩してダウンしてました（苦笑）

また復活しましたので、よろしくお願いします！

## No. 27 夢

+

——ラルドは暗い洞窟の中にいた。

生ぬるい風がどこからかゆっくりと吹き抜け、歩を進める度に洞窟内に足音が響き渡る。

壁はぬるりと湿っており、一定の感覚で水の滴る音が聞こえてくる。

左右の壁には所々に松明が付けられ、火がゆらゆらと洞窟内に影を踊らせていた。

道は緩い下り坂。ラルドはゆっくり、一步一步足の感触を確かめるように進んで行く。

——しばらく歩き、ラルドは洞窟の終点にたどり着いた。

目の前には龍の取っ手が龍を型どった、両開きの大きな鉄製の扉相当古い物なのか、あちらこちらが欠け、錆び付いている。

ラルドは手を当てるとそれを少しだけ押し開いた。

扉は軋む音を立ててゆっくりと開く。

扉の隙間からどろりとした、肌にまとわりつくような冷たい風が流れ出した。

ラルドは思わず身体を震わせる。

眼をこらす。 開いた扉の隙間から見える奥は何も見えない漆黒の闇

だが何かが居ることだけは嫌と言うほど感じた。

『――戻れ』

突然扉の先、闇の中から声が聞こえた。

くぐもった、低く反響する不気味な声

ラルドはびくりと身体を震わせ、眼をこらす。

闇の中からの声はさらに続ける。

『来るな……ここから先……まだ……』

「……あなたは？」

ラルドは臆することなく答えた。

しかし扉の先の“何か”は沈黙を返す。

ラルドは扉に当てた手に力を込める。

扉は軋みながらゆっくりと開いていく。

——瞬間、扉の隙間から手が飛び出し、扉を押すラルドの腕を掴んだ。

紅い鱗に覆われ、鋭い爪のついた龍のような腕、それはラルドの腕を凄まじい力で掴んだまま放さない。

『夢は終わりだ……』

扉の隙間から眼が覗いた。

闇に浮かぶ瞳、瞳孔は縦に長く、ラルドの全身を映している。

何か強い力を感じた。

ラルドの身体が吸いだされるように洞窟内を飛んでいった。

扉が再び、ゆっくりと閉められる。

何事も無かったかのように、水の滴る音だけが響き渡った。



+

——ラルドが再び眼を開けて、最初に見たのは白く四角い天井だった。

「……は……？」

ベッドの上、ぼんやりする頭で周りを見回す。  
どうやら病室らしい。

「……夢？」

「ラ、ラルド……！  
眼が覚めたんだね……！？」

いきなりデビスが涙と鼻水を振り撒きながら抱きついてきた。

「ちょ……！ わっ……！ や、止め！ デビス！ 鼻水が……！」

「ふむ、思ったより元気そうだね」

聞き慣れない声がした。ラルドがデビスを引き剥がしながらそちらを見ると見知らぬ青年が立っていた。

まだ若い、おそらく20代前半の銀縁眼鏡をかけた長身の青年は、ジッと観察するような眼でラルドを見つめている。

落ち着いた雰囲気的青年で、それほど寒くないにも関わらず妙に袖口の広い、分厚い深緑色のコートを着込んでいる。中からは微かにカチャカチャと音が聞こえた。

ラルドは青年をじっと見つめた。

「え……つと……あなたは？」

「僕はレイス・エルマリス。ハンターズギルド本部のギルドマスター補佐役にしてハンターズギルド新武具開発局及び新技術開発局の局長、そしてHR9のG級ハンターだ。よろしく頼むよ」

青年改め、レイスはさらりと自己紹介するとラルドに手を差し出した。

突然様々な肩書きを言われて面食らいながらもラルドは握手を返す。

「……君の話はクロウとモニカちゃんから聞かせてもらってるよ。ラルド君」

その言葉にラルドは反応した。

「そうだ！　クロウとモニカは？！」

「モニカちゃんは少し前に意識が戻ったよ、しばらくは療養が必要だけだね。クロウは……もともと殺したって死なないさ」

「そうですか……良かった……」

ラルドはホッと胸を撫で下ろす。

少しぼんやりする頭を振って窓の外を見た。

勘違いでなければ今は朝だ。陽はまだ低い。

「僕……どれぐらい眠ってました？」

「確かね、丸一日ぐらいだよ」

「正確には17時間23分17秒だよ」

デイビスの言葉をレイスが正す。

ラルドは思わず苦笑いした。

「別にそんな正確じゃなくても……」

「駄目だよ。研究対象のデータは正確に取っておかないと後々面倒だ」

「？ それってどういう………つつ?!」

ラルドは突然顔を歪めて胸を抑えた。  
ずきずきと激しい痛みが走る。

「ど………どうしたの？ ラルド？」

デイビスが心配そうにラルドの顔を除き込む。

レイスも興味深そうにラルドを眺めていた。

「ふむ……随分無茶をしたらしいからね。ほら、これを飲むといい」  
そう言っただけレイスはコートの中からドロツとしたエメラルドブルー色の液体の入ったビンを取り出した。

途端にラルドは首筋の毛がチリチリと逆立つのを感じた。

「……なんですそれ？」

「僕の発明品。スーパー元氣ドリンコEXさ。飲めば疲れと痛み、それにその他もろもろが吹っ飛ぶよ、一発でね。」

「……元氣ドリンコって……普通こんな色じゃ……ないですよね？」

ラルドはおそろおそろビンを受けとる。

液体は陽の光を受けて鮮やかな七色に輝いていた。

「だから新發明って言ったろ？ 大丈夫、効果は保証する、飲めば元氣になるよ。アツという間にね」

「じゃ……じゃあ……せつかくですし……」

ラルドはビンのふたを開け、一口飲んだ。

「ぎゃあああああああ！！！！？」

突然ラルドは断末魔の声を上げた。

口の中に広がる、にが虫とラオシャンメロンとトウガラシをそれぞれ100倍濃縮したものを混ぜたような味。

時折感じるジェリー状の固形物の食感に、身体が全力で拒否反応を示す。

眼の焦点がぶれ、痙攣し始めたラルドをデイビスは恐ろしいものを見るような眼で見つめた。

レイスは「ふむ」と顎に手を当ててラルドの様子を観察していた。

「驚異的に不味いから特殊なシロップで千倍に薄めなきゃいけないと言っのを忘れていたね」

レイスは気にした様子も無くラルドの観察を続ける。

やがて痙攣が止まった。

ぱたりとベッドに倒れ、ラルドは宙に向けて手を伸ばす。

「ああ……綺麗なお花畑が……」

「ラ、ラルドオ〜！？ そっちに行っちゃ駄目だよ〜！？」

「なるほど、……と、いいデータがとれたね。うん」

更にメモ帳に何かを書き加えるレイス。

「レ、レイスさ〜ん！？ ラルドが〜」

「ああ、すまないね、じゃあ次はこれを飲ましてみてくれないかな」  
そう言ってレイスはまたもやコートから黄色い液体の入ったビンを取り出した。

「今度は大丈夫なんですか〜？」

デイビスが恐々と尋ねる。

「ああ、大丈夫だよ。……多分ね」

デイビスはラルドに黄色い液体を飲ませた。

……

「又アアアアアアア！……！？」

今度はラルドは跳ね起きた。

ゲホゲホと咳き込みながらレイスを睨む。

「ハア……ハア……一体、何入れたらあんな味になるんですか?!」

「聞きたいかい？」

レイスの眼鏡がキラリと光る。

「……いや、やっぱりいいです」

「賢明な判断だよ。さて、身体の方はどうだい？」

「え？」

ラルドはキョトンとした顔をしながら身体をあちこち動かしてみた。

「なんか……大分楽になってます……」

「効果は保証すると言っただろう？ さあ、行こうか」

レイスはラルドの腕を掴んだ。

「へっ？ ちょ？ 何処に？」

「金銀の火竜との戦いで使ったという君の力を見たい。今すぐにね。それにちょうど雪山の調査の荷物持ちが欲しかったんだ。デイビス君、君も来たまえ」

レイスはラルドをズルズルと引きずって行く。

「ちょ！？　いくらなんでも！　それに僕はまだ病み上がり……  
……」

ラルドは病室の出口へと消えていった。

+

——場所は少し移る。

「金と銀はやられちゃったみたいだね」

「じゃがモニカは重傷、クロウにも深手を負わせることができた。  
お膳立てとしては十分じゃろう」

ドンドルマを囲う外壁の上。

ラルド達が死闘を繰り広げた、金と銀の火竜の死体が運ばれよう  
としているのを眺める二人がいた。

一人はだぶだぶの黒衣に身を包んだ少年。

外壁の柵の上に立ち、火竜が竜車の荷台に固定される眺めている。

「ねえねえ、そんなに二人が怖いならみんなで直接殺しに行けばいいんじゃないの？」

「急いては事を仕損じるじゃな。今、下手にわしらが動けばレイス

や彼の者に気付かれる危険がある。そうなれば二人を消せたとしても結果的にはマイナスじゃ」

そう答えたのは赤いマントに身を包んだ長身の老人だった。

顔に刻まれたしわや真っ白な髪からそれなりの年齢であることがわかる。

だが鋭い眼光と生气に溢れる身体は年齢などまるで感じさせない。

「ならさ、僕ならその心配もないから僕一人で……」

「同じ事じゃ。二人が殺されれば真っ先にわしらが疑われる。

そうでなくとも、すでにモニカとクロウにはレイスがギルドナイトを護衛につけてしまったからの。簡単にはいくまい」

「じゃあさじゃあさ、先にレイスを殺っちゃえば？　ちょうど今雪山に行ってるらしいし……」

「イシュティス」

老人は厳しい顔つきで少年の名を呼んだ。

イシュティスと呼ばれた少年は少し身体を小さくする。

「だめじゃと言っておるじゃろう。あやつの頭脳は貴重じゃ。まだいてもらわんといかん」

老人は諭すように言った。

イシュティスはプクツと頬を膨らませる。

「もうっ！ 駄目駄目駄目って……つまんないよ……」

「そうむくれるな、今は我慢の時じゃ。……さて、そろそろ仕事に戻らんといかんのう。お前はどつする？」

「僕はもうちょっとここにいますよ。戻っても退屈だし」

「そうか……昼食までには戻るようにな」

老人はそう言うといシユティスに背を向け、街の方へと歩いて行く。

イシユティスは柵の上で座り込むと何かを考え始めた。

「ねえ影……、レイスお兄ちゃんは“頭脳が”必要だから“殺しちゃ”駄目なんだよね？」

「はい」

いつの間にかイシユティスの後ろに忍装備に身を包む男が立っていた。

影と呼ばれた男はイシユティスの言葉にうつそりと頷く。

するとイシユティスは口元に笑みを浮かべた。

「じゃあ“腕を取るだけ”とか“半殺し”ならいいよね？ そうと決まれば早速行こうか？」

「それは……」「駄目なんて言わないよね？」

——一瞬だった。

イシュティスは影が反応する間も与えず懐に入り、鋭いナイフを喉元に突き付けていた。

「“霸王”を起こすまで僕、とつてもとつても退屈なんだ。影は僕の暇潰しを駄目なんて言わないよね？」

「……はい」

影は喉元にナイフを突き付けられたまま、小さく答える。

「ありがと」僕、影のそういうところが好きだよ」

イシュティスにはっこりとあどけない笑みを浮かべた。

+

「いやはや、やっと着いたね。雪山に来たのは久しぶりだよ。楽しみだ」

レイスはぐつと伸びをしながら朗らかに雪山を見上げる。

一方、うんざりした様子でラルド、そしてのんびりとデイベスが竜車から降りてくる。

ラルド達は雪山へと来ていた。

美しい白銀の情景がラルドの心をぐつたりさせる。

「さあて、さつそく行くのでしょうか。じゃあラルド君とデイベス君はこの荷物を持ってくれ」

そう言ってレイスが竜車から下ろしたのは大量のピッケルや虫あみなどがパンパンに入った、見るからに重そうな二つのリュック。

さすがのデイベスも苦笑いを浮かべる。

「すつごく重そうだね」

「うん……、僕って一応病み上がりなんだけどなあ……」

ラルドはうなだれてレイスの方を見た。

レイスは竜車の荷台から一本の黒いランスを取り出しているところだった。

——暗夜槍。

迅竜の素材から作られたランスで、ランスとは思えない程の軽さと刃の鋭さが特徴。その特徴ゆえに的確に敵の弱点を攻めやすく、逆にそれができなければ攻撃力は大きく下がる。

レイスの特徴的な点は、普通はランスと合わせて持つ盾を持っていないところ。そのためかなり身軽だ。

「……ところでリュックは二つしかないんですけど、まさかレイスさんの荷物……それだけですか？」

ラルドがそう言うとレイスは不思議そうな顔をした。

「そうだけど？　それがどうかしたのかい？」

「……さすがに他の荷物全部押し付けるのは酷くありません？」

「君は僕の話聞いてなかったのかい？　最初に荷物持ちだと言っ  
たろ？」

「でもこれじゃあ不公平……」

「君たちは肉体労働、僕は頭脳労働、公平だと思うけど？」

レイスはさらりとそう言ってのけると雪山を見上げた。

「今回の目的は雪山の生態調査だ。最近微妙にモンスター分布や群れの規模なんかが変わってきていてね、それを調査する。モンスターは餌にしている虫等も調査対象だから見つけたら虫あみで捕まえておくように」

「……はあ」

ラルドが気の無い返事をする。レイスは咎めるようにラルドを見た。

「もう少ししゃんとしてくれないかな？ ほら、彼を見習いなよ」

レイスはくいと顎をしゃくる。ラルドがそちらを見るとデイビスが飛び回るチョコチョコを追いかけて虫あみを振り回していた。

「……むしろ、何の疑問も持たずにやってるデイビスの方が問題だと思っんですけど……」

「レイスさーん！ ラルドー！ オオツノアゲハ見つけたよー」

デイビスが満面の笑顔で両手を振っている。

ラルドは大きなため息をついた。

——約二時間後

「はあ……はあ……ラルド、僕もう駄目だよ……」

デイビスが泣きそうな声を上げる。

「が……頑張れ、デイビス……あきらめたら終わりだよ……とりあえず下に落っこちないようにね……」

ラルドとデイビスは息も絶え絶えで雪山に登っていた。

雪山の外周をぐるぐる周りながら登っていくような道で、右側には壁のような急斜面、左側には崖のような急斜面という構図だ。道幅もあまり広くないうえに雪も深く、相当歩き辛い。

「二人共、遅れてるよ。早く帰りたいなら速く歩くことだね」

レイスは雪道を苦もなく歩いていく。

ラルドはそれを少し恨めしそうに見た。

「レイスさん……荷物が無いとはいえ……何であんなに元気なんだろう……」

「はあ……はあ……はあ……痩せてるのに体力凄いね……」

そんな事を言いながら二人はなんとかレイスに追い付いた。

「やれやれ、二人共もう疲れたのかい？　しょうがないね、じゃあここで休憩にしようか」

「ほ……ほんとですか、やった……」

「やっと……休める……」

二人は荷物を下ろしその場に倒れこんだ。

「ふむ、二人共随分と疲れているようだね。どうだい、僕の作ったこの超強走薬改を飲んでみないかい？　いくらでも歩けるようになるよ？」

そう言いながらレイスはコートから赤色のボコボコと泡立つ液体の入ったビンを取り出した。

「え、え……と僕は遠慮しようかな……」

「僕も……まだ死にたくないです……」

二人は凄い勢いで距離をとりながら言った。

「そうかい？　別に遠慮することはないのに」

レイスはビンを残念そうにコートにしまうと、今度は肉焼きセツトと生肉を取り出した。

（……あのコートは四次。ポケットか何か？）

ラルドはそんな事を思いながらおもいつきり伸びをする。

「そういえば、モンスターの生態調査って言っていましたよね？ モンスターがどのあたりに出るかわかってるんですか？」

ラルドが何気無く質問する。

レイスはにこりと笑い返した。

「ちょうどこのあたりだよ」

「……………え？」

「こつやって肉を焼いてれば匂いにつられてやって来るかもね」

「な？！ ス、ストップ！ 肉をしまって！！」

「どうしてだい？ 向こうから来てくれた方が楽だろう？」

「そついう問題じゃなくて…………」

——その時、雪山の上の方から牙獣の咆哮が聞こえた。

「来たようだね」

「僕…………もつやだ…………」

二頭のドドブランゴと数十匹のブランゴが上から降ってきた。



## No.31 どちらが気の毒？

ラルド達は二頭のドドブランゴとブランゴの群れと向き合っていた。

ラルドとデイビスは武器を取り出し、構える。

だがレイスだけは武器を構えず、じっと相手を観察していた。

「ふむ、あのサイズからして下位クラスのようなだね。まあ、ちょうどいいか。ラルド君、君の気刃を見せてくれないかい？」

「気刃？」

ラルドは太刀を構えたまま聞き返した。

「ああ、クロウから聞いたんだが、君は巨大な気刃を操り金火竜を倒したそうじゃないか。是非それを見せて欲しいんだ」

レイスは子供のように眼を輝かせながら言った。

しかしラルドは気まずそうに答える。

「実はどうやったかわからないんです。というよりはあの時のことはほとんど覚えてなくて」

「覚えてない？」

「なんか記憶が曖昧というか……とにかく僕にもあれのことはよくわかりません」

「二人共々、今は話してる場合じゃないよ」

デビスが不安そうな顔で二人を見た。

「と……ごめんデビス。レイスさん、ドドブランゴの方を頼めますか？」

「嫌だ」

まさしく即答だった。

レイスはクイツと眼鏡を上げる。

「僕が戦うのはその相手に興味を持った時。相手に研究や開発等を邪魔される、もしくはその恐れがある時。そして自分の身を守る時だけだ。それ以外に貴重な時間と体力を使うなんてナンセンスだね」

(……これ怒っていいよね?)

「ラルド、来るよ」

デビスの言葉にラルドは我に帰った。

見るとブランゴ達は戦闘態勢に入っている。

「あゝ！ もういいです！ 行くよデビス！」

ラルドとデビスはドドブランゴ達の群れに向かって行く。

一方レイスは腕を組み、ラルドの後ろ姿を見ていた。

向かってくるブランゴをひよいひよいとかわしながらぶつぶつと一人言を呟き始める。

「ふむ、覚えてない……か、それはそれで興味深い、そうになると……」

「うわゝ、ラルドゝ！ 助けてゝ！！」

デイスが雪だるまのようになりながら走り回っている。

「何か条件でもあるのだろうか？ やはり状況から考えて……」

「ちょ……デイス！ 竜撃砲をこっちに向けないで！」

ラルドが大慌てでデイスから逃げていく。

「絶体絶命のピンチ……あるいは仲間の危機……」

レイスがそこまで考えた時、ラルドがレイスの隣まで下がってきた。

「レ……レイスさん！ 本当にこのブランゴ達 下位クラスですか？！ 正直手に負えないんで手伝ってください！」

「まったく、情けないね」

レイスはクルリとラルドの方を向いた。

呆れたようにため息をつく。

「一応言っておくけどエリアとサイズから見て間違いなく下位クラスだよ。ただ君たちが弱いだけじゃ……」

「危ない!!」

レイスが話終わる前にドドブランゴがレイスめがけて飛び掛かってきた。

レイスは素早くランスを手にとると振り降ろされた爪を受け止める。

ギリギリと押し合いながら「ふむ」とレイスは眉を寄せた。

「……………失礼、間違えたのは僕だ。なるほど、たしかにこのサイズの割には力が強いね」

観察するような眼でドドブランゴを見る。

(……………もしか…このドドブランゴも……………?)

レイスはドドブランゴを振り払い、飛び退いた。

「気が変わった、少し興味がわいたからね、僕も戦うよ」

「本当ですか?」

「ああ、とはいえこの数を相手にするにはここは足場が悪い、場所を変えるよ」

そういつとレイスは崖に向かって走り出し、そのまま滑り降りて行った。

それに続いてラルドとデイビスも崖から滑り降りる。

白い雪が舞い上がる。

崖下にレイス、少し遅れてラルドが降り、そして最後にデイビスがゴロゴロと雪だるまのようになりながら転がり落ちてきた。

「それで、レイスさん！これからどうするんですか！」

ラルドとレイスはすぐに体勢を直すと崖の上からこちらの様子を見ているブランゴ達に眼をやった。

「そうだね……まずは君がブランゴを……………ん？」

レイスは動きを止めた。

「あれは……………」

呟きながらある一点を凝視する。

ラルドもそちらを見ると半分雪に埋まった、変わった色の大きな石があった。

レイスがその石を凝視したままプルプルと震えている。

「素・晴・ら・しい！！！」

レイスは凄まじい勢いでその石に殺到していく。

「二人共！ 見たまえ！これは“古龍の涙”だ！ しかもかなり大きい！」

レイスは鼻息を荒くしてそう言った。

「あの……今はそんなこと……」「ああ……、偶然こんな貴重な物を発見できるなんて……日頃のおこないがいいからだな。うん。」

ラルドと雪まみれのデイビスは顔を見合わせる。

「あのー、レイスさん？」「早くキャンプまで運ばないと……ハイパー強走薬SPはまだ有ったね。飲むと副作用で丸一日止まれなくなるが背に腹は変えられない！」

——と、その時一頭のドドラングが上から降ってきた。

よりもよって古龍の涙の上に。

「「「あ……」」」

三人の声が綺麗に揃った。

あたりに雪煙が舞い、砕け散った古龍の涙の破片が転がっていく。

「な……なんてことだ……」

レイスはがくりと膝をついた。

あんぐりと口を開ける。じわりと涙目になってきた。

「せつかく発見した……古龍の涙が……いや、落ち着け、落ち着くんだ僕！　せめて破片だけでも回収を……」

そう言ってレイスが立ち上がった瞬間、上からさらにドドブランゴと大量のブランゴが降ってきた。

「……あ………」

散らばった古龍の涙の破片がさらに粉々に砕かれていく。

再びレイスはがくりと膝をついた。

あんぐりと口を開け、頬を一筋の涙が伝う。

だがさつきとは様子が違った。

「クフフフフ、アハハ……アッハハハハハ！」

レイスはゆらりと立ち上がった。

「悪いのは……君たちだよ？」

その姿はまるで幽鬼のようだった。

涙を流しながら高笑いし、光の無い眼でドドブランゴ達を見る。

「クフフフフ……標本と……実験台がいつぱいだ……」



「クフフフ……。どれからいこうか……？」

レイスはふらふらと歩きだし、ランスの切っ先をドドブランゴ達に向けた。

一頭のドドブランゴがレイスに向かって行く。

「ほう……。まずはこれか」

そう言った次の瞬間、レイスはドドブランゴの懷に飛び込んでいた。

「一頭はサンプルとして欲しいからね。君は綺麗に処理してあげよう」

右手に持ったランスで鋭く突きを放った。暗夜槍の切っ先が音もなくドドブランゴの身体を貫く。

血はほとんど出なかった。

ドドブランゴの身体が一度ビクンと反り返り、そのまま力が抜けていく。

「……血はあまり出てないし破損もそれほど酷くない。……サンプル

ルとしては十分だね……」

ランスに串刺しになったドドブランゴの死体をじつくりと眺める。

その時もう一頭のドドブランゴがレイスの後ろに回り込み大きく息を吸い込んだ。

レイスはちらりとそちらに視線を向ける。

「雪のプレスか、ちょうどいい、サンプルは鮮度がいい方がいい……」

レイスは身体をひねりながらドドブランゴが刺さったままのランスを後ろに向けた。

ドドブランゴによって放たれた雪のプレスを、死体を盾にして受け止める。

さらにレイスは何も持っていない左腕をぶんと振り上げる。

すると、コートの袖口から普通の物より一回り小さく、銃身の半分以上の長さを占める大型の弾倉を備えた、明らかに正規の物ではない黒いリボルバー式のライトボウガンが飛び出した。

「サンプルは一頭で十分だからね……」

レイスは死体を盾にしたままボウガンをドドブランゴに向けた。

弾倉が半回転し、カシンと何かがはまる音がする。

「さあ、燃え尽きたまえ！」

ボウガンが火を吹き一発の弾丸がドドブランゴの顔面に命中する瞬間、顔面に突き刺さった弾丸から激しく炎が吹き出した。

——苦痛の悲鳴のような咆哮。

炎はドドブランゴの身体全体に広がり白い毛皮を黒く焦がしていく。

「クフフフフ……、新作の爆炎弾の効果は上々だね……クフフフフ……」

レイスは熱さにもがき苦しむドドブランゴにライトボウガンに向けてと容赦なく追撃を撃ち込んでいく。

ドドブランゴは小さく声を上げ、炎に包まれながら、なすすべなく崩れ落ちた。

辺りに焦げた肉の匂いが漂う。

「……さて」

レイスは死体の刺さったままのランスを投げ捨て、右腕をぐんと振り上げた。

すると右手にも左手と同じようにライトボウガンが現れる。

残されたブランゴの群れの方を向いた。

「せっかくだ、君たちにはこれの実験台になってもらおうか」

レイスは両手の軽くボウガンを振った。  
再び弾倉が回転し、止まった。

二丁のボウガンの引き金が引かれる。

発射されたのは炎を纏った散弾。

散弾は高速で速射され、暴風雨のようにブランゴ達を襲った。

「アーツハツハハツハ！」

炎の暴風雨が止んだ時、そこには焼け焦げた無数のブランゴの死体が転がっていた。

レイスはボウガンを再びコートの袖にしまうと、気分が晴れたとでもいうように晴れやかな表情でぐっと伸びをする。

「ラ……ラルド、レイスさんが怖いよ」

「……全力で同意する。怒らせないようにお互い気をつけようね？  
助けられないから……」

ラルドとデイビスは互いに頷き合った。

——その時だった。

「見つけた」

二人の後ろから、明るい少年の声が聞こえた。

No.33 黒衣の死神1

ラルド達が振り返るとそこには一人の少年が立っていた。

だぶだぶの黒衣に身を包んだ、おそらくは10歳そこらの少年。

金色の瞳を楽しそうに輝かせる少年の背中には、身体とは不釣り合いな大鎌が背負われていた。

ラルドはその少年に見覚えがあった。

「君は……」

初めてイャンクックを討伐した日、ぶつかった少年だ。服装や眼が印象的なのもありはつきりと覚えていた。

少年は辺りに広がったブランゴ達の死体を面白そうに見回した。

「うわゝゝ 派手にやったねえ……ねえ、その眼鏡のお兄ちゃん、お兄ちゃんがレイスだね？ 僕とも遊んでよ」

レイスは少年を見て面倒臭そうにため息をつく。

「なんだい君は？ 僕は子供の相手をしてるほど暇じゃ……」  
「そんなこと言ってるって死んじやうよ？」

レースの言葉が終わらないうちに少年は一瞬で距離を詰め大鎌を薙いでいた。

ラルドとデビスにはほとんど反応できないほどの速度。

鋭い斬撃がレースの前髪をかすめていく。

「……しつけのなっていない子供だね……」

武器同士がぶつかる金属音。

繰り出される二撃目の突きをランスで受け止め、レースは大きく飛び退いた。

少年は嬉しそうな笑みを浮かべる。

「やっぱり強いみたいだね♪ 嬉しいな♪」

少年は大鎌の中程を持ち、踊るようなステップを始めた。

「僕の名前はイシュティス、……黒衣の死神って名前の方が有名かな？ 覚えておいてね」

イシュティスと名乗った少年は再び距離を詰め、今度は舞うように身体を回転させながら連続で攻撃を繰り出す。

攻撃を繰り出す度に回転の遠心力によって大鎌のスピードが上がるっていく。

もし、その攻撃が少しでも当たれば肉は裂け骨は砕けることだろう。

しかしレイスはそれを見切り、全ての攻撃を紙一重で避け続けた。

「黒衣の死神……」

レイスはバックステップで攻撃を避けながら先程のイシュティスの言葉を繰り返した。

大きく飛び退きランスを構え直す。

「確か……、ミナガルデの方で話題になっていたね。突如狩場に現れモンスターもハンターも無差別に殺していく凶悪犯……。G級ハンターですら多数の死傷者を出しているという……」

「わぁ ♪ よく知ってるね」

「……まさかこんな子供とは信じがたいけど、“嘘だ”と笑えないところが怖いね」

「嘘なんかじゃ無いよ。ほら、現実には小説よりなんとかって言うじゃない」

「なるほど、確かに」

レイスは笑みを浮かべる。

「けど、それなら遠慮はいらないね」

レイスの目付きが変わった。

「殺すつもりで行くよ」

「っ?!」

これまで回避に専念していたレイスが突如反撃に転じた。

まるで閃光のような鋭い突きを連続で繰り出す。

だがイシュティスも負けてはいない、大鎌の持ち手でランスの軌道をわずかにそらし、最低限の動きでかわしていく。

「やるね、さすがに死神と言われるだけはある」

レイスはランスを頭の上で風車のように回し、両手に持ち変え渾身の突きを放った。

——超高速の突き。

だがイシュティスはそれをも見切っていた。

ランスの届くギリギリまで飛び退き、攻撃をかわす。

「隙ありだよ」

イシュティスは大鎌で突き出されたランスを蛇のように絡めとり空高く弾き飛ばした。

ランスが宙を舞い、二人からかなり離れた雪原に刺さる。

「……やるね。あの攻撃をかわして、しかも僕のランスを弾き飛ばすなんて」

レイスはひらひらと手を振りながら言った。

イシュティスは大鎌を肩に担ぐと得意気に胸を張る。

「で、どうするの？ 武器無くなっちゃったよ？」

「僕の近接武器が一つなんて言った覚えは無いよ？」

レイスはコートの懷に手を入れた。

「行くよ、夜天連刃……」

取り出したのは一対の黒い双剣。それが吸い込まれるようにイシュティスへと向かう。

「うわあっ?!」

イシュティスは悲鳴を上げながら大鎌で攻撃を防いだ。

互いの武器が触れあう度に激しく火花が散る。

「わわっ！ 卑怯だよ!？」

あわてて距離を取るイシュティス。だがレイスは素早く左手の剣を投げ捨てライトボウガンを取り出した。

「逃がしはしない!」

「もっつ！ そのコートの中はどうなってんのさ!？」

追い撃ちをかけるレイス。そして向かってきた弾丸を全て叩き落とし距離を取るイシュティス。

だがこれだけの攻防にも関わらず二人の息はまったく上がっていないかった。

「ふふふ、凄いや」 僕とここまで戦える人なんて久しぶりだよ」

イシュティスが体勢を立て直し再び飛びかかろうとした瞬間、突然後ろに忍一式を装備した男が現れた。

「……何か用？ 影」

イシュティスはあからさまに嫌そうな顔をして影と呼んだ男を見た。

影は静かに口を開く。

「もうお止め下さいイシュティス様、これ以上は危険です」

「……僕に意見する気……？」

イシュティスは男に大鎌を向けた。

「忘れた？ 僕に意見していいのは僕より強い人だけだよ……？」

「……………」

「ふう、まあいいや。確かに殺さないように手加減して勝てる相手

「じゃなさそうだしね」

イシュティスはそう言うのと残念そうに首を振った。

レイスと、少し離れた場所にいるラルドとデイビスを順番に見る。

「……でもこのまま帰るのは負けたみたいで嫌だし……」

そしてイシュティスは半ば雪だるまになったデイビスに眼を止めた。

「あの人でいいや、血で真っ赤になった雪だるまってのも見てみたいし」

そう言うといシュティスはデイビスに向かって行った。

「わああああ?!」

——瞬間、ラルドがいシュティスとデイビスの間に割って入った。

「やらせない!」

「ん?」

イシュティスは大鎌を振るい、簡単にラルドを弾き飛ばした。

イシュティスは踵を返すと尻餅をついたラルドの首筋にぴたりと大鎌の刃を当てる。

「あ……あ……」

「さっき、僕が動き出すより早く動いて間に入ってたねお兄ちゃん。まるで僕が何かするって“感じた”みたいに。……そういえば、この前ノーティスで会った時もそうだったよね？　どうやってるの？　それ」

イシュティスはじっとラルドを見つめる。

と、その時ラルドの瞳が紅く濁っていくのに気付いた。

「……………え？」

ラルドの太刀が激しく迸るような気刃に包まれる。

「これって……………」

「……………死ね」

ラルドは太刀を振り払った。

No.34 黒衣の死神2

「――!!?」

イシュティスは咄嗟にラルドの攻撃を防いだ。

後ろに飛び退き体勢を整える。

イシュティスが見たのは巨大な気刃を纏った太刀を構えるラルドだった。

「あれは……もしかして……」

小さく呟きながらイシュティスは大鎌を構え直し向かって来るラルドを迎え撃った。

二人の武器がぶつかりあい、激しく火花を上げる。

「へえ……、思いがけない収穫ってこのことかな……?」

ギリギリと押し合いながらイシュティスは言った。

「でも……、ずいぶん粗いね。まだ使い慣れてないのかな?」

「……黙れ」

その言葉と同時にラルドは凄まじい力を発揮しイシュティスを押し始めた。

「くっ……」

「……………」

ラルドは突如後ろに下がった、急に支えを失ったイシュティスがバランスを崩す、そこにラルドは身体を回転させながらイシュティスに斬りつけた。

「うわあっ!?!」

イシュティスの身体が大きく吹き飛び、その手から大鎌が弾き飛ばされる。

イシュティスは雪まみれになりながら起き上がった。

「いたた、油断しちゃったな。ちよつと本気、出さないとまずいかも」

「……そんなものに興味はない」

ラルドはスツと太刀を振り上げた。

「一の章……………」

ラルドの太刀が纏った気刃が、うねりながらみるみるうちに黒く変わっていく。

「黒の風……!!」

太刀を降り下ろした瞬間、気刃が太刀から離れ小さな黒い竜巻のように形を変えながらイシュティスに向かって行った。

イシュティスは大きく眼を見開く。

「……うそ？ まさかの当たり？」

黒い竜巻がイシュティスに迫る。

「ヤバ……」

初めてイシュティスの表情に焦りが見えた。

——その時だった。

「イシュティス様!!」

先ほど影と呼ばれた男がイシュティスを突き飛ばした。

黒い竜巻がイシュティスの身代わりに影の身体を切り刻む。

「ぐああああ!!」

竜巻の中で絶叫する影の姿をイシュティスは呆然と見ていた。

竜巻が消える。そこには身体中をズタズタに切り裂かれた影が立っていた。

ふらりと膝をつき、血を吐く。身体から流れた血が雪原を真っ赤に染めていた。

「イシュ……ティス様……戻り……ましょう。あなたに……万が一のことがあれば……。それに……このことを……」

影はそのまま前のめりに倒れた。

「命拾いしたな……」

ラルドは無表情にそう言うと再び太刀を振り上げ、黒い気刃を纏わせる。

「一章……黒の……」

しかし次の瞬間、ラルドの太刀の刀身が粉々に弾け飛んだ。

同時に右腕の皮膚が裂け血が吹き出す。

「……っ!？」

ラルドはガクリと膝をついた。

腕から大量の血が流れ出し、雪原に広がっていく。

「くそ……」

ラルドはそのまま雪原に倒れてしまった。

イシュティスはそれをぼかんとしたまま見つめる。

「もうっ！ 訳がわからないよ！ 一体なんなのさ!？」

イシュティスは大鎌を拾い上げながら叫ぶ。

それに対しレイスはボウガンを向けた。

「ここは退きたまえ」

レイスはイシュティスを睨んだ。

「僕はこれから彼の手当てをしなくちゃいけない。この出血はさすがにまずいからね。君にとってもこれ以上の戦闘はリスクが大きすぎるだろう？ 利害は反しないはずだ」

イシュティスは少し考え込んだ。

ラルドを見、レイスを見、そして影の方を見る。

「わかったよ」

イシュティスはそう言つて大鎌を背中に納めると影を肩に担いだ。

「ま、今日は今日で楽しかったしね。ばいばい」

イシュティスはモドリ玉を地面に叩き付けた。

緑の煙の中に二人は消えていく。

「……ずいぶんあっさり退いたね……」

わずかな疑惑を感じながらレイスも武器を納め、ラルドの手当てに取りかかった。

+

——一方、イシュティスは肩に影を担いだまま崖道をヒョイヒョイと飛び降り、麓を目指していた。

「ふう、今日はいろいろあつて疲れちゃったな。ラルド……だっけ？ まさか本物が本当にいるなんてね」

イシュティスは不意に足を止めた。

「でも、そうになると少しもつたいない気もするな……。これからの成長が楽しみって感じだったのに」

イシュティスはクスクスと笑いだす。

「もうすぐ死んじゃうんだから」

No.35 策士（レイス side）

+

レイスがラルドとデイビスをノーティスに送り届ける手続きを終え、ドンドルマの自分の家の前まで帰って来たのは深夜だった。

「明かりがついてる……」

家の窓から暖かな光が漏れ、中から聞きなれた笑い声が聞こえる。

レイスはほっと息をつき扉を開けた。

——入ってすぐ、目の前に広がるのは本の山脈

本棚もなく、本の山が通路を作っているという状態でさながら迷宮の様相だ。

そしてその迷宮の中、本の山にもたれ掛かるクロウと絨毯の上に座るモニカはいた。

「うつす、邪魔してるぜ」

「お帰りなさい、レイスさん」

クロウとモニカはレイスを見るとにこやかに挨拶する。

二人の顔を見てレイスも笑顔を浮かべた。

「ただいま、モニカちゃん……ついでにクロウ」

「ついでってなんだよ？」

レイスはクロウの言葉を見無視して松葉杖を持ったモニカの方に歩み寄った。

「もう歩きまわって平気なのかい？　あまり無理しちゃいけないよ？」

「はい、けど大丈夫です。　とはいってもしばらくは杖が手放せませんけど……」

「それだと普段の生活が大変だろう？　ホームヘルパーでも雇ってあげようか？」

「いえ、うちには沢山のアイルー達がいいますから」

「そうかい？　困った事があればなんでも言うんだよ？」

「おい！」

クロウが不機嫌そうな声を上げる。

「ちょっとぐらい俺の心配しろ」

クロウは包帯でグルグル巻きになった左腕を上げた。

レイスはクスリと笑う。

「ゴキブリ並みの生命力を持った君の心配なんて、する必要はないだろう?」

「おい?」

「それにモニカちゃんは僕の研究にいろいろと協力してくれてるしね」

「それなら俺だって協力してるぜ?　なんでこんな扱いが違うんだよ?」

レイスはくいつと眼鏡を上げた。

「簡単なことさ、研究の協力者と実験台の違いだ」

「……よし、一発ぶん殴っていいか?」

二人はお互いににやりと笑い合う。

別に本気で喧嘩している訳ではない、二人にとってはこれがある種の挨拶のようなものだ。

「……ところで、君の方の経過はどうだい」

レイスはクロウに言った。

「んおつ？ お前が俺のことに興味示すなんて珍しいな。腕の方は火傷だけで、少しすりゃ……」

「違う違う、君の怪我のことなんて興味ないよ。 僕が興味有るのは現在観察中の実験だよ」

「……は？ 実験？」

レイスは一瞬、ちらりとモニカの方に視線をやり、クロウに視線を戻す。

「はたして君はいつになったら少女の想いに気付くのかっていう実験のね」

「ひあつ?!」

モニカが何か妙な悲鳴を上げた。

クロウはきよとした顔をする。

「……んだそれ？」

「やれやれ、進展無しか。 まあすぐに結果が出てもつまらないしね。とりあえずはこのまま観察を続けようか」

「……なんかよくわからねけど面白いのかそれ？」

「実に面白いよ。バレンタインデーにチョコレート材料を山ほど買ったのに、結局納得のいく物が作れなくて材料を使いきってしまい渡せなかったり、ギルドの食堂でせつせと好きな食べ物をリサーチしたりと実に微笑ましい」

レイスはもう一度ちらりとモニカの方に視線を向けた。

モニカは顔を真つ赤にしたまま口をぱくぱくさせている。

レイスにはやりと意地悪く笑うとまたクロウに視線を戻した。

「特に面白いのが君の誕生日の時に……」 「きゃあああああ!？」

モニカはあわててレイスの口を塞いだ。

「な、なんで!? どうして……」

「うちのギルドマスターもこの実験にいたく興味を示してね、専属の密偵を一人貸してもらった」

「な、何をやってるんですか?!」

「しかしあまりに進展が無いのね……。 どうだい? 媚薬でも用意してあげるから一服盛って夜這いでも……」

「~~~~~っ!」

モニカは耳まで真つ赤になって眼を白黒させていた。

クロウは難しい顔でポリポリと頭をかいている。

「おゝい、なんの話してんだ?」

「ああ、実はモニカちゃんが」「レイスさん!!」

モニカは顔を真っ赤にしたまま叫んだ。

さすがにこれ以上は可哀想だと思ったか、レイスは言葉を止める。

「ところで話は変わるけど……」

モニカの反応を一通り楽しみ終わると、少し真剣な顔付きに変わった。

「雪山で少々面白い事が有った。君たちにいくつか話しておきたいことがある」

No.36 策士2（レイスside）

レイスは雪山で起きたことを話した。

調査内容、能力が異常なドドブランゴ、イシュティスのこと  
クロウとモニカは少々驚きつつも黙って話を聞いている。

だがこの時、レイスはラルドのことは話さなかった。

ラルドの常軌を逸した気刃の使い方。  
レイスにはその正体に心当たりが有った。  
故に言わないべきだと判断した。

もしもラルドの力がレイスの思う通りのものだとなれば、それは  
誰にも言うべきものではなかったからだ。

「黒衣の死神、イシュティス……ねえ」

レイスの話が途切れたところでクロウは腕を組み考え込む。

「狩場での無差別殺人犯、黒衣の死神ってのは有名だが、子供って  
のはマジか？」

「大真面目だよ。 しかも実力的には僕と同等かそれ以上というレ  
ベルだね」

レイスがそう言うともニカも口元に手を当てて考えこむ。

「それに能力が異常なドドブランゴですか……この前の砂漠の迅竜といい金銀の火竜といい、妙なモンスターの話って最近多いですね」

モニカの言葉にレイスは頷いた。

最近のモンスターの生態系は異常だ。

本来の生息地域とは違う場所に現れる者や、明らかに本来より高い力を持った者。

各ハンターズギルドやシュレイドの研究組織“王立書士隊”まで動いて調査に当たっているがはつきりしたことはまだ掴めていない。

「レイスさん、何か理由に心当たり有りませんか？」

「……いや」

——だがこの時、レイスは嘘をついた。

彼にはモンスターの件もイシュティスの件も一つ心当たりが有った。

しかしレイスは沈黙を守り首を振る。

もし、全てがレイスの予想通りで有れば、教えれば完全に二人を巻き込むことになる。

だからあえて言わなかったのだ。

(……でも、彼は巻き込んでしまったね。……いや、巻き込んだと  
いうのは正確じゃないか)

レイスの脳裏に浮かんだのはまだ会って間もないラルドだった。

(僕の予想が全て悪い方に当たっているなら……彼が全ての中心に  
なる)

レイスはため息をつき、考えを回らせる。

(異常個体……黒衣の死神……そして……)

竜操術……早く真相を解明しないと)

† ―― 場所は変わり、ノーティスの街

街の中央にそびえる巨大な時計塔。  
その屋上に2つの人影があつた。

白いローブを身に纏い、絹糸のような髪、雪のように白い肌、そして宝石のような紅い瞳を持った少年と少女。

二人は時計塔の上から眼下に広がるノーティスの街並みを見渡していた。

「さあ、ここだよ。彼が住む街は」

少年は口元に妖しい笑みを浮かべながら少女に言った。

降りしきる雪の中、少女は小さく頷く。

「……………うん」

「……………何か不満でも？」

「……………うつん、ただ……………」

「ただ？」

「本当に……こんなことしなきゃいけないのになって……  
……私たちにこんなことする資格……あるのかなって……」

「その考え方は危険だな」

穏やかな口調、しかしその声には明らかな怒気が含まれていた。

少年は少女の肩にそつと手を回し、顔を近付ける。

「君はそのために産まれたんだ……。それに異を唱えるのは君自身の存在を否定することだよ。わかってくれるね？」

「……………」

少女はもう一度小さく頷いた。

少年はくすりと笑いながら少女の髪を撫でる。

「いい子だ、それでいい。」

君は何も考えず、何も感じず、ただ言われた通りにすればいいんだ  
……………」

少年は少女の髪に指を通してながら耳元で囁く。

「だから何が起きても何も考えるな、何も感じるな、僕に言われたことを守れ」

「……Yes, My Master」

少年は少女の言葉を聞くと夜闇に溶けるように消えていった。

「……………」

少女は眼下に広がるノーティスの街に眼をやった。

少女の影が少しずつ薄らいでいく。

「……………ラルド……………」

少女の姿が溶けるように消えていった。

後にはただ、雪だけが降り積もる。

## No.37 ???side(後書き)

+

後書き

読んでくれている読者様方こんにちは、セロです。

この次の話から一気に第一部のクライマックスに向けて動いていくので今のうちにと出てきました(笑)

この物語を投稿し始めて早いもので一ヶ月少々、ようやくここまで来たという感じですネ。

すでに第一部のクライマックスは半分程度書き上げており、今は早く二部を書きたくてウズウズしてますww

モニカがヒロインと思ってる人も多いと思いますが、実はまだ本ヒロイン出てないんですよ。僕の会心のキャラなんでもう早く書きたくてww

それとイシユ君 イシユティス

この子もかなりお気に入り、なんだか無邪気で凶悪なキャラって好きなんですよ。

そんな作者ひいきも有って二部以降の物語では彼が中心になる話も書く予定です。

まあ期待せず待っててください(笑)

さて、適当に喋ったのでそろそろ……

皆様、今後とも『神ヲ狩ル者』をよろしくお願いしますm ( ( m

それと感想やご意見ご質問大歓迎です ( ^ o ^ ) /

もしかしたら物語の流れが変わるかも……？

No.38 一つのクエスト

+

——雪山での一件から五日が経っていた。

大勢の狩人達で賑わうノーティスの集会所で、ラルドとデイビスは向かい合って軽い朝食を取っていた。

「ラルド、もう怪我は大丈夫なの？」

「うん、今のところ問題無し。むしろ調子いいかな？」

ラルドはサンドイッチをかじりながら治ったばかりの腕の状態を確かめて言った。

雪山での戦いでかなりの傷を負っていたが、その影響は特に感じない。傷痕もほとんどわからない程だ。

「凄いね、レイスさんからもらった薬、あんなひどい怪我がこんなに早く治るなんてさ」

「……………」

「? どうしたのラルド」

「……いや、レイスさんにもらった『メタル』って薬、スライム状の薬だったんだけど傷口に塗ったらうねうね動いて顔の方に登ってくるんだ。それがもう気持ち悪くて思い出しただけで寒気が……」

「そ、それってもう薬って言わないんじゃないかな」

ラルドは苦笑いを返した。

「まあ、治ったらいいんだけどね。  
当分はリハビリで軽めのクエストに行くことにするよ。この鉄刀にも慣れないといけないし」

ラルドは背中に納めてある、買ったばかりの鉄刀の柄を叩いた。

以前使っていた鬼斬波は修理もできない程に壊れてしまい、間に合わせて新しい太刀を買ったのだ。

「鬼斬波……気に入ってたんだけどな……」

「ラルドならすぐに作り直せるよ」

「ありがと、ついでにデイビスのガンランスの強化素材も探してあげるよ。いつまでもアイアンガンランスじゃ厳しいでしょ？」

「うん」

デイビスは脇に置いてあったガンランスを見た。

「けど強化しちゃうのも寂しいかな。このガンランス、いっぱいいっぱい思い出が有るし」

デイベスは鏡のように磨かれたガンランスを撫でる。

——ハンターの武器が綺麗な場合、ほとんど使っていないか、素晴らしく手入れが行き届いているかのどちらかだがデイベスの場合は後者だ。

毎日丁寧に磨きこんだガンランスは新品同様の輝きを保っている。

「やっぱり愛着かな、なんだか手放したくなくて」

「……初めて一緒にクエスト行った時はガンランスの使い方全然わからなくて暴発させまくってたよね。あの時はモンスターよりもデイベスの方が怖かったな」

ラルドは笑いながら言った。

昔……という程でもないが、初心者ハンターだった頃を懐かしみながらガンランスを見る。

「だってガンランスって操作ややこしいんだよ。……昔の話なら僕はラルドが女の子じゃないって知った時が一番びっくりしたな」

「……………」

ラルドはまた苦笑いを浮かべる。

最初デイベスがラルドに声をかけてきたのはラルドの少女っぽい容姿から女の子と勘違いしてのことだ。

もっとも、ラルドは初対面では九割型間違えられていたのでデイ

ビスを責めることもできないのだが

「勘違いに気付いた時の反応は傑作だったね」

「だって、女の子だと思ってた相手がいきなり『一緒にシャワー浴びよう』って来たらびっくりするよ」

「だからってシャワールームでひっくり返って壁破壊はどうかと思うよ？」

二人でしばらく思い出話に花を咲かせた。

こうやって話すとずいぶん濃い時間を過ごして来たと実感する。

「さて、そろそろ行こうか？　あまり長話して夜のクエストになるのも嫌だし」

「そうだね」

二人は席を立つとクエスト受付のところに向かった。

——受付の席に座っていたのはいつもと違う女性だった。

「あれ？　いつもの人は？」

ラルドはその見慣れない女性に尋ねる。

女性は事務的な笑顔をラルドに返した。

「現在、急用のため私が代理を務めております。クエストの受注ですか？」

「あ、はい。今日はどんなクエストが来てます？」

ラルドが尋ねると、女性は机の下から一枚の書類を出した。

「本日、お客様が受けられる依頼はこのクエストだけでございます」

「……一つだけですか？」

「珍しいね」

通常、少なくとも5や6はクエストが入っていたので1というのはかなり珍しい。

ラルドは気を取り直して書類に視線を落とす。

「えっと……内容は……」

「火山のドスイーオス一頭の狩猟ですね」

「………うん、リハビリにはちょうどいいか。じゃあこれにします」

「かしこまりました。手続きはこちらでやっておきますので」

受付はにこりと笑うと依頼書にはんこを押した。

「はい、お願いします。行こうか？ デイビス」

「はい」

そうして二人は集会所を出ていった。

それを見送る受付の女性は口元に笑みを浮かべていた。

「ウフフ、お氣をつけて……」

十 ―― 火山地帯 深部

「おじちゃん！ 標的はこっちに向かって来てるみたいだよ」

溶岩が明々と壁や高い天井を照らす洞窟内。

蛇竜 ガブラスが群れをなして悠々と飛び回るその場所にイシュテイスは来た。

岩に腰かけていた老人は入って来たイシュテイスに眼を向けると、ガブラスに食べさせていた生肉を群れに向けて放り投げる。

たちまち大勢のガブラスが肉にたかり綺麗に平らげていった。

イシュテイスは老人の元に駆け寄り、ぴよんとその胸に飛び込んだ。

「む……」

イシュテイスは老人の胸の中でごそごとと体勢を変えると、まるでそこが自分の定位置であるように老人の膝の上に座る。

「ガブラス、だいぶ手懐けられるようになったね」 後で僕も餌あげてみていい？」

「それより報告が先じゃな」

老人はイシュティスの頭を撫でながら眼を細める。

イシュティスも頭を撫でられ気持ち良さそうに眼を細めた。

「ターゲットはちゃんと餌に食い付いたよ。もうすぐ麓に着くみたい。おまけが一人ついてるけど」

「そうか……ではそろそろ行かんとっ、 “あれ” を抑えるのをあやつら二人に任せてしまっておるからの」

老人の言葉を聞いてイシュティスは膝から飛び降りた。

軽くステップを踏んで老人の方に向き直ると楽しそうに笑う。

「いよいよだね、楽しみだなあ」

イシュティスは洞窟の奥へと駆けて行った。

「……………」

老人は何も言わず静かに眼を閉じる。

何かを祈るように、眼を閉じたまま洞窟の天井を仰いだ。

「我らの罪。許されずともその先に未来が有らんことを……」

老人は小さく呟き岩から降りると、イシュティスの後を追ってい

った。

十 ― 火山 麓

火山内部へと続く洞窟の前にラルドとデイビスはいた。

周りには元は火山弾だと思われる岩がごろごろと転がり、洞窟内からはすでに肌を刺すような熱気が伝わってくる。

「うっ……、もうすでに暑いねやっぱり。」

クーラードリンク、クーラードリンク……」

ラルドはポーチからクーラードリンクを取り出し一気に飲み干した。

冷たい液体が身体に入り、暑さを和らげる。

「ラルドって暑いのが苦手なの？」

「うん……、ノーティスとの気温差もあるしね」

ラルドはそう言うのと服の胸元を少しはだけさせる。

「わわっ！」

するとデイビスはあわてて眼をそらした。

ラルドはうんざりしたようにデイベスを見る。

「露骨に恥ずかしがられると僕も傷付くんだけど」

「だ、だって。ラルドってやっぱり女の子みたいに見えるもん」

「……今さらだけど僕ってそんなに女の子っぽい？ けっこう筋肉も付いてきたし昔よりはたくましくなったと思うんだけど」

「ううん、女の子の服着たら絶対誰にもわからないよ。この間、ギルドの受付の人がラルドに女の子の格好させて、ミス ハンターコンテストに出せないかって相談してたし」

「……いや、フラグ立てないでよ」

「あはは、楽しみにしてるね」

デイベスもクーラードリンクを一気に飲み干した。

「それじゃ、クーラードリンクがなくなるまでにクエスト終わらせよう」

そう言いながらデイベスは腕をぶんぶん回しながら洞窟の中へと進んでいく。

ラルドはため息をついて表情を和らげるとデイベスの後を追った。

「あれ？」

「ん？ とうしたのデイベス」

洞窟に入ってすぐにデイベスは足を止めていた。

「あそこに居るのってドスイーオスだよね？」

ラルドはデイベスが指差した方を見る。

そこにはたしかにドスイーオスがいた。

だが不自然なことに、ドスイーオスはじっとラルド達の方を見たまま微動だにしない。

「……たしかにドスイーオス……だね。  
なんか様子が変わけど……」

するとドスイーオスはくると向きを変え洞窟の奥へと走っていく。

「あつ、待てー！」

「よし、追いかけよう」

二人はドスイーオスを追って洞窟の奥へと入って行った。

——火山の中でもドススイーオスはひたすら逃げ続ける。

だが時折、二人が追い付いて来るのを待つように走る速度をゆるめ、二人が追い付いて来るとまた走り出す。

そうしてラルドとデイビスはどんどん火山の奥へと進んで行った。

「……何なんだろうあのドススイーオス……いったいどこまで……」

すると急に視界が開け、ただっ広い、空の見える場所に出た。

溶岩が冷え固まって作られたらしい地形で、ところどころには溶岩の川が流れているのが見える。

「ここは？」

「ハア……、ハア……、“決戦場”だよ」

少し遅れて来たデイビスが息を切らせながら言った。

「決戦場？」

「うん……ハア……二十年ぐらい前に……ハア……ポケケ村のハンターと……ハア……大きなモンスターが……ハア……最後の戦いをした場所なんだって」

「ああ、聞いたことがあるよ。たしか……」

ラルドがそう言いかけた時、突然大地が轟音と共に揺れた。

「うわ?!」

「じ、地震なの?」

立ってられない程の揺れ、ラルドとデビスはたまらず地面に手をつく。

するとラルドは地面の下に何かを感じた。  
岩盤の下を何かが動いているような感覚。

「地面の下に何か……」

——その時、ラルドの首筋の毛が一気に逆立った。

「つつ?!」

いつも、間近に迫る危険を伝えてくれる“何か”  
だが今回は勝手が違った。

「何……これ……?」

ラルドは自分の肩を抱いた。

悪寒。身体が震えだし、止まらない。

心を満たしていく正体のわからない恐怖。吐き気がする。

ラルドは訳もわからず、いつの間にか嗚咽を堪えていた。

それに気付いたデイビスが揺れ続ける地面にバランスを崩しながらも駆け寄ってくる。

「ラ、ラルド……。どうしたの？」

「駄目……逃げ……なきや……逃げ……逃げて……」

ラルドは絞り出すような声で言った。

轟音と揺れは見る間に大きくなっていく。

そして——大地が割れた。

大地が割れ溶岩が吹き出す。

デビスはラルドを引きずるようにしてその場から逃げ出した。

必死に走りながら振り返るデビスの眼に、溶岩の中から現れる巨大な影が映った。

下顎からそり立つ、人間の身体よりも太く長い凶悪な大牙。黒く荒々しい重殻から突き出す無数の棘。岩盤を引き裂く巨大な爪。鋭い眼光。

「え……？」

デビスは思わず足を止めた。

ラルドも震えながらそのモンスターを見た。

「覇竜……アカム……トルム……」

ラルドはそのモンスターを知っていた。

いや、そのモンスターは誰もが知っていて当然のモンスターだっ

た。

10年前、白き神と呼ばれた竜により、各地に甚大な被害が出た崩竜事変のさらに10年以上前。

同じように各地に大きな爪痕を残した竜がもう一頭いた。

名は“覇竜 アカムトルム”

災厄の象徴とも言われ、伝説や神話にさえ名を残す存在。

ラルドはそれらに関する本を読んだことが有り、よく知っていた。

そして、この状況がどれだけあり得ないことも。

「何で……何でアカムトルムが……だって……二十年以上も前にポツケ村のハンターに倒された筈なのに……」

「ラ、ラルド……」

「……先に逃げて……」

ラルドは身体を震わせながら絞り出すように言った。

「だ、だけどラルドが……」

「僕は……」

金銀の火竜と戦った時と同じ感覚。

ラルドは感じていた。この先にある未来を。

「僕は……」

自分とデAVIS、両方の死。

だがラルドはそれを突き付けられているからこそ、すぐに判断を下せた。

「囧になって……時間を稼ぐ」

「だ、駄目だよそんなの！」

「……大丈夫」

——ドクンと心臓が脈打った。

ラルドの瞳が紅く染まっていく。

血のような瞳でアカムトルムを見据えゆっくりと口を開いた。

「行け、足手まといだ」

デAVISは訳がわからず目を白黒させる。

「ラルド……逃げようよ……」

「二人では無理だ。もう奴の領域に入っている」

「え……？」

次の瞬間、決戦場の至るところから溶岩が吹き出した。

そして決戦場の外縁に沿うように溶岩が流れていく。

「な、なにこれ……?!」

「決戦場とはよく言ったものだ。……俺が気を引いてる間に向こう岸に渡れそうな場所を探せ、俺も適当なところで引く」

ラルドは激しい気刃を纏う鉄刀をアカムトルムに向けた。

「クロウの時と同じ……もう一度変えて見せる！」

ラルドは何かを叫んだデイベスを残し、アカムトルムに向かって走り出した。

近づいた瞬間、霸竜の周りの地面が複数箇所融解し、融解してきた穴から溶岩が噴き出して来た。

ラルドは噴き出す溶岩を避けながら一気に霸竜に接近する。

跳躍。鉄刀を振り上げ、霸竜の眉間目掛けて勢いよく降り下ろす。

鉄刀の刃はアカムトルムの身体を切り裂くには至らず、ただ表面を削る。

霸竜の巨大な眼がラルドを捉え、巨大な剛爪を降り下ろしてくる。

「なまくらが……！」

ラルドは吐き捨てるように言いながら、大地を砕くほどの重い一撃をかわし、逆にその腕を踏み台にして霸竜の身体を駆け登る。

そして鉄刀の切っ先を翻し、霸竜の眼を一気に切り裂いた。

散る鮮血。霸竜は苦痛に悲鳴を上げながらラルドを振り払う。

ラルドは空中で素早く体勢を入れ替え着地した。

太刀に付いた血を拭いながら霸竜を睨む。

「急所さえ狙えば……いける」

ラルドが再び攻撃しようと鉄刀を握り直したその時、霸竜がゆっくりと巨体を起こし、立ち上がった。

（これは……まずい！！）

直感。危険を感じ、すぐにその場から離れようとする、だが間に合わない。

霸竜は大地を揺るがす巨大な咆哮を上げた。

「っ！！？」

咄嗟に耳は塞ぐが咆哮が衝撃波となってラルドを襲った。

大地が削れるほどの凄まじい衝撃波。

ラルドは吹き飛ばされ硬い岩盤に叩きつけられた。

「うー！」

肺の空気が一気に押し出される。

すぐさま立ち上がろうとするが脚が震え、言うことを聞かない。

「く……そ……、一撃でこんな……」

ラルドが立ち上がろうともがくあいだにも、アカムトルムは大地を揺るがしながらゆっくりとラルドに近づいて来る。

「く……」

ラルドは歯を食い縛った。

その時、一つの影が霸竜に向かって行った。

「やめろおー！！！」

「っ？！」

それはデイベスだった。

泣きわめきながら霸竜に向かって行くとガンランスを叩き付ける。

「やめろおー！！！」ラルドにこれ以上手を出すなおー！！！」

だがアカムトルムはそんな攻撃には見向きもせずラルドに近寄っていく。

「う……やだよ……死んじややだよラルド……」

デイベスはぼろぼろと涙を流しながらガンランスの砲口を覇竜の足に向けた。

同時にそこから青白い火が吹き出してくる。

「っ！ 駄目だ！ やめろデイベス……！」

「いつけえ……！！ 竜撃砲……！」

爆音とともに竜撃砲の炎が覇竜を襲う、さすがの覇竜もわずかにふらつき動きを止めた。

「や……やった……」

だが次の瞬間、屈み払われた覇竜の剛爪がデイベスを吹き飛ばしていた。

人形のようにデイベスの身体が飛び、地面を転がった。

覇竜はゆっくりと向きを変え、デイベスの方に向き直る。

「デイベス……！」

ラルドは震える足を鼓舞して無理やり立ち上がった。

覇竜は大きく大気を吸い込み始める。

口の中からは何かが渦巻くような音が響き出した。

「デビースー！」

ラルドはふらつきながらデビースの元へ走り出す。

デビースはガンランスを支えによりよると立ち上がった。  
ラルドを見る。

「ラ……ラルド……そっちはだいじょう……」

覇竜の口から巨大な竜巻のようなブレスが放たれた。

プレスは大地をえぐりながらデビスに迫っていく。

「うわあああああ？！」

デビスはとっさに盾を構えた。

だがプレスが直撃した瞬間、一気に盾に亀裂が走る。

「うあ……！！」

盾を支える腕が折れそうになる程の衝撃。

盾に次々と新しい亀裂が走っていく。

恐慌にかられたデビスは声にならない悲鳴を上げた。

——次の瞬間、盾が粉々に砕け散った。

プレスの直撃を受けたデビスの身体が木の葉のように空高く舞い上がり、落ちてくる。

ラルドの眼は動く機能を失ったかのようにその光景に釘付けになっていた。

受け身もなく不格好に地面に落ちたデイビスの身体はピクリとも動かない。

「デイ……ビス……？」

ラルドの瞳の、紅い輝きが消えていき、元の黒へ戻る。

ラルドはふらふらとよろめきながらデイビスの元に走った。

「う……………」

ラルドはデイビスの姿を見て愕然とし膝をついた。

デイビスは身体中にひどい火傷を負い、盾を持っていた右腕はあり得ない方向に折れ曲がっている。

「そ……んな……こんな傷……………」

ラルドは一目見て悟った。

——助からない。

息が詰まり、目眩がしてくる。

「……………ラル……………ド……………？」

デイビスは消え入りそうな声で言った。  
ラルドは歯を食い縛り、太刀を地面に刺してデイビスの傍らにしゃがみこむ。

「どうして……逃げろって言ったのに……逃げてたら……こんなこと……」

「だっ……て……ラルドが死んじゃう方が……怖いよ……」

デビスは弱々しく笑う。

ラルドの眼から涙が溢れた。

その言葉が、その笑顔が、何よりも嬉しく、そして悲しかった。

デビスの無事な方の手を固く握る。

「ごめん……ごめん……」

泣きながら、ただその言葉を繰り返す。

デビスは僅かに笑った。

「……やっぱり……女の子……みたいだよ……」

いつも通りの、しかし遥かに弱々しい口調でデビスは言った。

デビスの眼から徐々に生気が薄れていく。

デビスはそつとラルドの手を握り返した。

「デ……ィ……ィス……？」

「……ありがと……ぼく……と……友達……で……」

デイビスの言葉が途切れた。握っていた手から力が抜ける。

「デイビス……？ ……デイビス！！」

必死に呼び掛ける。だがデイビスがそれに答えることはなかった。

「う……ああ……うあああ……」

ラルドは悲痛な叫び声を上げた。  
涙が止めどなく溢れてくる。

覇竜は高々と咆哮を上げた。

ラルドはそちらを睨んだ。

哀しみと入れ換わるように心を焦がす怒りと憎しみ。

ラルドの瞳が再び紅く染まっていく。

「許さない……」

ラルドは太刀に手を伸ばし、ゆっくりと立ち上がった。

爛々と燃える瞳が覇竜を捉える。

「許さない……殺す……殺す殺す殺す！！ ……お前だけは……！！」

ラルドの瞳の紅が見る間に濃くなっていく。

地を蹴った。

「うわああああ!!」

ラルドは一気に距離を詰め鉄刀を振るった、それに対し覇竜もその剛爪を振り下ろす。

両者の武器がぶつかりあい鉄刀は真つ二つにへし折られた。

「それが……どおしたああ!!」

ラルドは強引に突っ込み、折れた鉄刀に気刃を纏わせた。  
気刃が黒く逆巻き、膨らんでいく。

「一の章……黒の……」

だがラルドが仕掛ける前に覇竜は動いた。  
頭を大きく振るい、凶悪な大牙でラルドを尻ぎ払ったのだ。

牙がラルドの腕を掠めた。

「うわああああ?!」

骨が碎ける嫌な音。

肘を掠めただけでも関わらず、その力はラルドの骨を容易く砕いてしまった。

ラルドの動きが鈍る。

そこを再び覇竜の牙が襲った。

突き上げられ、身体が宙を舞い背中から落ちる。

「くっ……!!」

あまりの衝撃に息が止まる。

覇竜は追い討ちをかけるように、容赦なくラルドに巨大な尻尾を降り下ろした。

凄まじい衝撃が走り、大地が砕けた。

—— 静寂。

覇竜がゆっくりと尻尾をどけると、そこには力なく地面に横たわるラルドがいた。

ラルドを中心にゆっくりと血の池が広がっていく。

ラルドは弱々しく首を動かし、覇竜の方を見た。

覇竜はじつとラルドを見下ろしている。

その口からはぼたぼたと涎が滴っていた。

視界が暗転していく。

「僕……は……」

ラルドは血を吐いた。

「デイ……ビス……ごめん……」

暗転していく世界。

ラルドの眼がゆっくりと閉じられる。

そして、ラルドの意識は闇へと堕ちていった。

## No.42 白の少女

+

「う……ん……？」

ラルドはまぶたを通して入ってくる光に意識を取り戻した。

目を開けようとするが周りがありにも眩しくて目が開けられない。

だが、感覚で固い寝台に寝かされていることがわかった。

感触に覚えがある。ハンターズギルドがベースキャンプに用意したある寝台だ。

（僕……なんでこんな……？）

身体を動かそうとしたが、まるで全ての関節が固まってしまったかのように、動くのがひどく辛い。

それに喉もカラカラに渴いていて、まともに声を出すこともできない。

「気が……ついた……？ 大丈夫……？」

寝台の脇から声が聞こえた。

（女の子の……声……？）

遠慮がちに掛けられた小さな声。

鈴を鳴らすような綺麗でかわいらしい声だった。

「何か……欲しい物……ある？」

少女の声はそう尋ねてくる。

ラルドは口を開いて声を絞り出した。

「……み……ず……」

「水……？ 水が……欲しいの……？」

ラルドはその声に小さく頷く。

「……少し……待ってて、近くに……湧き水があったから……」

するとそばにいた少女の気配が離れていった。

少しして足音が戻って来る。

そっと、いたわるようにラルドの頭を支え、何か柔らかい感触がラルドの唇に触れた。

「ん……」

冷たい水が唇の隙間から流れ込み、喉が潤っていく。

(……………なんだろう？ この感触……………)

ラルドは眩しさを堪えながらうつすらと目を開ける。

——文字通り眼と鼻の先に少女の顔があった。

少女は眼を閉じ、絹糸のような髪を抑えながら口移しでラルドに水を与えていた。

(……………)

一瞬の思考停止。

「……………わあああああ？！？！」

「きゃ？！」

思わず叫び声を上げてしまったラルドに、少女は驚いて顔を離れた。

大きく眼を見開いておどおどとした様子でラルドを見る。

ラルドも顔を真っ赤にして少女を見返した。

——歳はモニカよりもさらに下に見える。

絹糸のような艶やかな髪、純白のローブに身を包み、肌も陶器のよう白い。

宝石を思わせる、透き通るような紅い瞳でラルドを見つめながら、少女は不安そうにそわそわとしていた。

「な、ななな何してたの!？」

「……水、飲ませてた……」。

……何か……嫌だった……?」

少女は不安そうに言いながら近くの岩から染み出している湧き水を指差した。

要するに入れ物が無かったので口移しにしたのだろう。

ラルドは急に申し訳ない気持ちになって身体を小さくする。

「……あゝ、えゝと……ありがとう。それとごめんなさい、本当にごめんなさい」

「大丈夫……少し驚いただけだから……」

「いや、そうじゃなくて……ほら、君、その……女の子だし……」

「??」

少女はきょとんと首を傾げた。

「い、いや、気にしてないならいいんだけどさ。えっと……君は」  
「……それより……何があったか……覚えてる?」

少女はラルドの言葉を遮るように言った。

「何がって……そういえば僕……何でこんな……」

ラルドは額に手を当てた。

「たしか……僕は……」

瞬間、ラルドの脳裏にあの光景がフラッシュバックした。

決戦場。覇竜。そしてデビリス。

——戦慄が走る。ラルドは少女の肩を掴んだ。

「デビリスは——僕の仲間は?!」

「……………」

少女は眼を伏せ、黙って首を振るとベースキャンプの外れを指差した。

そこにはぼろぼろに壊れたアイアンガンランスが地面に突き立てられている。

そしてその下の地面は僅かに盛り上がっていた。

「……………え?」

ラルドの頭が真っ白になった。

ふらふらと立ち上がるとガンランスの前まで行き、糸が切れた人

形のように膝をついた。

後ろから静かに少女が近付いてくる。

「……火山で倒れてたのを……五日前に見つけてここまで連れてきた……。」

……そちの人は……もう……」

ラルドは答えなかった。

茫然とガンランスを見つめたまま、何も答えない。

少女は後ろから、ラルドを包み込むようにして抱き締めた。

「……………ごめんなさい」

「……………え？」

ラルドが振り向くと、そこにはもう少女の姿はどこにも無かった。

——この時、ラルドは気にする余裕も無かった。

なぜ少女がこんな場所にいたのかも、いかにしてあの細腕で二人をキャンプまで運んだのかも。

なぜ自分が全くの無傷なのかも。



## No.43 一人の帰郷

+

ラルドが途中、どうにか竜車を拾い、ノーティスの街まで降りついたのはさらに丸一日経った後だった。

ラルドは虚ろな眼のまま、ふらふらと通りを歩いていく。

狩場で仲間のハンターに万が一のことが有った場合にはまずギルドに報告するのがきまりとなっている。

ラルドは半ば思考を停止させたまま、きまりに従いギルドへと向かっていたのだ。

——途中で大きな荷物を背負った男とぶつかった。

「おい！ 気を付けろ！」

男は怒鳴り声を上げて走り去っていく。

その時になってようやくラルドは周囲の異変に気が付いた。

ラルドが見たのは、大きな荷物を持つ人々や大小様々な馬車や竜

車。

そのほぼ全員が街の正面門の方に向かって行く。

「これは……」

明らかに何か異常な状態。と、その時一人の女性がラルドに気づき走り寄って来た。

「ラルドちゃん！」

それはギルドマネージャーだった。

ギルドの受付嬢達も一緒に、全員が大きな荷物を持っている。

ギルドマネージャーはラルドの前まで来るとほんとに安心したように息を吐いた。

「よかった。連絡が取れないって心配してたのよ」

ラルドは小さく頭を下げて、周りを見回す。

「何が起きてるんですか……？」

「ギルドから避難勧告が出たのよ」

マネージャーはそう言っていると背負っていた荷物から新聞の束を取り出した。

「これ、今朝の新聞」

「……新聞？」

ラルドは手渡された新聞を開いた。

### 覇龍の進行

火山地帯に現れた覇龍は、まずシュレイドに侵攻。

国境付近の砦にて、シュレイド第三騎士団が多大な被害を出しながらもこれを撃退することに成功した。

現在、覇龍は元来たルートを引き返して火山地帯まで戻ってきており、ノーティスを初めとする周辺の都市や町にはギルドから避難命令が出されている。

また、ハンターズギルドは著名なG級ハンター、クロウ「レッドハート氏と、レイス」エルマリス氏を中心とした討伐隊を派遣することを正式に決定した。

現在、彼らはノーティス集会所で――

ラルドの中に、消えていた怒りが再び戻ってきた。固く歯を食い縛り文面をもう一度読み直すと、ラルドは新聞を投げ捨て、走り出

していた。

「ちょっとラルドちゃん!？」

マネージャーの声にも振り向かず、走り続ける。

行き先はハンターズギルドの集会所。

人波を避け、集会所の前までたどり着くと勢いよくドアを開けた。

いつもと違いガランとした集会所。

その一角にいたクロウとレイスを始めとする20人程のハンターの一団を見つけて駆け寄る。

「クロウ！ レイスさん！」

二人は驚いてラルドを見た。

「ラルド?! お前なんでここに……」

「そんなことどうでもいい！ 僕も一緒に行かせてくれ!!」

あまりの剣幕にクロウでさえたじろいだ。

「とっつ、どうしたんだ？ お前らしくもない」

「それもどうでもいい！ とにかく僕も……」

「……落ち着け」

クロウはいつもより静かな、しかしそれでいて強い口調で言った。

ラルドは言葉を詰まらせ、息を整える。

クロウは厳しい表情でラルドが落ち着くのを待った。

「何が有った？ 話してみろ」

「……………実は」

——ラルドは一連のことを話した。

火山、覇竜、そして……………デイベス。

全て聞き終えたクロウは額に手を当て俯いた。

「……………マジかよ……………デイベスが……………」

「クロウ……………お願いだ！ 僕も一緒に……………僕はデイベスの仇をとりたいんだ！！」

「…………………………」

「金火竜を倒したのだって僕だ！ 足手まといにはならない！」

クロウは何かを見定めるように黙り込む。

ラルドはそれに苛立った。

「たとえば、刺し違えたって僕は奴を……」「……駄目だ」

クロウはいきなり、はつきりと言った。

ラルドは啞然としてクロウに掴みかかる。

「……どうして？」

「……今のお前じゃ足手まといだ。そんな奴を連れていく余裕はない」

「だから大丈夫だって言ってる！ それにクロウだってまだ怪我が治ってないじゃないか！！」

そう、クロウは金銀の火竜との戦いで受けた傷がまだ完治していなかった。

左腕には今も分厚く包帯が巻かれている。

「それでもお前よりはましだ。わかったらお前はもう帰れ」

「……なんだよ……それ……」

ラルドは怒りに震えた。

クロウの胸ぐらに手をかける。

「僕には力が有る……！！ クロウもそれを見たはずだ……！！ なの

にどうして……」

「黙れ……餓鬼が……」

クロウはラルドを突き飛ばした。

あまりに強い力で押され、ラルドは尻餅をつく。

クロウはラルドに大剣を向けた。

「次になんか言ったら、その両足へし折ってやる……」

凄まじい殺気。

下手をすれば本当にやりかねないと思わせるものがそこには有った。

「くそっ！ もついい!!」

ラルドは吐き捨てるように言つと立ち上がり、集会所から飛び出していった。

+

——クロウは大きくため息をついて大剣を背中に納めた。  
レイスも小さくため息をつく。

「ずいぶん荒っぽい方法だったね。君らしいといえば君らしいけど」

「……んだよ？　なんか文句あるか？」

レイスは首を振る。

「いや、あれが最善だ。むしろあれ以外なら文句を言ったね」

するとクロウの表情が少し和らいだ。

「悪い。……それと今のうちに礼言つとく。こんなクエストに付き合ってくれてありがとな」

「なに、気にする必要はないよ。僕はあのアカムトルムの素材に興味があるだけさ。

……君もこんなクエストなんかで死んではいけないよ」

「へえ、お前が俺の心配するなんてな」

「当然だよ」

レイスは眼鏡をクイツと上げた。

「君に死なれたらこの間作った新薬の実験台がいなくなるからね」

「……んなことだろうと思っただぜ」

「……それに、彼女が泣く様はあまり見たくないんでね」

「そりゃお互い様だ」

クロウはニツと齒を見せて笑う。

「んじゃ、お前もせいぜい気張れよ。あいつを泣かせないために」

そう言っ てクロウは大剣をレイスの方に掲げた。

レイスも口元を弛めて背中の中のランスを手取る。

「そうだね。それじゃあ君も死ぬことは許さないよ。彼女を泣かせないために」

二人は互いの武器を軽く打ち合わせた。

## No.44 戦う理由

+

——ラルドはあてもなく街の中をさま迷っていた。

「……………どうして」

裏切られたような気分だった。

一人歩きながら拳を握りしめる。

（もうクロウなんてどうでもいい。僕一人でも……………）

ラルドは足を止めた。

（それには武器……………武器がいる。今まで使っていたのよりもっとずつと強い……………覇竜を斬れる武器……………）

その時、脳裏にある人物が浮かんだ。

（そうだ……………あの子ならもしかしたら……………）

ラルドは心を決め走り出した。

ラルドは息を弾ませながら街の外れを走り続けていた。

辺りにはほとんど民家はなく空き地が目立つ。その中でラルドは目的の屋敷を見つけた。

（見えた、モニカの家！）

モニカは曲がりなりにもG級ハンターだ。相応の強力な武器も持っているはずと判断したのだ。

扉の前まで行き扉が壊れそうになるぐらい激しく叩く。

「モニカ！！ 僕だ！ 開けてくれ！！」

すると扉がゆっくり開き一匹のアイルーが顔を出した。

「ニャ？ ラルド様？ あまり扉を強く叩いたら……ニギヤ？！」

そのアイルーの話も聞かず無理矢理屋敷の中に入って行く。

ラルドは屋敷の中を見回した。

「モニカ！ どこにいるんだ！？」

「ラルドさん？」

モニカが松葉杖をつきながら奥から現れた。

ラルドはモニカに駆け寄り乱暴に肩を掴む。

「きゃっ!？」

「お願いだ！ 僕に武器を貸して！ G級ハンターなら何かあるよな？」

あまりに乱暴に肩を掴まれてモニカは悲鳴を上げた。  
あわてて先程のアイルーが止めに入る。

「ラ、ラルド様落ち着いてくださいニヤ！ ご主人様はまだ怪我が治ってませんニヤ！」

ラルドは言われてはっとして手を離れた。

モニカは辛そうに表情を歪めている。

「……ごめん」

「いえ、あの……何かあったんですか？ ラルドさんらしくありませんよ？」

モニカはラルドの顔を心配そうに覗き込む。

ラルドは眼を伏せた。

「実は……」

——ラルドは先程の集会所の件も含めて、これまでのことを全て話した。

「……………っ?!」

モニカは驚きながらも最後まで黙ってその話を聞いていた。

全ての話を終えた後、再びラルドはモニカに詰め寄る

「お願いだ。あの覇竜を倒すにはもっともっと強い武器が必要なんだ」

モニカは一瞬、追憶に浸るような遠い眼をした後、ゆっくりと口を開いた。

「ラルドさん……………クロウさんが何故一緒に行くのを断ったか……………解りますか?」

「……………え?」

モニカは真っ直ぐにラルドの眼を見たまま続ける。

「……………ラルドさんは何のために覇竜を倒したいんですか?」

常とは違う強い口調。ラルドは僅かにたじろいだ。

「……それは……デビスの仇を討つため……」 「では、何故仇を討ちたいんですか？」

「それは……」

ラルドは答えに詰まった。モニカの眼から視線を外す。

モニカはさらに続けた。

「憎いから、許せないから……違いますか？」

「……………」

「わかってるはずです。仇を討つてもデビスさんは喜びも……生き返りもしない。所詮、仇討ちなんて自己満足でしかないんです。そして、そういう人に限って周りの人の気持ちも考えず『自分はどうなってもいいから』って言うんです」

「……………」

「クロウさんが断った理由……それはラルドさんに死んで欲しくないから……大切な仲間を失いたくなかったから……」

ラルドは視線を反らしたまま固く拳を握りしめた。

「僕の気持ちも……知らないで……」

「……私が悲しくないとでも思ってるんですか……？」

悲痛な響きのある声。

ラルドはその言葉に視線を上げると、モニカの頬を一筋の涙が伝うのを見た。

モニカは涙を拭い、再び力強い眼でラルドを見る。

ラルドは息が詰まるような感覚を覚えた。

「……………じゃあ」

ラルドはゆっくり口を開く。

「じゃあ…………、どうしてクロウとレイスは…………二人は何のために戦ってるの…………？」

するとモニカは僅かに表情を和らげた。

「その答え、ラルドさんは解ってるはずですよ」

「……………護るため…………大切なものを…………失わないため…………」

「…………それがわかってくれてるのなら十分です」

モニカはニツコリと笑い、アイルーに何か合図を送った。

アイルーは何かを察したようで屋敷の奥に行く。

しばらくしてアイルーが一本の太刀を持って来た。

「ニャ…………ラルド様、どうぞ…………」

そう言ってアイルーは太刀をラルドに差し出した。

「モニカ……？」

「龍刀【却火】

昔……父が使っていた物です」

ラルドはその太刀を手を取った。

モニカも太刀に手をかける。

「行くんですね？」

ラルドが静かに頷くとモニカはそつと手を離れた。

「てつきり行くのを止められるかと思ったよ……」

「止めませんよ。怪我さえ無ければ私が行ってますから。

ただ……知っておいて欲しかったんです。ラルドさんが死んだら悲しむ人がいることを……」

モニカは小さくそう言うラルドの手を握った。

「……約束です。敗けてもいいです。必ずみんなで……クロウさんやレイスさん達と生きて帰って来てください……」。

もう……誰かがいなくなるのは……嫌ですからね……」

ラルドはその言葉に頷くと龍刀を背中にかけた。

「行つてらっしゃい」

「……行つてきます」

ラルドはモニカの手をほどくと屋敷から飛び出して行つた。

「行きましたニヤ……」

「……うん」

モニカの眼から大粒の涙が流れた。

アイルーは氣遣うようにモニカを見上げる。

「ご主人様……無理しすぎですニヤ……」

「……大丈夫……でも、ちょっとみっともなく泣くから……少しだけ一人にして欲しいかな……」

「……わかりましたニヤ……」

そう言つてアイルーは屋敷の奥に引つ込んで行つた。

その場に一人残つたモニカは崩れ落ちるようにしゃがみこみ、声を殺して泣き続けた。



+

日は沈み、辺りを夕闇が支配し始めた頃、一台の竜車が火山の麓に来ていた。

「ここでいいです」

「そうですか、お氣をつけて」

ラルドは竜車から降り、夕闇の中噴煙を上げる火山を見上げた。

クエストに行く時に顔馴染みになった竜車の御者に無理を言つて火山まで送ってもらつたのだ。

竜車が走り去つて行くのを見送りながら、背中に納められた太刀の感触を確かめる。

—— 龍刀【却火】

モニカから借り受けた太刀で龍属性最高峰の業物。

触れているだけで力が湧いてくるような氣さえする。

ラルドは夜風を感じながら静かに眼を閉じた。

（ごめんね、デビス……少しの間だけ……君のことは忘れる……）

ゆっくりと眼を開けたラルドの瞳の色は清んだ紅に変わっていた。

「今はただ、護るために。二度と失わないために……」

ラルドは火山へと踏み込んで行った。

+

「来るぞ!!」

クロウは叫んだ。

覇竜は大地を揺らしながら突進してくる。

クロウとレイスは大回りに左右に別れて走った。

覇竜はクロウには見向きもせず、レイスを追いかける。

「やれやれ、モンスターに追いかけられるのは嬉しくないね」

レイスはバックステップで距離を調節しながらコート両腕の袖からボウガンを取り出した。

弾丸を装填。通常弾を連射する。

しかし覇竜は弾幕に怯むことなく突っ切ってくる。

大気を断ち切る音と共にその剛爪が降り下ろされた。

「くっ!!」

レイスは素早く後ろに飛び退いた。

岩盤が碎ける爆音。飛び散る破片。ついさっきまで立っていた場所にクレーターができていた。

レイスはボウガンをコートの中に納めると入れ換えるように双剣を取り出した。

「鬼人化……!!」

双剣士特有の、剣を擦り合わせる動作と呼吸法の組み合わせ。

一時的に身体のリミッターを外し身体能力を跳ね上げる。

一気に距離を詰め双剣を振るった。

凄まじい手数と速度の斬撃が覇竜の顔面に吸い込まれていき、武器と重殻がぶつかりあうたびに激しく火花を散らせた。

だが覇竜はまったく動じず、大牙を振り回しレイスを薙ぎ払う。

「ぐ……」

咄嗟に後ろに飛んで衝撃を和らげるがそれでもかなりのダメージ

を受けた。

後ろに着地した際にバランスを崩す。

そこに向かって覇竜は再び突進していく。

「おい！！」

クロウが二人の間に割って入った。

大剣を大きく振りかぶり満身の力を込める。

「俺を忘れてんじゃねえ！！」

クロウは突進してきた覇竜に思いきり大剣を叩き付けた。

鈍い音を上げて重殻に亀裂が入り、僅かに覇竜が怯む。

その間にクロウとレイスは大きく距離を取った。

「……おい、無事だろうな？」

「もちろん……とはいえなかなかきついね」

クロウが声をかけるとレイスはかぶりを振った。

額にはべつとりと脂汗が滲んでいる。

「とんでもないタフさと頑丈さそれにパワーだ」

レイスは呼吸を整えながら覇竜を見た。

「僕の腕力では、手数で攻めるには分が悪いね。僕は援護と支援に回る。火力役は君に頼めるかな？」

「おう！」

「ただし一撃離脱が絶対だ。一撃でももろに貰えばアウト。君にリタイアされればいよいよ手が無くなってくる」

「わかってる……」

クロウは苦々しく笑った。

「一緒に来たハンターが一撃で蹴散らされるの、嫌という程見たからな……」

——覇竜討伐のため一緒に来ていたハンターはすでにやられ、クロウとレイスの判断で逃がした後だった。

ほぼ全員が、覇竜の攻撃を一撃受けただけで戦闘不能に追い込まれた。故に二人はここまで深追いはせず回避を優先して戦っていた。

だが長期戦もまた、有効とは言えなかった。

戦いと、火山地帯の暑さに体力を削り取られていくクロウとレイスに対し、覇竜は疲労する様子も見せず凶悪な攻撃で二人を追い立て続けている。

「せめて火力がもう少し有ればね……初っぱなで仲間の大半をやら

れたのは痛かった」

「言ってる場合かよ。無いものは……」

クロウは言葉を止めた。

覇竜が大きく口を開け、轟音を上げながら周りの空気を吸い込んでいく。

「やべ……」「いけない!!」

辺り一帯を風ぎ払うように、巨大なプレスが放たれた。

横に屈み払うように放たれたブレスは大地を削りながら二人に迫った。

「レイス！ 下がれ！」

——避けられない。そう判断するやクロウはレイスの前に出て大剣を盾にした。

直後に地形すら変える程のブレスの衝撃が二人を襲った。

大剣が軋む音。

クロウは歯を食い縛り、しっかりとガードする。

だが大剣に鈍い嫌な音を立てて亀裂が走った。

「マジかよ……?!」

亀裂は徐々に広がっていき大剣全体に達する。

「くそ……」

クロウは最悪の事態を予感した。大剣が壊れてしまえばもはや勝ち目は無い。

だがその時、覇竜のブレスが止んだ。  
どうにかしのぎきつたのだ。

クロウは思わず息をつく。

——だが

「もう一撃来る！」

レイスの言葉にはつとして覇竜を見る。覇竜は再び大気を震わせながら大きく息を吸い込んでいた。

「おいおい、あれをそんな連発すんなよ……」

一瞬、亀裂の走った大剣に眼を向ける。

次の一撃はおそらく受けきれない。腕も痺れている。

クロウは爆発的な脚力で駆け出した。

受けきれないならブレス自体を阻止するしかない、瞬時にそう判断したのだ。

だが覇竜はクロウが向かってくるのを見るやいなや空気を吸い込むのを止めた。

照準を合わせるようにクロウの動きを顔の正面に捉える。

クロウは察した。

「もう撃てんのかよ……!!」

すぐさま回避に移る。だが不意を突かれた。  
ガードの体勢も整えていない。

この体勢からでは受けきれない。

ほぼ直感的にクロウは悟り、息が詰まるような感覚を覚えた。

（ヤバイ……）

その時、クロウの視野の外から一つの人影が走り込んで来た。

（ハンター……!?!）

クロウはそちらに眼を向けた。

速い。手には龍属性の黒い雷を纏った太刀。側面から一直線に覇竜に向かっていく。

その太刀が覇竜の横面を切り裂くのと覇竜がブレスを放ったのはほぼ同時だった。

逸れたブレスが噴煙に覆われた空を貫いていく。

覇竜に一太刀浴びせたハンターは大きく飛び退きクロウの隣まで下がった。

「無事か……?」

「！？ お前……！！」

それはラルドだった。 気刃を纏った太刀に付いた血を払い、紅い瞳でクロウの方を見る。

クロウはラルドを睨んだ。

「来るなって言っただろ……」

「すまない。けど……」

ラルドはクロウに太刀を見せるように突き出した。

その太刀を見てクロウの表情が変わる。

「その太刀は……」

ラルドは小さく頷いた。

「モニカと約束した。 みんなで帰る…… するために俺は来た」

「モニカが？」

ラルドは頷き、太刀をゆっくりと構え直す。

クロウは眼を鋭くしながらラルドの手にある龍刀を見ていた。

「あいつ…… 親父さんの太刀を……」

小さく呟き、龍刀とラルドを交互に見る。

大きく、わざとらしくため息をつき再び覇竜に集中した。

「その太刀、モニカにとって大切なもんだ。絶対後で返せ。返せなかったらぶつ殺す」

「……………ああ！」

ラルドは力強く言った。と同時に覇竜が動いた。

大地を震わしながら三人目掛けて突進してくる。

三人は大回りに走って突進を避けた。走りながらクロウとラルド、二人の間にレイスが入ってくる。

「で、熱血するのはいいけどどうするんだい？ 一人増えても敵しいのは変わらないよ？」

ラルドはチラリとレイスに眼をやり、龍刀に視線を落とした。

「……………俺に手がある」

「……具体的には？ 納得できなければ協力しないよ？」

ラルドの言葉にレイスはそう返した。

ラルドはこちらを追いかけて来る覇竜を見る。

「……一番問題になるのはやつの強度だ」

これにはレイスとクロウも納得した。

溶岩すら問題なく耐える覇竜の重殻は極めて強固だ。現にここま  
で、レイスとクロウは決定打になるようなダメージを一切与えられ  
ていない。

ラルドは鋭く眼を細めた。

「あれはクロウが？」

ラルドが言ったのは覇竜の額に走る大きな亀裂だった。

先程、クロウが渾身の力を込めて大剣を叩き付けた結果だ。

「龍属性の雷は龍の身体を破壊する……あのひび割れから太刀をね  
じ込む。体内……脳に雷を通せれば致命傷になるはずだ」

龍刀の刀身には今も黒い雷が絶え間なく走り回っている。

レイスは小さく笑った。

「了解。協力しよう。普通に斬りつけるよりは勝率が高そうだ。…  
…クロウもいいね?」

クロウはどこか不満げながらも頷いた。

「つつてもねじ込むったってどうすんだ? 近づくのも結構ヤバイぞあれは」

「そこは僕達で動きを止めるしかないね」

「やっぱそうなるか……」

レイスとクロウは踵を返し、覇竜に武器を向けた。

「ラルド、何が何でも隙は作ってやるから何が何でも決めろよ! でもって帰ったら飯おくれ!」

「……ああ!」

ラルドも覇竜の方に向き直り、クロウとレイスの後方から隙を伺う。

レイスは両手のコートの袖から二丁のボウガンを取り出した。

軽く振ると大型のリボルバーが回転し弾が装填される。

クロウは大剣の握りを確かめながらレイスに声をかける。

「弾の種類は？」

「麻痺弾だよ」

「効くのか？」

「僕の特別製だ。足一本ぐらいは止めれるよ」

レイスの言葉にクロウは頷く。

霸竜はもう目の前まで迫っていた。

「んじゃお前は右前足、俺が右後ろ足。いいな？」

「OK・了解だ」

その言葉と同時に二人は駆け出した。

突進を避け霸竜の右側面へ

レイスは一旦ボウガンをコートの中に納め、背中 of 暗夜槍を手に取った。

切っ先を前に突き出したまま霸竜の右前足に突進していき、重殻の隙間を狙って渾身の突きを放つ。

金属同士がぶつかり合うような音。暗夜槍と重殻がぶつかり火花が散る。

霸竜は振り払うように剛爪を振るった。

レイスは暗夜槍を手放し、飛び退く。

暗夜槍はまるで小枝を折るように簡単にへし折られた。だが、レイスの口元には笑みが浮かんでいた。

「やっぱり素晴らしく堅いね……。君の素材で武器を作るのが楽しみだ！」

レイスは両手にボウガンを構えた。

照準は——先程暗夜槍の一撃で僅かに開いた重殻の穴。

——立て続けに響く発射音。ボウガンは一気に十数発の麻痺弾を吐き出した。

その全てが寸分変わらず重殻の穴に撃ち込まれる。

——僅かな間。

痺れた膝が折れ、霸竜は前のめりにバランスを崩した。

レイスは飛び退いて離脱しながら、自分と入れ換わるように霸竜に向かっていくクロウを見た。

「お膳立てはこんなものでいいかな？」

「上等！」

クロウは前のめりになった覇竜の後ろ足へ向かっていく。

覇竜の凶悪な瞳がクロウを捉え、咆哮を上げる。

——瞬間、クロウの進路上の地面が溶け、勢いよく溶岩が吹き出した。

だがクロウは速度を緩めず、次々と吹き出してくる溶岩を縫うように避けながら進む。

溶岩の飛沫がかかり、肌を焦がす痛みは歯を食い縛り耐えた。

「こんなもん……デイスに比べりゃ……」

クロウは吹き出してくる溶岩を抜けた。

すぐそこには覇竜の足。

渾身の力で大剣を振るい、思い切り薙ぎ払った。

——二本の足を崩され、覇竜の巨体が遂にバランスを崩した。

横倒しになり、立ち上がろうともがく。

後方で控えていたラルドは太刀の切っ先を覇竜に向けた。

「終わらせる……」

ラルドは勢いよく駆け出した。

だが覇竜はラルドに気付くと倒れた状態のまま大きく息を吸い込み始めた。

それを見たレイスは思わず息を飲む。

「ブレス……」

反射的にラルドの位置を確認する。

レイスの頭の中で、ラルドの走る速度、覇竜との距離、そして覇竜がブレスを放つまでにかかる時間が一瞬で計算された。

「——っ！？ ラルド君回避だ！ 間に合わない……」

レイスの声が届くより僅かに早く、覇竜のブレスが放たれた。

+

巨大なブレスが大地をえぐりながらラルドに迫る。

（デビスの命を奪った一撃……）

迫り来るブレスにラルドは龍刀の刃を向ける。

——使イ方ハ身体ト心ガ知ッテイル

頭の中で声が聞こえた気がした。

ラルドは龍刀に纏わせる気刃の形をイメージする。

もっと強く。鋭い。全てを壊すような最強の形。

龍刀を覆っていた気刃の色が深紅に変わった。

紅い雷のようなものが刃を走り、龍刀の龍属性の黒い雷と絡み合う。

「二の章……」

ラルドは龍刀を振り上げた。迫り来るブレスを睨む。

「紅の雷……!!」

ラルドはブレスに向けて龍刀を降り下ろした。

——瞬間。ブレスが真つ二つに裂けた。

紅い気刃が大きく広がり、ブレスに食らい付くように切り裂く。

常軌を逸したような“異能”

——やがてブレスが途切れる。

無惨にえぐられた大地。だがラルドの後方の地面だけは全くの無傷だった。

ラルドは太刀を下段に構え、再び走り出す。

「これで……終わらせる!!」

龍刀を覆っていた気刃が刃の切っ先に集中した。

接近。肉薄。ラルドは覇竜の額。重殻の亀裂目掛け龍刀を突き刺した。

激しい閃光をあげながら太刀の刃がゆっくりと重殻に沈んでいく。

霸竜は倒れながらもラルドを降り払おうと前足を振り上げる。

ラルドはごく一瞬、少し悲しそうな眼をした。

「……お別れだ……これで本当に……」

ラルドは太刀を引き抜き、まったく同じ場所に勢いをつけて突き刺した。

龍刀の根元近くまで刃が刺さる。

次の瞬間、龍刀の黒い雷が一気に霸竜の中へ流れ込んだ。

霸竜は絶叫する。全身が激しく痙攣した。

ラルドが龍刀をひねり、一気に引き抜くと霸竜の身体が一瞬と跳ね上がり、そして力無く大地に伏せた。

「……………」

ラルドは数歩下がり、龍刀に付いた血を払う。

ここまでの戦いが嘘のように辺りは静寂に包まれていた。

ラルドは静かに空を見上げる。

風向きが変わり、噴煙が払われた空には満天の星が輝いていた。

+

二週間後。ノーティスの街の共同墓地。

「——と……まあ、霸竜に関してはこんな感じかな？」

ラルドが話しかけていたのはデイビスの名が刻まれた墓だった。墓前にはデイビスが使っていたアイアンガンランスが安置されている。

「えっと……近況報告とかはこんなところかな？」

ラルドはそつと墓石に手を伸ばした。  
墓石に刻まれた文字を指で撫でる。

「……本当にいろいろあったけど……君と友達になれて良かった……」

ラルドはゆっくりと立ち上がった。

「……そろそろ行くよ……また来るね」

ラルドは荷物をまとめ、静かにその場を後にする。

雲一つ無い青空に手を伸ばし、拳を握った。

「僕は強くなる。大切なもの、全部護れるように」

## 第一部 エピローグ

+

——ドンドルマ某所

執務室のような部屋で、二人の人物が机を挟んだソファーに座り向かい合っていた。

一人は老人。だが老人とは思えないほど体格は良く、身体からは生気が溢れている。

顔を隠すように目深に被ったフードの奥からは、深いシワが刻まれた肌と鋭い眼光が覗いていた。

それと向かい合って座っているのは少年。

絹糸のような髪に純白の服。瞳は血のように紅い。

一見しただけではまだ幼いと言ってもいい年齢に見えるが、漂わせる雰囲気はまるで長い年月を生き、この世のあらゆる物を見てきた老人のようなものだった。

少年はソファーに深く腰掛け、どこか妖しい笑みを浮かべ老人を見る。

「それでどうする？ 僕の言うことに従うか否か」

「……『ラルド・ヴァンクールに手を出すな』か……」

「別に彼らから手を出してきた場合は応戦して構わない。それに従ってくれるなら竜操術に関する情報をあげてもいい」

少年の言葉に、老人は探るような視線を送った。

「あの少年が例の力を持っているとはいえ、なぜお主らがそこまでするのじゃ？ あの少年に何かあるのか？」

「それは君が知ることじゃない。……返事を聞かせてもらおうか」

少年が言つと老人は僅かに視線を鋭くした。

「……ワシらはお主らと事を構えるつもりはない」

「賢明な判断だ。僕は君のそういう所も評価している」

少年は老人の言葉に満足気な表情を浮かべるとゆっくりとした動作で立ち上がった。

「くれぐれも言っておくけど、僕はこれでも君のことは気に入ってるんだ。妙な気を起こして僕を失望させないでくれることを祈るよ」

少年はそう言つと老人に背を向け、部屋から出ていった。

老人はその姿を忌々しげに見送ると小さくため息をつく。

「……月影」

「はいよ」

老人が呟くと、いつの間にかその背後に一人の男が立っていた。

月影と呼ばれた男は、金獅子と呼ばれる牙獣の素材から作られた防具を身に纏い、気だるそうに紙煙草をくわえている。

「ラルドって子の身辺調査ですかい？」

「うむ、過去、交友、私生活等、徹底的にじや。それと今回の話をメンバーに伝えておくこと。特にイシュティスにはよく言い聞かせるようにの」

「うへえ、イシュティスの坊っちゃんも駄々こねそうですねえ」

月影は乾いた笑い声を上げた。

老人は僅かに眼を細める。

「じゃが、今は彼の者らと事を構える訳にはいかん。頼むぞ」

「……“今は”ね」

月影はにやりと笑みを浮かべ、部屋を出ていった。

人々の知らぬ所で、闇は動く。

ゆっくりと、ゆっくりと。

その闇が世界に影を落とすのも

そう 遠くはない。

## 第一部のあとがきのもの

ゼロ（以下セ）「ここまで読んでくれた皆さま、こんにちは、こんにちは。作者のゼロです」

ラルド（以下ラ）「どうも、ゲストで呼ばれてきた主人公のラルドです」

セ「いやはや、ようやくここまで来ましたよ。読んでくださった皆さまには感謝感謝ですm（――）m」

ラ「特に、何度も指摘やアドバイスをくれたkameさんには心からお礼を言いますね」

セ「さてさて、無事第一部を完結させることができましたが、ラルド君。感想は？」

ラ「……僕、ひどい目に合った記憶しか無いんですけど……」

セ「ん？」

ラ「男の娘にされたり竜撃砲で吹っ飛ばされたり、レイスさんに変な薬飲まされたり覇竜に襲われたり……」

セ「まあまあ、モニカちゃんとお風呂入ったり、白い女の子とキスできたじゃん」

ラ「あ！ あれは……！！／／／／」

セ「反論は許さん。あれだけでお前の不幸なんて帳消しだ」

ラ「……なんかだんだん口調変わってきてる……」

セ「さてさて、次からは第二部となります。舞台は第一部の二年後、成長したラルド君達の活躍をお楽しみに！」

ラ「第二部からはずいぶん女性キャラが増えるみたいですね」

セ「そう！ まだ登場してなかったメインヒロインや、僕の一番のお気に入りキャラが出るから早く書きたくて書きたくて仕方ない」

ラ「あはは、テンション上がってますね。そんなにその子達書くの楽しみなんですな」

セ「そりゃもう！ ラルド君空気にしてその子達メインの話とか考えてるぐらい」

ラ「え？ 今なんて……」

セ「おっともうこんな時間だ。それでは皆さま、二部で会いましょう！」

ラ「あ……あの、さっき何を……」

セ「それでは！  
……また会おう！（スネーク風に）」

## 第一部のあとがきのもの（後書き）

感想をくださった

kameさん

えいちさん

赤の川さん

お気に入り登録してくれた皆さま

ポイントを入れてくれた皆さまに心からのありがとうを

by  
ゼロ

## 第二部 No. - - とある神話

キョダイリユウノゼツメイニヨリ、デンセツハヨミガエル

——これは古くから伝わる神話の一部

世界が闇に覆われし時

伝説はよみがえらん

数多の肉を裂き 骨を砕き 血を啜った時  
彼の者等はあらわれん

黒き 死をもたらす者

紅き 破壊をもたらす者

白き 再誕を統べる者

命奪う黒き風

万物を砕く紅き雷

全て包む白き闇

その者の名は 黒き死神

その者の名は 紅き鬼神

その者の名は 白き 始祖

喉あらば叫べ

耳あらば聞け

心あらば祈れ

運命の三神

天と地とを覆い尽くす彼の者の名を

天と地とを覆い尽くす彼の者の名を

彼の者の名を

それは伝説。かつて栄えた文明の終焉を唄った神話。

されど神話は時として隠された真実を映す。

神ヲ狩ル者 第二部

人と竜と神と

## 第二部 プロローグ

——霸竜事変。

突如、火山地帯に出現した霸竜 アカムトルムが起こした一連の騒動は後にこう呼ばれた。

その霸竜が三人の英雄達によって討伐され、二年。

ハンター達を取り巻く環境は僅かに変化していた。

それはモンスターによる被害の拡大。

かつてはモンスターの出現はほぼ辺境地に限定され、都市部周辺に出現することなどはごくごく稀であった。

だがこの二年。明らかにそれは増えていた。

毎月のようにどこかの都市がモンスターの襲撃を受けたという報告がなされ、同時に各地でのモンスターの異常発生、突然変異体の出現。それに伴う生態環境の変化。

それらの被害の拡大に比例してハンターの需要も上がって行つた。

待遇は大幅に改善がなされ、各地でハンターの数も増え、合わせてハンターズギルドの勢力も拡大していく。

いつの間にか、人々の驚異となるモンスターと、それに対抗するハンターズギルドが社会の中心となりつつあった。

——ドンドルマ　ハンターズギルド本部　ギルドマスター執務室

「——以上のようなモンスターの凶暴化に対応し、クエストレベルの新たな区分としてG4、G5の導入を検討中です。また、これまでハンターの数不足気味だったノーティスには近隣からハンターを招き、街の防備を整えています。それに伴い、新たに三人のハンターにG級昇格クエストを受けさせることになっています」

そこまで読み上げてレイスはファイルから顔を上げた。

「……報告は以上です。レイザー様」

「ふむ」

革張りの椅子に身を沈ませながら、レイザーと呼ばれた老人は手元の書類に目を通した。

老人とは思えぬ鋭い眼光が書類の文字をなぞっていく。

「……確か今回、昇級クエストを受ける内の一人はお前の友人じゃったか」

「はい、例の太刀も彼に使ってもらおうと思います」

それを聞いてレイザーは微笑を浮かべた。

「あの太刀を……か、ずいぶんとそやつを買っておるようじゃのう」  
「というよりあれは彼にしか使いこなせないでしょうからね。では、僕はそろそろ行かなければならないので……」

そう言うとレイスは深く頭を下げ、足早に部屋を出ていった。

「……相変わらずせっかちなやつじゃ。……さて」

レイザーは一枚の書類を手にとった。

「……あの子も……か」

+

夜、星が空に瞬き始めた頃。ノーティスの街門の前に一台の竜車が止まった。

「おーい！ お姉さん、着きましたよ！ ここがノーティスです」

竜車の御者が天幕付きの荷台に向かって声をかける。

すると荷台の中から一人の女性が降りてきた。

風に長い黒髪をなびかせ、着物と呼ばれる東方の島国特有の服を着ており一目で異国の育ちとわかる。

「ここがノーティスか……世話になったの。礼を言う」

「いえいえ、私も異国の話が聞けて楽しかったですよ」

二人がそうやって話していると少し遅れて竜車から一匹の猫型の獣人、アイルーが重そうに太刀を担いで降りてきた。

「ニャー、ご主人！おいらを忘れるニャー！」

そのアイルーはふらふらと竜車から降りると女性に太刀を手渡した。

女性は受け取った太刀を腰に巻いた帯に差すと御者に軽く一礼する。

「おぬしには本当に世話になった。縁が有ればまた会おう」

「ええ。それでは私はここで。ノーティスの街は広いので迷わないようにお気を付けて」

「うむ」

女性はもう一度頭を下げると、アイルーと並んで門の方へと歩きだした。

## No.1 大雪注意

+

——さらに同時刻。

山頂付近の岩影で一人の少女がうずくまっていた。

「うゝ……あうゝ……さ……寒いよ……あたし寒い駄目なんだ  
って……」

ベージュ色の髪には雪が張り付き、明るい橙色の光を宿した眼には涙が滲んでいた。

傍らに置かれているヘビイボウガンからハンターであることがうかがえる。

「うゝ……ししよゝ、早く来て……」

まるで猫のように、小さな身体をさらに小さくして辺りを見回す。

辺りは吹雪。風はさらに強まりほとんど視界も効かない。

「か……帰ったらモ二モ二の作ったあったかいシチューが食べたい  
……」

——その時、少女の耳に雪を踏む音が聞こえた。

「ししょー？」

少女はすぐさま顔を上げると四つん這いになりながら移動し、ひよいと岩影から顔を出した。

——すぐ目の前にドドブランゴの顔が有った。

まさに眼と鼻の先、ドドブランゴの髭が触れる距離。

少女の顔から血の気が引く。

「あ……あら、こんばんは……」

にへら、と笑ってみる。

しかし当然ながらドドブランゴは笑顔は返してくれない。

「え……えゝと、お願いだからちょっと待ってね。せめてボウガン取るまで」

ハンターとして致命的なミス。少女は丸腰のまま自分の武器から離れてしまったのだ。

ドドブランゴを刺激しないよう、四つん這いのまま後ろに下がる。

——その時ドドブランゴが咆哮を上げた。

「ひにゃあっ?!」

少女は驚いてドドブランゴに背を向け逃げようとした。

だがこれも致命的なミス。肉食のモンスターは大抵、背中を見せて逃げる相手には本能的に襲い掛かる。

少女はドドブランゴの大きな手に足を掴まれ、顔面から雪に突っ込んだ。

「あう……」

顔が雪まみれになり、泣きそうになるがドドブランゴの手をほどこうと必死にもがく。

だが少女のか細い身体でモンスターを振り払えるはずもなく、逆に暴れていた身体を大きな手で抑え込まれた。

ドドブランゴは少女に覆い被さるように顔を近付ける。

ドドブランゴがべろりと舌舐めずりするのを見ていよいよ少女の顔が強張った。

「あ……あは……あはは……あ、あたしは食べてもおいしくないよ……」

……… た……… 助けて……… 助けてシショ……ッ!」

ドドブランゴが牙を剥いて少女の喉笛に食らい付こうとした——瞬間だった。

ドドブランゴの後ろ足から突然 血飛沫が上がった。

突然の痛みにドドブランゴは前に転がる。派手に雪煙が上がった。

その間に少女はドドブランゴに一撃を加えたハンターに助け起こされていた。

「大丈夫リアナ？ 怪我は無い？」

落ち着いた温かい声。

リアナと呼ばれた少女が見上げると、そこには見慣れた顔が有った。

防寒フードから覗くぱっちりとした眼に黒曜石のような瞳。

いくら手入れしても真似できない黒い艶やかな髪。

どこことなく幼さが残る均整の取れた顔立ちは、年下であるリアナにさえ“かわいい”と思わせてしまうものが有った。

「し……ししょ」

リアナは、そのハンターの腕に抱かれたまま小さく呟いた。

安心して全身から力が抜けていく気がする。

だがすぐにはっとして慌てて眼に溜まっていた涙を拭った。

「あ、あつたり前じゃないですか！　あたしはそんな簡単に怪我なんてしないって！」

「……帰ったらいろいろお説教するからね」

「あう……」

そのハンターはリアナを離すと、手に持った太刀をドドブランゴに向けた。

——鬼神斬波刀。

鉄刀系の、強力な雷属性の太刀でその刀身には常に紫雷が這いつている。

切れ味も申し分なく、その刃は冷たい輝きを放っていた。

ドドブランゴはその太刀を向けられ、明らかに気圧されていた。

先程斬られた痛みが脳裏に焼き付いているのだろつ。向かって来ようとしなない。

それを察知したハンターは殺気を増し、それをドドブランゴに向ける。するとドドブランゴはゆっくりと後退し、一目散に逃げ去った。

「ふう……」

ドドブランゴが逃げ去ったのを確認し、ハンターはホッと息を吐

いた。

リアナは元気よくハンターに駆け寄るとグッと親指を立てる。

「さっすがししょ！ 希代の“天才美少女ハンター”」

「……ねえリアナ」

ハンターはうんざりしたように言々と防寒フードを外した。

「もう二年も前の話ネタにするの、いい加減やめようよ」

黒曜石のような色のぱっちりした瞳に、別に手入れした訳でもないのに艶やかな髪。

どこことなく幼さの残る中性的……というよりやや少女寄りの顔立ちに、男性としてはかなり華奢な体型。

ラルド＝ヴァンクールは苦々しく笑った。

No.2 青年(?)

——北の街 ノーティス

すでに日はとっぷり暮れていた。

ラルドとリアナの二人は並んで大通りを歩いていく。

「——今回はどうにかなったけど下手すれば死んだんだよ？ わかつてる？ 武器から離れたり至近距離の相手に迂闊に背中を見せるのも論外、そもそも一人で突っ走るからはぐれたり……」

「あゝ……うゝ……ししゅ、もう勘弁してゝ」

「だめ」

リアナは雪山を降りてから延々とラルドのお説教攻めに合っていた。

ぐったりとうなだれるリアナ。

だが今回のようなことがしょっちゅう起きては命がいくつつ有っても足りないのも確か。

ゆえにラルドはしつこい程にハンターの基本について繰り返していた。

「……けど、リアナに怪我が無くて本当に良かった」

「ししょー……」

「次からはもっと気を付けないと駄目だよ？　ただでさえ最近は凶暴なモンスターが多いんだから」

そう言っただけでリアナの頭を撫でた。リアナは照れくさそうに少し頬を赤らめながらも気持ち良さそうに眼を細める。

——そして二人はハンターズギルドの集会所の前に着いた。

二年前から少し大きく改築されており、窓からは暖かい光が漏れている。

「寒い、早く入る入る」

「……………うん」

——ラルドは少し集会所に入るのをためらった。

「ししょー？」

リアナはそれに気付いて一瞬不思議そうな顔をするが、すぐに理由に思い当たってにやりと笑う。

「早く入りましょ」 “天才美少女ハンター”さん」

「……お説教追加する？」

「すみません。ごめんなさい。許してください」

ラルドは少し憂鬱そうに扉を開けた。

——集会所の酒場には大勢のハンターが溢れていた。

飯をかきこむ者やぼろぼろの格好でクエスト報告する者、腕相撲勝負をする二人やそのギャラリ、食べ物を運ぶウェイトレスなど様々だ。

二年前から変わらない雰囲気。違うと言えば異国から来たハンターが増え、全体の人数が多くなっていることが。

——何人かの視線が新しく入ってきたラルドとリアナに向けられる。

この視線には三つの意味がある。

一つはリアナに対する、この酒場の雰囲気にまだなんとなく馴染めていない新米ハンターへの好奇の視線。

一つはラルドに対する顔馴染みの視線。

そしてもう一つは……

「あれが覇竜を倒したっていう……」

集会所の一角。異国の出らしきハンター達がひそひそ話をしているのが聞こえた。

「噂では聞いてたけど本当に“美少女”だな……」

「だよなだよな。俺、一目生で見たくてノーティスまで来たもん」

「女のわたしから見てもかわいいわね……あのすべすべの肌、どうやってお手入れしてるのかしら？」

「お、なんかこつち見てないか？ お前こつちに誘ってみるよ」

「む、無理だつて！ 絶対無理！」

——これは別にそのハンターの眼が悪いとか幻覚を見ている等ではなく、世間一般的にラルドに対する普通の反応なのだ。残念ながら。

二年前、覇竜を倒したことで、ラルドの名は一躍有名になった。

そしてハンターに関する有名雑誌『月刊 狩りに生きる』にて、有名なハンターとして特集を組まれたのだ。

ただし、見出しは“天才美少女ハンター 現る！”

——ラルドは慌てて出版社に間違いを指摘したのだが時すでに遅

く、ラルドは世間一般的に“美少女ハンター”として知れ渡ってしまっただ。

（ちなみに雑誌の編集者達は、男っぽい名前だとは思ったものの“美少女”というのには誰も疑問を持たなかったらしい）

ちなみにリアナとの出会いは、リアナがハンター登録した日に、ラルドに『弟子にして欲しい』と頼み込んで来たのだが、ラルドに弟子入りしようと思った最初の理由が『男に弟子入りするといろいろ不安だったし、なにかと相談しやすい女の人に頼みたかった』である。

ラルドは完全に諦めたように、思い切りため息をついてクエスト受付の方に行く。

何度見ても飽きないというように、受付嬢が必死に笑いを堪えていた。

「……………雪山の調査クエスト終了です」

「こち……………ぶっ……………こちらが……………報酬金です」

ラルドは革袋に入ったお金を受け取る。

それをリアナは後ろから覗き込んでいた。

「お、報酬もさすが上位ハンター、ねね、ししよー、なんかおごってよー」

「ごめんねリアナ。今日は早く帰って明日に備えたいんだ」

「明日？ …… ああそっか」

リアナはぽんと手を叩く。

「明日はG級昇格クエストか。それじゃ早く帰って休まないんだね」

リアナはそう言ってグツと親指を立てた。

「それじゃ、G級に昇格した時にはお祝いとして今日の分までおごってね」

ラルドは思わず苦笑いを浮かべた。

No.3 異国から来た剣士1

——夢を見ている。

まったく知らない場所

けど、雰囲気でどこかの塔の上ということがわかる。

僕は誰かと戦っていた。

相手の姿はぼやけていてよくわからない。

その相手をよく知っている気もするし、まったく知らない気もする。

相手が双剣を振るい、僕の太刀とぶつかり合って火花を散らす。

その戦いは速く、激しく、なのにどこか悲しく、静かな戦いだっ  
た。

誰だったか……この相手は……

「しっしょ〜!!!!」

「わああ?!」

ラルドは自分のベッドから飛び起きた。

ベッドの隣にはリアナが立っていた。腕を組み、不機嫌そうに頬を膨らませている。

ラルドは眼をこすりながらリアナを見上げた。

「あ……リアナ……おはよう……」

「おはよう……じゃないの！ 今日がなんの日か覚えてる!?!」

「え〜と……」

ラルドは寝ぼけながらぼんやり考えた。

「…… G 級昇格クエストの日?」

こくんとリアナが頷く。

「じゃ、集会所への集合時間は?」

「たしか……朝 8 時だっけ……」

「じゃ、今何時?」

「何時って……」

ラルドは壁にかかっている時計を見上げた。

その時計の短針はちょうど文字盤の10の数字を指していた。

「……………へ？」

「クロ兄、カンカンになってたよ？　　というかあたしまでとばっちりで怒られたんだかね！　　とにかくげんこつ一発で済むうちに行った方がいいよ」

言われるまでも無いとばかりにラルドは準備に走っていた。

「ししょー、めったに遅刻なんてしないのになんで今日寝坊するかな？」

リアナはため息をつく。

「……………あたしは先に集会所へ行ってるから、急いでね？」

そう言ってリアナはラルドの家を出て行った。

一方、ラルドはキッチンに置いてあったヘブンブレッドを口に放り込み、口を動かしながら素早く着替えていく。

最後にベッドの横に置いてあった鬼神斬波刀を手に取り、家を出た。

家から集会所までの、すでに数百回は通ってきた通い慣れた道を走っていく。

しかし今回はその道に見慣れぬものがあつた。

「……なんだろ？ あの人だから」

大通りに何やら人だかりができていたのだ。中からは怒鳴り声も聞こえる。

ラルドは少し足を止め、人だかりの中心を覗いた。

その中心ではゲリヨスSシリーズと呼ばれる防具を装備しし背中にハンマーを背負った、いかにも柄の悪そうな大男がいた。

相手を威嚇するような大きな身振りで何かを怒鳴っている。

その大男と相對するのは、着物と呼ばれる東方の珍しい赤い服の女性だった。

遠目からでもわかる流れるような長い黒髪に凜とした佇まい。

怒鳴り散らす男に怯む様子もなく男を睨んでいる。

隣には武者姿のアイルーもあり、女性と同じように男に相對している。

そしてその後ろでぶるぶると震えうずくまる少年。

辺りには少年が持っていたらしきリングや割れた卵などが散らばっていた。

「だから何度も言っただろうが！！ そのクソガキが俺様にぶつかってきて俺様の自慢の鎧を汚したんだぞ！？」

男が凄いい剣幕で怒鳴る。その鎧には割れた卵がついていた。

「その程度でそこまで怒ることもなかるう？ 小物に見えるぞ？」

「それにおいらは見てたニヤ！

二人がぶつかった時よそ見してたのはあんたニヤ！」

着物の女性とアイルーも一歩も引かず言い返す。

「てめえ……女だと思って優しくしてりゃあ付け上がりやがって！俺様を誰だと思ってんだ！？ 東のサイロンの上位ハンター、デガ口様だぞ！！」

「……………すまぬが聞いたことがないな。一応有力なハンターはだいたい覚えておるはずなのだが」

「ご主人、気にすることないニヤ。鎧を汚されたぐらいでこんニヤに怒るんだからたいしたハンターじゃないニヤ」

すると女性は大きく頷いた。

「うむ。そもそもハンターは人々を護るべき存在のはず……。それがこんな子供に怒鳴り散らすなど……言語道断だの」

大男は顔を真っ赤に染め、怒りにプルプルと震え初めた。

「てめえら……！　俺をなめやがって！！」

大男は背中の鋼鉄のハンマー“鬼鉄”に手をかけた。周りの野次馬から悲鳴が上がる。

男が武器を手にしたのに反応し女性も腰に差した太刀の柄に手を置いた。

「やめておいた方が身のためじゃぞ……？　街中で武器を振るうのはご法度であるう？」

「知るか！！　俺様をこけにしたこと……後悔させてやる！！」

大男は鬼鉄を振り上げた。

## No.4 異国から来た剣士2（前書き）

† 作者からのお願い

番外編を書きたいなと思ってます。

一応何パターンかは考えているのですがどれを書こうか悩み中

なので近々、僕のユーザーページの活動報告内でどの話を読みたいかアンケートを取りたいと思います。

協力していただける方はよろしければお気に入りユーザー登録していただけるとありがたいです。今後できればアンケートやお知らせに使いたいです……

それでは、改めまして本編 どうぞノシ

## No.4 異国から来た剣士2

「くらえええ!!」

大男がおもいつきり振りかぶってハンマーを降り下ろす。

「馬鹿者が……!」

女性が舌打ちし、太刀の柄を握ったその瞬間、二人の間に一つの影が割って入った。

鋼鉄がぶつかりあう音が響き渡る。

「?!」

「ねえ……もうその辺にしときましようよ?」

それはラルドだった。

背中から鞘ごと引き抜いた太刀でがちりと大男のハンマーを受け止めている。

「なんだこてめえ! 邪魔すると女でも容赦しねえぞ!」

大男はラルドを押し潰さんとハンマーを握る手に力を込める。

瞬間、ラルドは身を引いた。力の均衡が崩れた大男が前によるめ

く。

「うおっととっ……」

「いろいろ言いたいけど……」

ラルドは身体を回転させ、大男の顔面に鞘による一撃を叩きこんだ。メキリと顔面に鞘がめり込み、大男は声も出せずに後ろに倒れこんだ。

「僕は男だからね」

ラルドは白眼を向いて倒れている男に向けて言った。

男の鼻はグニヤリと曲がり、ブクブクと泡を吹いている。

「……さすがにやり過ぎたかな？」

「そのような男にはそれくらいでちょうどよかるっ」

ラルドが気まずそうにポリポリと頭を搔いていると先程の女性が声をかけてきた。

ラルドがそちらを振り返ると女性は深々と、丁寧に頭を下げる。

「おかげで助かった。礼を言おう。……して、おぬし怪我は？」

「ああ、僕は大丈夫です。そっちは？」

「うむ、私も大丈夫だ。かたじけない」

そう言って女性はもう一度頭を下げると、クルリと振り返り後ろでへたりこむ少年の方に駆け寄って行った。

そして泣きじゃくる少年の前に屈み込み、先程とは別人のような優しい表情で少年の頭を撫でた。

「坊、怪我はないか？ 男があまり泣くものではないぞ？」

「うう……ヒック……ヒック……だつてえ……」

さらに泣き出しそうになる少年を女性は優しく両腕に包みこんだ。

「ああ、すまぬ……そうなの。あんな目に遭っては怖いのも無理はない……お姉ちゃんが悪かった……」

ふわふわと頭を撫でて、ゆっくりと少年を離すとニッコリと笑いかけた。

「さ、お姉ちゃんと一緒に落とした物を拾おうか？」

「……ヒック……うん……ヒック……」

「うむ、いい子だの。ハンゾー、おぬしも手伝え」

「了解ニャー！」

女性は連れていたアイルーに呼び掛ける。するとハンゾーと呼ばれたアイルーは元気良く返事をして二人と一匹はあたりに散らばったリンゴや野菜などを拾い始めた。

「……僕も手伝います」

ラルドもそこに混ざって一緒に拾い始める。

「む？ すまぬな。しかしよいのか？」

「まあ……急いでたけど放って置けないし。……すでに手遅れです」

ラルドは拾ったリングを少年に渡しながら苦笑いを浮かべて言った。

薄情なもので周りで見っていた野次馬達は騒ぎが治まるとばらばらとその場を離れていく。

それでも三人と一匹は辺りに散らばった物を集め続けた。

「ニヤ、これで全部かニヤ？」

アイルーのハンゾーが辺りを見回す。

「うむ、そのようだの」

そう言って女性は拾い集めた物を少年に手渡した。

「もう誰かにぶつからぬようにの」

「うん、ありがとう、お姉達。

えっと……僕、お使いの途中だからもう行くね」

少年は少し笑顔になってそう言うのと駆け出して行った。

「気をつけてね〜!」

ラルドは少年の後ろ姿に手を振る。その姿を女性は微笑みながら見ていた。

「ん？ 僕の顔になんか付いてます？」

女性の視線に気付き問いかける。

「ふふふ、いやなに、昨今のハンターにしては随分とお人好しだと思ってる」

「……それってほめてませんね」

「いや、久しぶりに気持ちのいい人間と出会えた。それに……」

女性はじっとラルドの眼を見た。

「良い眼をしておる……。先程の動きからしてもなかなかの腕前のようなのだ?」

「あゝ……そりやどうも、えっと……」

「む、そういえば自己紹介がまだだったの」

女性は一步下がってから少し姿勢を整え、自分の胸に手を当てて話し始めた。

「私の名は“風牙 楓”東の島国、大和の出身じゃ。見ての通りハインターで、今日はG級昇格クエストを受けにこの街まで来た」

## No.5 異国から来た剣士3

「あ、やっぱり大和の出身ですか」

ラルドはその赤く染められた着物と流れるような黒髪を見た時点でそうだろうと予想していた。

「それじゃ、僕も自己紹介を……僕の名前はラルド・ヴァンクール――」

「ラルド……？ おぬしが？」

ラルドが名乗ったとたんに楓はグイと顔を近づけ、再びラルドの眼を覗き込んだ。

今度は鼻先が触れそうな程の至近距離。ラルドは思わず仰け反った。

「わっ！？ ななな、なんですか!？」

「ふむ……」

「ちょ、な、なに……」

ラルドはすぐ近くから眼を覗き込まれて顔を赤くし、しどろもどろになる。

それに気付いた楓はクスリと笑って顔を離した。

「え……えと？」

「ふふ、すまぬ。少し確認をの」

それを聞いてラルドはキョトンとした顔をした。

「確認？」

「うむ、眼を見ればその人間がどういう人間かは分かる——というのが私の持論での。おぬしは二年前、覇龍を倒したラルド〃ヴァンクール、その人じゃの？」

「あ……ああ、そうですけど」

「ふむ、しかし噂というのは案外信用できぬもののようなのだ」

「噂ですか？」

思わずラルドは聞き返した。

「私の聞いたラルドというのは、残酷で鬼のように太刀を振るうハンターだという話であったが……」

そう言つてラルドの顔を見てクスクス笑う。

「眼を覗き込まれたぐらいでああなるとは……随分とおばこい鬼よのう」

「おぼこい？」

「いや、なんでもない。ところでおぬしもこれから集会所に向かうのであるう？ よければ一緒に行かぬか？」

「あ、はい、いいですけど……。じゃ、じゃあ行きましようか楓さん」

「ああ、呼び捨てで構わぬよ。それに敬語も要らぬ。……では行くぞハンゾー」

「了解ニャー！」

そうして二人と一匹は歩き出した。

ラルドは横目で、並んで歩く楓を見る。凜とした佇まいに真面目そうな表情。

だからこそラルドはさつきから気になっていたことを尋ねることにした。

「ねえ楓さ……いや、楓。ちょっと聞いていいかな？」

「む？ なんじゃ？」

「いや、僕も人のことは言えないけどさ、集会所の集合時間って八時の筈でしょ？それが何でこんなところをつろついているの？」

すると楓は少し頬を赤くし、眼をそらした。

「あゝそれはだの……」

「迷子になったニヤ」

いきなりハンゾーが楓の肩に飛び乗ってそう答えた。

「迷子…… ってそんな迷子になるような場所でもないと思うけど……  
どれくらいの間迷ってたの？」

「かれこれ丸一日ぐらいさ迷い続けてたニヤ」

「ま、丸一日！？ いくらなんでも長すぎない！？」

「……………」

楓は顔をさらに赤くし、下を向いてしまった。

それにはお構い無しにハンゾーは饒舌に話し続ける。

「そうなのニヤ。ご主人は超が付くぐらいの方向音痴なのニヤ」

「……ハンゾー、もうその辺に……」

楓がぼそりと呟いたがハンゾーにはどうやら聞こえていない。

「そのくせ、人に頼ったり弱味を見せるのが苦手で道を尋ねたりもしないから始末に終えないニヤ。この街に来る前なんか……」  
「……ハンゾー？」

楓は射抜くような冷たい視線をハンゾーに浴びせた。

ハンゾーはビクリと毛を逆立たせる。

「ご……ご主人？ お、怒ってるニヤ？」

「別に怒ってはおらぬよ。おぬしの言うことは本当のことじゃしの  
そう言いながら楓は不自然な程にっこりと笑う。

「じゃが、人が嫌がることを話すのは感心せぬのう」

冷たい声に異様な迫力。ハンゾーは素早く地面に降りてペコペコ  
と頭を下げた。

「ご、ごめんなさいニヤ！ お、お仕置きは勘弁してニヤ〜！」

ラルドはそんな様子をクスクスと笑いながら見ていた。

そうして歩いて数分、ラルドは足を止める。

「さ、ついたよ」

「ここが、ノーティスの……」

「うん……さてと、少しの間ここで待っててくれないかな？」

「何故じゃ？」

「多分……今一緒に入ったらややこしいことになるからさ」

ラルドはそう言つて深くため息をつく、覚悟を決めたように扉を開け中に入つていった。

「……なんなのじゃ？」

「ニヤ……」

そのまま数分が経つた頃

「うわああああ！」

——突然、ラルドの悲鳴が聞こえてきた。

「な?!」

「入ってみるニヤ！」

二人が勢いよく集会所に飛び込んで見たものは、腕を組んだ赤髪の青年 クロウト、その隣で苦笑いを浮かべる金髪の少女 モニカ、そして頭から煙を出し集会所の床に突つ伏したラルドだった。

「ラルド!? 何があつた!? しっかりせぬか！」

楓はラルドを抱き起こし、頬をペチペチと叩く。

ラルドは眼を回しながら弱々しくうめいた。

「うう、クロウ……手加減無さすぎ……」

「頑丈なお前にはこれぐらいじゃなきゃな。で」

クロウはじろりと楓を見た。

「あゝ、そっちの……楓か。とりあえずラルドからは子供を助けるために遅れたって聞いている。まあ、さっきのラルドへのげんこつでそういうことにしといてやる」

クロウはぶっきらぼうに言うとかしゃくしゃと頭を掻いた。

楓はムツとしたようにクロウを睨む。

「ああ、自己紹介が遅れたな。俺はクロウ、ハンターズギルドノ  
ーティス支部のギルドマスターだ」

「む……」

「一応言っとくが、げんこつ一発でお前のことも済ましてくれて  
言ったのはそいつだからな」

クロウは不機嫌そうにそう言ってラルドの方を顎でしゃくると近くの椅子にどかりと座った。

モニカがあとを引き継ぐように続ける。

「すみません。クロウさん昨日から張り切って準備してたのが肩透かしされてご機嫌斜めなんです。えっと、本当はマスターからの挨拶とかが有ったんですけど時間が押してるので省略しますね。楓さんが砂漠。ラルドさんが樹海でのクエストとなるので急いでください」

ラルドはふらふらと立ち上がってクエストの書類を受け取った。

「ナルガクルガ……」

ラルドは書類に書かれた討伐対象を見て呟く。

楓も自分の討伐対象を確認するとクエスト用紙をしまった。

「すまぬなラルド。あまりゆっくりしておると迷惑がかかるゆえ急ぐが、今度ちゃんと礼をさせてくれ」

「別に気にしなくていいよ」

「それではこちらの気がすまぬ。では、武運をな」

そうして二人は集会所を出て行った。

No.6 迅竜1

——竜車で揺られること数時間、ラルドは樹海に到着した。

竜車を降りてすぐ感じたのはむせかえるような土と緑の匂い。

辺りは見渡す限りの樹。

空は張り巡らされた樹の枝で隠され、昼であるにも関わらず薄暗い。

地面は苔の絨毯に覆われ、そこをラルドのすね程の高さまでである樹の根っこが血管のように張り巡らされている。

「ここが樹海か……」

樹海でのクエストは通常G級ハンターにのみ依頼される。

そのためラルドにとってはこれが初めての樹海だった。

ポーチから地図を取り出し、広げる。

（僕はまだ樹海の地形はよく知らないし……とりあえず要所を抑えに行くか）

そうしてラルドは樹海内を適当に歩き回り始めた。

初めて来た土地ではフィールドを確認するのもハンターの基本だ。  
歩きながら小型モンスターの分布やハチミツ等を取れそうな場所  
を手持ちの地図に書き込んでいく。

そうやってしばらく歩き続けると少し開けた場所に出た。

他の箇所と比べれば見通しはそこそこ効く。ラルドはそこでナ  
ルガクルガが来るのを待つことにした。

モンスターを誘き寄せるために持ってきた生肉をいくつか置いて  
おき、一つを肉焼きセットで焼き始める。

ジュージューと脂が滴り食欲をそそる音が鳴り出した。

「よっ……と」

好みのタイミングで肉を上げるといい具合に焼けていた。

こんがりと焼けた肉に持参した塩コショウを振りかけ、かぶりつ  
く。口の中に溢れんばかりの肉汁が広がった。

（あ、いい焼け具合……）

できばえに満足したようにラルドは口元を弛めるとさらにかぶり  
付いた。

あっという間に食べ終わり、指先についた肉汁を舐めながら火を  
消す。

——その時、首筋の毛がチリチリと逆立った。

「来たか」

ラルドの表情が一瞬で変わる。

ラルドは背中の中太刀に手をかけ、そのままの体勢で周りの気配に神経を集中させた。

「……………」

長い静寂

張り詰めた空気。

そして、その時はやってくる。

——風切り音。

頭上の木々の枝の間から一つの黒い影が飛び出し、ラルドめがけて飛んできたのだ。

だが、十分にそれを予期していたラルドは難なく飛び退いてかわした。

素早く体勢を整え、黒い影と向き直る。

そこにいたのは鋭い刃翼、滑らかな体毛、そして二つの紅の眼光を宿した竜。

「ナルガクルガ!」

両者の目が合った瞬間、ナルガクルガが刃翼を振りかざし飛びかかってきた。

連続で鳴る風切り音。

ジグザグに跳びながら左右の刃翼を交互に繰り出してくる、ラルドはそれをバックステップでかわしていった。

非常に硬く鋭い迅雷の刃翼、それが振るわれる度に周りにあった細い木々が切断されていく。

「これは……まともに食らえば一発でアウトかもね」

ラルドは静かに呟く、しかし恐れた訳ではない。

ナルガクルガが大振りに振るった刃翼を身体を沈めてかわし、そのまま一気に懷に飛び込んでいく。不意を突かれた形でナルガクルガの動きが一瞬止まった、ラルドはその隙を見逃さない。

「ハッ!」

鋭く繰り出した斬撃がナルガクルガの胴体を切り裂く、さらにそこから返す勢いで刀を振るい、胴体に十字の傷をつけた。

(まだ浅いな……)

素早くその場から離脱し、ラルドはナルガクルガと向き直った。

やはりほとんど効いてはいない、逆に相手を怒らせただけのようだ。

ナルガクルガの眼が妖しく光る。

「来い！」

ラルドの声に答えるようにナルガクルガが再び刃翼を振りかざし襲いかかってくる。

しかも先程よりも遥かに速い速度で

ある程度のスピードは予測していたラルドだったがそれ以上のスピード。

あわてて後ろに下がりながら太刀で連続で繰り出される刃翼を受け流す。

「く！　これがG級か！」

その時、後ろに下がりながら戦っていたラルドの足に木の根が引っ掛かった。

グラリとバランスを崩したところをナルガクルガの強烈な攻撃が襲う。

「うわあっ！！」

素早く太刀を両手で構えて直撃を防ぐ。

しかしそれでもかなりの衝撃を受け、後ろに吹き飛ばされた。

「痛っ……」

ごろごろと後ろに転がりながらも素早く脚を踏ん張り、立ち上がる。

しかしラルドが顔を上げるとそこにはナルガクルガはいなかった。

「消えた……？」

しかしその答えはすぐに分かることになる。シュルルルという何かが回転するような音が頭上から聞こえた。

（この音……！？）

ラルドは上を見た。

ナルガクルガが空中で反転し、棘の逆立った靱尾を降り下ろしてくる。

素早くラルドはその場から飛び退く、しかしそのタイミングで完全にかわしきることは不可能だった。尾棘が腕を切り裂き、衝撃がラルドを吹き飛ばす。

「ぐう！」

だが、ラルドは吹き飛ばされながらも素早くポーチから閃光玉を取り出した。

ナルガクルガの顔の前に閃光玉を投げつける。

次の瞬間、辺り一帯を眩い光が包んだ。

+

「いたた……、やっぱりまだクロウとモニカみたいにはいかないか……」

ラルドは大木の影に隠れて自分の手当てをしていた。

大木の反対側では閃光で眼が眩んだナルガクルガが暴れ回っている。

「……G級モンスター……やっぱり一筋縄ではいかないよね……」

ラルドはため息をつく。

「できれば使いたくはなかったけど……仕方ないか……」

ラルドは太刀の峰を額に当てた。

No.7 迅竜2

「さあ……行くよ」

ラルドは静かに眼を閉じ、精神を集中させた。

「……鬼神化……！」

——一方、ナルガクルガは視力が回復しラルドの姿を探していた。

ゆっくりと辺りを探っていたナルガクルガだが、突然何かを感じたように一本の大木の方を向き、全身の毛を逆立てて威嚇を始めた。

「……警戒しているのか……モンスターにも分かるようだな……」

ゾクリとするような殺気と共にゆっくりと大木の影からラルドが姿を現した。

——雰囲気が一変していた。

全身に纏う鬼のような殺気と冷たく、鋭い視線。街で少女と間違われていた時のような雰囲気は微塵も無い。

樹海の暗がりの中、太刀に纏わせた巨大な気刃と紅に輝く瞳が妖しく浮かんでいる。

ピタリと両者の視線が絡み合う。

ナルガクルガはラルドの、ラルドはナルガクルガの視線を正面から受け止めた。

「いくぞ……」

二人はほぼ同時に大地を蹴り、ほぼ同時にそれぞれの武器を振った。

金属がぶつかり合う音。

ナルガクルガの刃翼とラルドの太刀が激突し、激しく火花を散らす。

二人の動きが一瞬止まる。力が均衡し動けなくなったのだ。

だがナルガクルガの刃翼はもう一つある。素早くもう片方の刃翼でラルドを襲った。

ラルドはそれを大きく飛び退いてかわす、しかしナルガクルガもそれを追いかけるように攻撃を繰り返してくる。

激しい風切り音が耳に響く。

最早、並のハンターでは眼で追うことすら困難な程の速度の攻撃。

だがラルドはそれを完全に見切っていた。

立て続けに繰り出される攻撃を後ろに下がりながら紙一重でかわしていく。

だが狩りの経験という点ではナルガクルガも相当な場数を踏んでいる。刃翼の攻撃では埒があかないと見るやグツと足を踏ん張り噛み付いてきた。

「なに！？」

とつさにラルドはナルガクルガの牙を太刀でガツチリと受け止める。だが、ナルガクルガの攻撃はそれで終わりではなかった。

太刀に噛み付いたまま思い切り首を振り、ラルドを太刀ごと投げ飛ばす。

「く……」

クルンと空中で身体を回転させ地面に着地する。しかしナルガクルガは次の行動に入っていた。

靱尾を上を立て、投げ縄のように回転させる。

「……っ！」

首筋の毛が逆立つ感覚。危険を感じたラルドは後ろに向かって走り出した。

次の瞬間、ナルガクルガの靱尾から無数の尾棘が飛ばされる。ラ

ルドがつい先程までいた地面に鋭い尾棘が突き刺さる。

ナルガクルガは逃げるラルドに向けて雨あられと尾棘を飛ばしてきた。

「……厄介な攻撃だな……」

走るラルドの後を追いかけるように地面に尾棘が刺さっていく。

「……一気に決める……！」

ラルドの太刀を包む気刃が紅く変わっていく。そしていきなり身体向きを変えながら、背中の鞘に手をかけ、ナルガクルガの方に走り出した。

「はああああ!!」

背中から鞘を引き抜き、太刀と鞘の二刀流のようにして無数に飛んでくる尾棘を次々に叩き落とす。何本かの尾棘が身体をかすめたがそれに怯むことなく向かっていく。

ナルガクルガは尾棘を飛ばすのを止めた。

おそらくはこの距離なら刃翼による攻撃の方が確実に判断したのだろう。

体勢を低くし、ラルドに狙いを定める。

それに応えるようにラルドも走りながら鞘を投げ捨て、太刀を両手で握り直す。

「……二の章……紅の雷……」

太刀の纏う気刃がさらに大きく、紅く染まった。ラルドは太刀を上段に構え、ナルガクルガに迫る。

ナルガクルガもラルドの動きを見据え、ぐっと足に力を溜めた。

互いの咆哮が重なる。

両者の武器が再び激突した。

ナルガクルガの刃翼に亀裂が走り、それがみるみるうちに広がっていく。

「砕ける……」

金属が割れるような音と共に刃翼が粉々に砕け散った。そしてラルドの太刀はそのままの勢いでナルガクルガの前足を切り落とした。

ナルガクルガの絶叫が鳴り響く。

前足を失ったことによりバランスを崩し倒れこむナルガクルガ。身体を襲う激痛にもがき苦しんでいる。

ラルドはゆっくりと、のたうつナルガクルガの顔の前まで行き、見下ろす。

「終わりだ……」

ラルドは太刀を振り下ろした。



No.8 昇格

+

「ただいま……」

日もとっぷり暮れた頃、ラルドは疲れはてた様子で集会所の扉を開けた。

人もまばらになり始めた集会所

その中でクロウとモニカ、そして楓がラルドを出迎える。

「遅かったじゃねえか」

「心配したんですよ」

「で、結果はどうじゃ？」

ラルドはそう言われポーチを探るとナルガクルガの羽翼の欠片を取り出した。

「なんとかね……だいぶ手強かったけど」

「おっし！ よくやった！」

「おめでとございます。ラルドさん」

クロウとモニカはまるで自分のことのように喜んでいる。

だが肝心のラルドの方はあまり余裕が無いようで、倒れ込むように近くに有った長椅子に座った。

足を伸ばし、細く長く息を吐く。

それを楓は少し心配そうに見ていた。

「何やら相当疲れておるようじゃが……大丈夫か？」

「うん……大丈夫、副作用みたいなものだから……。それより楓はどうだったの？」

すると楓は少し不思議そうな顔をしながら新品のギルドカードを取り出した。

そのギルドカードにはHR7と記されている。

「HR7……ということは」

「ふふ、同じG級ハンター同士、改めてよろしくの」

そう言つて楓は手を差し出してきた。

「ああ、こちらこそよろしく」

握手を交わす。

その時、ふとあることが頭をよぎった。

「そつえばさ、今回昇格クエストを受けたのは僕達以外にもう一

人いるんだよね？ その人はどうなったの？ …… あとこついう時  
真つ先にちよつかい出して来そうなりアナの姿が見えないんだけど  
……」

クロウは何か苦笑いを浮かべる。

「ん？ ああ…… もう一人も合格してるぜ。

…… って言うより、朝お前らが集会所に来る前に雪山での昇格クエスト終わらせて帰っちまったぜ。リアナは街を案内してくるってそいつと行っちまった」

「僕達が来る前？」

これにはラルドも驚いた。

集会所への集合時間が八時、ラルド達が集会所に遅刻して着いた時間が10時半頃。

この間約二時間半。

そして街から雪山の狩獵場まではどれだけ急いでも往復するだけでも二時間以上はかかる。

それを考えると二時間半でクエストを終えて帰って来るといふのは驚異的な早さだ。

「……すごいハンターなんだね」

ラルドがそう言つとクロウは顔をしかめた。

モニカも思わず苦笑いを浮かべる。

「……どうかしたの？」

「いや、確かに時間的に見たらそうなんだが……」

「なんというか……その……少し変わった方だったんですね」

モニカが誰かを“変わった人”と言うのは相当珍しい。モニカは苦笑いのまま続ける。

「まずその人、集合時間は八時なのに『遅れちゃダメだから』って深夜の三時から雪の中、閉まってる集会所の前で待ってたんですよ」

「集会所の前で半分雪に埋もれながら寝てるのを見つけた時は本気で焦ったぜ……で、とりあえず集会所に入れてやったんだが少し眼を離したらいつの間にかいなくなるわ、いつの間にか近所の店で買い食いしてるわ、遂には『雪山に現れたフルフル亜種を倒せ』って言ったら『フルフルってなに？』だぜ？」

クロウはボリボリと頭を掻いた。

ラルドも苦笑いを浮かべる。

「な……なんかすごい人だね……」

「ああ……。と、そーい、やたらお前したこと聞いてきたな」

「僕のこと？」

「どーいうやつかとか、どこに住んでるか、とか。『明日お前の家

に行つてみる』とも言つてたぞ?」

「なんだろ? とりあえずわかつたよ。明日は家で待つておくよ」

「ま、それがいいだろ。……それとこつちは業務連絡だ」

クロウはそう言つて受付の机の方に行くと一枚の書類を取つた。

「しばらくは新しいG級ハンター……つまりお前と楓ともう一人の三人一組でチームとして扱う。でだ、三日後にお前らにはあるクエストを受けてもらう」

「あるクエスト?」

「ま、G級での肩慣らしみたいなもんだ」

クロウは書類に視線を落とした。

「集合は明日の正午に港町アクリムだ。詳しいことはそこで話す」

そう言つてクロウは少し怖い顔をした。

「次に遅れたらげんこつじゃすまねえぞ。楓、ラルド」

「「う……」」

「うし、んじゃあ、今日は解散だ。今のうちにゆつくり休んでおけよ」

クロウはにやりと笑つた。

「さんざん」キ使ってやるから休めるのは今だけだぞ」

## No.9 告白

——ノータイス表通り

「ふん、楓の方はモノブロスだったんだ」

「うむ、なかなか地面から出て来んでの。少し手こずった」

「音爆弾は持って行ってなかったの？」

「む……、どうも小道具に頼るのは性に合わんでのう」

集会所からの帰り道、ラルドと楓は昇格クエストでの様子を話しながら帰っていた。

「……ところで話は変わるが、この街に来たのは初めてじゃがなかなか風情が有るいい街じゃのう」

楓はぽつりと呟くように言った。

夜の煉瓦道に絶えることなく降り続く雪。辺りの民家から漏れる暖かい明かりに照らされる雪路。

確かにそれは幻想的な美しさがある。

楓は見惚れるように眼を細め、白い息を吐いた。

「ろまんちつく……というやつかの？　なるほど、こういう道を想い人と歩いてみたいという者の気持ちがわかるな……」

「……なんか意外だな」

「何がじゃ？」

「いや、そういうことを言うタイプに見えなかったからさ」

少しの間　楓はきょとんとした顔をし、そしてクスクスと笑いだした。

「失礼な。私とて、れっきとした女じゃぞ？　それらしい感情も当然持ち合わせておる」

「あはは、ごめんごめん」

楓は「まったく」とほくそ笑みながら言ったあと、少し遠い眼をした。

チラリと後ろを確認する。

「？　どうかしたの？」

「……うむ」

楓は急にピタリと立ち止まった。

「何か忘れ物？」

「い、いや……そのじゃな……」

楓はキョロキョロと辺りを見回した。

周りに他の人影が無いのを確認するとラルドの腕を掴んでグイグイと引っ張っていく。

「ちょ？ ……楓？」

「……すまぬが……少し付き合ってくれ……」

そしてラルドは人気のない路地裏まで連れてこられた。

「どうしたのさ？ こんなところに連れて来て」

「む、すまぬ……」

そう言いながら楓は念入りに辺りにだれもいないか確認し、ラルドの方に向き直った。

「その……おぬしに少し話があつての……」

そうためらいがちに言うと、楓は顔を伏せてしまった。その顔は赤く染まっている。

何かを言おうとして緊張しているのがラルドにも伝わってくる。

（——このシチュエーションって……まさか?!）

「まだ……出会ったばかりのおぬしにこんなことを言うのも……なんなのじゃが……」

ぽつりぽつりと楓は続ける。その顔はさらに赤くなっていく。

それに比例するようにラルドの心臓の音も早鐘のように早くなっていた。

「……しかしこれだけは……どうしても言っておかなければならぬ……」

「か、楓！？　ぼ、僕達まだ出会ったばかりだよ！？」

「分かっておる！　しかし真剣な話なのじゃ！　……聞いてくれぬか……？」

楓は少し潤んだ瞳でラルドを見つめながら言った。

「は、ははは……はい！」

ラルドは声を裏返しながら答え、ピシッと背筋を伸ばす。

「……話というのは……」

楓は深々と頭を下げた。

「頼む！　アクリリムに向かう時には私を連れて行ってくれ！」

「は、はい！ ……はい？」

楓は再び恥ずかしそうにうつむいた。

「おぬしは……その……知っておるじやろっ？ 私が……少々方向音痴なのを……だから……」

「ん、あゝ……うん、別にいいけど……」

ラルドの返事を聞くと、楓の表情が花が開くようにほころんだ。

「そうか！ かたじけない。やはりおぬしはいいやつじゃ」

嬉しさのあまりか楓はラルドに抱きついた。

「っ！？」

ラルドの顔が一気に真っ赤になる。

女性特有の柔らかい感触と花のような匂いに頭がくらくらするのを感じた。

楓はハッとしてラルドを離す。

「おっと、すまぬ。嫁入り前の女子が男にすることではなかったの」

「あ……い、いや、僕は大丈夫だけど……」

「む、とにかく重ね重ね礼を言う。それではアクリリムに行く時は頼むの？」

そう言つと楓はクルリと向きを変えた。

「では、私はここで……」

そう言つて楓は路地を駆けて行つた。

その後ろ姿をラルドは呆けたように見つめる。

「な……なんか……スツゴく疲れた……」

ぐったりと肩を落としながらそつと自分の胸に手を当てた。

心臓はまだ早鐘のように鼓動が早くなっている。

抱き付かれた感触もまだはつきりと残っている。それを思い出すと自然と頬が熱くなるのを感じた。

「楓……か……」

自然と顔がほころぶ。

「今度、案内も兼ねて街巡りにでも誘ってみようかな……？」

+

「……ふう」

窓から差し込む月明かりが、室内に薄明かりを投げ掛けている。

ラルドはギルドから借りているゲストハウスに帰りつくと早々にインナーに着替え、倒れ込むようにベッドに横になっていた。

大の字になりながら全身の力を抜き、身体がベッドに沈み込むのを感じる。

大きく深呼吸し、ようやく一心地ついたように天井を見上げた。

「やっぱり……これだけは慣れないな……」

疲労から、全身に鉛を入れたように身体が重く感じる。

「鬼神化も……これが無ければなあ……」

——ラルドの名が有名となるのと同時に、彼の使う能力もまた世間一般に知られるようになった。

双剣士の鬼人化にも似た、しかしより高い次元で自分の身体能力を高め、太刀に強力な気刃を纏わせるラルドの謎の能力。

発動時に紅く染まる瞳やその戦いぶりから、いつしかそれは“鬼神化”と呼ばれるようになっていた。

ラルドがG級ハンターまで上がってこれたのもこの力によるところが大きい。

——しかし、その能力にもデメリットはいくつか有った。

一つは使用後に極度の疲労状態になること。

双剣士の鬼人化でも同じような症状が有るが、程度は比べ物にならないほど重い。

最初の頃のように気を失ったりすることはほとんど無くなったものの、それでも使用直後はまともに歩くことも辛くなる有り様だ。

そしてもう一つのデメリットは――

「そつだ、一応先に確認しないと……」

ラルドは寝転がったままベッドの脇に立て掛けていた太刀を手に取り、刃を少しだけ鞘から覗かせた。

刃を見て眉をひそめる。

「……………この太刀、また研ぎ直さないと……………」

太刀の刃はぼろぼろに欠けていた。

よく見ると小さなひびや傷も無数に有る。

——鬼神化のもう一つのデメリット。

それは使用した太刀が急激に傷むことだ。

レイスの見立てによると原因は鬼神化時の強力な気刃。  
高密度かつ荒い気刃を纏わせることによって太刀に負担をかけて  
しまっているとのことだった。

——ラルドはため息をつきながら太刀を鞘に納め、ベッドの脇に  
戻した。

軽く伸びをして布団の中に潜り込む。

あっという間に睡魔が意識を塗り潰していく。

数分も経たない内にラルドは穏やかな寝息を立てていた。

そして半刻ほど過ぎた。

コンコン

明かりの落ちた部屋に、家の扉をノックする音が響いた。

だがそれでラルドが眼を覚ますはずも無かった。  
ぐっすりと泥のように眠っている。

コンコン

再びノックが響いた。

しかしやはりラルドが眼を覚ます気配は無い。

——少しして、扉からカチャカチャという不可解な音が鳴り始めた。

その音が止むと、誰かがそつと扉を開いた。

人影が家の中へと入ってくる。

暗がりでは姿はよく見えない。だが紅い瞳だけはまるで僅かに光を

放っているかのように闇の中に浮かんでいた。

その人影は家の中を見回し、ベッドに眠るラルドを見つけた。

音もなく近付き、ベッドの傍らに立つとラルドをじっと見下ろす。

闇に浮かぶ深紅の瞳がスツと細められた。

ラルドの額に手を伸ばし、軽く触れる。

「……やっぱり……たくさん使ってる……」

額に触れていた手が僅かに光を放った。 蛍火のような微かな光。

その光が消えると同時に、人影も霧のように消えてしまった。

## No.11 狩りの約束

+

窓から差し込む光にラルドは眼を覚ました。

「ん……もう朝か……」

半覚醒のまま眼を開ける。意識ははっきりしないし身体も相変わらず重たい。

ぼんやりとしながら天井を見つめる。

(……ああ、そういえば今日、リアナが来るんだっけ……)

ボーッとしたまま数日前にリアナとした約束を思い出した。

昇格クエストが終わったなら素材集めを手伝って欲しいとのことだ。

正直休みたいが約束してしまった以上仕方ない。

「着替え……ないと……」

リアナ相手とはいえさすがにインナー姿で会うのはためられる。

半分眠ったような状態で身体を起こし枕元の着替えを取る。

と、その時だった。

「しっしょー！ 起きてる〜？」

家の外からリアナの元気な声が聞こえた。

「お、鍵開いてる。入るね〜」

「え？ ちょ……！」

ラルドの返事を聞く前にリアナが家に入ってきた。

ちょうどズボンに片足を突っ込んだ状態だったラルドは顔を赤くして慌てふためく。

「ちょっ……！ リアナ！ 着替え中！」

「あ、あたしのことは気にせずししょーはゆっくり着替えて」

リアナは平然とした様子で先ほどまでラルドが寝ていたベッドの方に行くとボフンとベッドにダイブした。

「ふにゃ〜、まだあつたかい〜」

こたつで丸くなる猫のように気持ち良さそうに眼を細める。

その間にラルドは大慌てで着替えを終え、呆れた様子でリアナを見る。

「……あのさあ」

「んにゃ？ なにししょー？」

リアナは布団の上でごろごろしながら答える。

「意識しろってわけじゃないけど、僕 男だよ？ もっとこう……  
ないの？」

「だってししょー、ぱつと見どころかじっくり見ても女の子みたいだし。意識しろって方が無理でしょ。それより朝ごはんなに？ あたし的には焼き魚とかだと嬉しいんだけど」

「……食べてく気満々だね」

「だってししょーの作るご飯美味しいですから。お願いしますよししょー」

「……たまにはリアナが作ってよ」

「いいけど病院送りになっても知りませんよ」

ラルドはあきらめたように肩を落としてキッチンに向かった。

+

「しゅちそうさま」

「……お粗末様でした」

ラルドが作った朝食を食べ、おかわりまでして満足気なリアナとそれを苦笑いのまま見るラルド。

「いや、家事全般得意だし料理は上手いし、エプロン姿は似合うし、ししょーはいい主婦になれるね」

「100歩譲って主夫って言ってくれないかな……」

ラルドは食器類を片付けるとテーブルを挟んでリアナの正面に座った。

「で、素材集めって言ってたけど何を狩りにいくの？」

「あ、忘れてた忘れてた。えっと」

リアナは腰に付けたポーチからくしゃくしゃになった依頼書を取り出した。

ラルドはそれを広げて内容に眼を通す。

「……ギギネブラ？ 珍しいね」

——毒怪竜 ギギネブラ

およそ竜には見えない、ヒルとイモリを合わせたような君の悪いモンスターだ。

本来の生息圏はもう少し東の方なのだが、ここ最近は何らかの影響で生息圏外に出てくるモンスターが多く、このギギネブラもその例だろう。

「せっかく珍しいモンスターだし、この機会に素材を取つときいな、と思って。どかなどかな？」

リアナはラルドの返事を期待した眼で待っている。ラルドは依頼書を見ながら少し考えた。

（……僕もG級ハンターになって遠くからの依頼も増えるだろうし……今のうちにどこういうモンスターが見とくのもいいか）

「OK、いいよ。ただし下位クエストみたいだしあくまで戦うのはリアナ中心だからね」

「けど危なくなったら助けってくれるんでしょ？」

「……まあね」

「それなら大丈夫！ それじゃ行こ行こ」

「あゝ……ちょっと待って」

ラルドはさっそく家から出ていこうとリアナを制した。

「うにゃ？」

リアナは小首を傾げてラルドを見る。

「もう一人。このクエストに誘いたいんだけどいいかな？」

No.12 毒怪竜 ギギネブラ1

+

——街での会話から数時間後、ラルド達は雪山の洞窟にいた。

地面や壁は氷に覆われ、天井からは数mもの氷柱が垂れ下がっている。

——ラルドの知る情報では、ギギネブラはフルフルに近い生態を  
持っているという。

それならばフルフルがよく出没する場所に行けば見つかるかもしれないと考えたのだ。

三人の足音が洞窟内に反響する。

「それにしてもすまぬな。私まで誘ってもらって」

楓は歩きながら軽く頭を下げた。

歩く度に艶やかな黒髪に紅い着物が揺れる。

「あ、うん。早めにお互いの動きも知っておいた方がいいと思ったからね。本当はもう一人のハンターも誘いたかったんだけど……」

「む、同じ日にG級ハンターになったという……私もまだ一度も会えておらぬ。先に挨拶しておきたかったのじゃがのう」

「まあアクリリムのクエストで会えるしいいんじゃない？」

「アクリリムか……その時は……例の案内の件、くれぐれもよろしくの」

「うん、大丈夫。覚えてるよ」

ラルドと楓は気楽に言葉を交わしながら洞窟を歩いていく。

「ところでじゃな」

「ん？」

楓は苦笑しながら少し声を潜めた。

「おぬしの弟子がさっきからむくれておるぞ？」

「ん？」

ラルドは後ろを振り返る。

ラルドと楓の少し後ろを、リアナがむすつとした、不機嫌そうな顔で歩いていた。

「リアナ？」

「……なに？　ししょー」

どことなく棘が有る声でリアナは返す。

「……なんか機嫌悪い？」

「別に、お構い無く」

リアナはぶすつと言つとそっぽを向いてしまった。

ラルドは困つたように頭を掻きながら再び楓との話に戻る。

「ところで楓の服……着物だっけ？　初めて見たけどすごく綺麗な色だね」

ラルドがそう言つと楓は嬉しそうに表情を弛めた。

「そうじゃろうそうじゃろう。大和の染め物は世界最高とまで言われておるからの。私の着ている物でもなかなかのものじゃろう？」

楓は両手を広げてくるりと回つてみる。艶やかな黒髪が動きに合わせてふわりと揺れた。

ラルドは見惚れるようにその動きを見ていた。

「うん。楓にすごく良く似合つてると思うよ」

「ふふふ♪　世辞でも嬉しいぞ」

「うっん。お世辞じゃなくて本当によく似合うよ」

「なんか動きにくそうだけどね」

リアナが先程よりさらに不機嫌そうに言った。

ぶすゝと頬を膨らませたまま楓を見る。

「見た目が綺麗でも狩りには関係ないしね。もっと動きやすい服の方がいいんじゃないですか？」

「その心配は無いの」

楓はそう言っで軽く着物の袖を引つ張る。すると着物は柔軟に伸びた。

「この着物は動きやすいようにと、とある人が作ってくれた特別製での、動きにくいと感じたことは無い」

「ふーん、へー、そーなんだー、すごいなー」

リアナはますます不機嫌そうに言っで今度は何も言わなくなっでしまった。

「いったいどうしたの？ 朝は機嫌良かったのに」

ラルドが言っで、リアナは何か言いたげにラルドを見た。

「……あたしがいくらおしゃれしてきても誉めてくれたこと無いのに……」

「ん？ 何か言った？」  
「何でもない！」

リアナは大声でそう言うと二人を追い抜いてずんずん先に進み始める。

ラルドと楓は困ったように顔を見合わせた。

——と、その時だった。

(っ！？)

首筋の毛がチリチリと逆立つ感覚。  
いつもの何か危険が迫っている兆候だ。

「リアナ！ 止まって！」  
「ひにゃ?!」

ラルドはリアナを制するとすぐさま息を殺し周囲の気配に集中する。

楓も何かを感じたのか鋭い視線を辺りに向けた。

——音はない。気配もない。だがラルドは何かがいることだけははっきりと感じていた。

そのまましばらく、天井から落ちる水の音だけが時を刻んでいく。

やがて痺れを切らしたようにリアナはラルドの方を見た。

「ねえししょー。まさか場の空気を変えるために言ったんじゃ……」  
「っ！！ リアナ！ 上だ！」

次の瞬間、天井から伸びてきた吸盤のような口がリアナに襲い掛かった。

No.13 毒怪竜 ギギネブラ2

「へ？」

上から伸びてきた吸盤のような口は一瞬でリアナの身体を飲み込んだ。

そのままゴムが縮むように天井へ戻っていく。

「リアナーツ！！」

天井から吸盤のような尻尾でぶら下がる不気味な白い影。

頭周りの毒線が闇の中で不気味に発光し、リアナを飲み込んだ口が大きく膨らんでいる。

リアナを襲った口。それはギギネブラのものだった。

「ひにゃああああ！！?? 助けてシショーツ！！ 臭いよ狭いよ怖いよー！！」

「待つてて！！ すぐ助ける！！」

ラルドはポーチからあるものを取り出した。

——こやし玉。モンスターのフン等を発酵させたものを玉の中に封じ込めたもので、破裂させると辺りに鼻が曲がるような凄まじい

悪臭を放つ。

ラルドは大きく振りかぶり思いきりギギネブラにこやし玉を投げつけた。

命中し、辺りに悪臭が広がる。

ギギネブラは暗い洞窟に対応して進化した種で、眼は退化しているがそのぶん嗅覚は発達している。

そのギギネブラにとってこやし玉の臭いは格別に強烈だろう。

ギギネブラは臭いにもがくとリアナを吐き出した。

「ひにゃあああ？！」

宙に投げ出されたリアナはまっ逆さまに落ちる。

「リアナ！！」「任せよ！」

いち早く動いたのは楓だった。

強靱な脚力で駆け出し、身体を投げ出す。

リアナが硬い岩盤に叩きつけられるすんのところで楓はリアナを受け止めた。

そのままつれ合うようにして岩盤の上を転がる。

「リアナ！ 楓！」

ラルドは素早くギギネブラの方を見た。

臭いに怯んだギギネブラは洞窟の壁の割れ目からどこかに移動するところだった。

ラルドはひとまず危険が無いと判断するとリアナと楓の元に駆け寄る。

「二人とも！　だいじょ……うぶ……？」

ラルドは思わず足を止めた。

「あ……う……ベタベタ……それにすっごい臭い……」

「むう……これはたまらぬ……」

リアナとそれを受け止めた楓は全身がギギネブラの唾液にまみれていた。

「うへえ……、口の中にもちよつと入った」

身体からどろどろした粘液が滴り、辺りに生臭い臭いが広がる。

「……ん？　どうしたのじゃラルド」

楓が顔についた粘液を拭いながらラルドを見る。ラルドは眼をそらした。ほのかに顔が赤い。

「え、えつと、二人とも汚れちゃったし先にそっちをなんとかしようか？　近くで温泉の湧いてる場所知ってるんだ。うん、そうしよう」

「？別に私は後でもよいが？早く追いかねば見失うじやろっ」

「いや、それは大丈夫だから。お願いだから先に身体洗って。もし誰かに見られたらとんでもない勘違いされかねないから」

「勘違い？」

楓は不思議そうに首を傾げる。

リアナはハツとして自分を見、楓の方を見た。

顔を赤くして顔を伏せる。

「ししょーのえっち……」

「なんのことじゃ？」

「わかんなくていいから！」

+

——そして十数分後

「うあゝ、生き返るゝ」

リアナと楓は雪山の麓付近に湧いた温泉に浸かっていた。

森の中の岩場に湧いた、露天風呂を思わせる天然温泉。

白い濁り湯に浸かりながらリアナはうんと伸びをした。

楓も湯に肩まで浸かって気持ち良さそうに眼を細める。

「……確かに悪くないのう。このような場所が有るとは……。しかしこれでギギネブラは完全に見失ってしまったか……」

「んゝ、ししよーならたぶん大丈夫だよ」

リアナはあっけらかんと言った。顔を洗ってプルプルと頭を振る。

「ししよーは雪山のことなら大抵わかるし、首筋チリチリセンサーも有るしね」

「……なに？ 首筋チリチリ……？」

「首筋チリチリセンサー。ま、あたしが勝手に呼んでるだけだけど、なんか近くに敵がいたりしたら首筋がチリチリしてどこにいるかわかるんだって」

「……ふむ。つまりは気を感じ取れる……ということかの？ じゃとしたらやはり相当な使い手なのじゃな」

リアナは一瞬きょとんと首を傾げたがどうやらほめられているようだとなんと、えっへんとばかりに小さな胸を張る。

「当然！ 何てったってあたしのししょーだからね」

楓はくすりと笑う。

「ふふ、おぬしはよほどラルドのことが好きなのじゃな」

「ふえっ?!」

リアナの顔が火がついたように一気に赤くなった。

楓はクスクスと笑う。

「別に恥ずかしがらんでもよかろう？ なかなかお似合いじゃと思うぞ？」

「んななな、なに言ってるのさ！ あ、あたしはししょーのことなんて別に……！」

「ほれほれ、そんな大声を出してはラルドに聞こえるぞ？」

「あう……」

リアナは口元を抑えると怨めしそうに楓を見た。

恥ずかしさを隠すためか顔半分までお湯の中まで沈み、ぶくぶくと泡を出している。

そのままチラリと、ラルドがいるはずの岩の向こう側に眼をやると楓の方に近づいていき、ひそひそと話し始める。

「……そんなにわかりやすかった？」

「あれだけやきもち焼いておればの。」

ラルドが気付いておらんようなのがまどろこしいぐらいじゃった」

「ししょー、男に告られたことは山程有るけど女の子と付き合った経験は皆無だからなあ……」

「冗談でなさそうなのが凄いの……」

リアナは深くため息をついた。

楓はふわふわとリアナの頭を撫でながら、リアナを見る。

「で、どこが好きなのじゃ？ どの程度の仲なのじゃ？」

「うゝ……勘弁してよ……あたしこういうの苦手なんだって……  
そもそもむこうはあたしのこと、妹みたいにしか思ってたなさそうだし……」

「ん？ なぜじゃ？」

「だってだって、ししょーあんな見た目だよ？ 好きになる前はあたしもししょーのこと、お姉ちゃんみたいな感じで喋ってたからいきなり変えるわけにもいかないし」

そこまで言ってリアナは一際大きなため息をついた。

「今日会ったばかりの相手になに話してんだろ……あたし」

「気にするでない。人生の先輩として何か助言してやれるかもしれない。それより、妹のようにしか見られていないというなら先にハンターとして認めてもらえるようにすればどうじゃ？ 一人前のハンターとしてならおのずと接し方も変わるじゃろう」

「あゝ……それはやってただけどさ」

リアナはますます沈んでいく。

「いいとこ見せようと思ってはりきって行くんだけど、それが全部裏目に出てるというか……」

「ふむ」

楓は頷くとひょいと手を伸ばし、リアナの肩を掴んだ。

「ひゃ？！ ちょ？ なに？」

「少し固いのう、知らず知らずのうちに緊張しておるのではないかな？」

そう言つと楓はリアナの肩をマッサージし始めた。

最初は固まっていたリアナだったが徐々に表情が解けていき、気持ち良さそうなとろけた表情になる。

「ふああ……気持ちいい……」

「緊張しておつては力が出せぬぞ。いざとなれば私達がなんとかしてやろう。じゃから思い切りやればいい」

「思い切り……か……」

リアナはこくりと頷いた。

首を曲げて楓の方を見ながら何かを考える。

「……ねえ、かえ姉」

「かえ姉？」

「あだ名。仲良くなった人はあだ名で呼ぶようにしてるんだけど……駄目？」

楓は嬉しそうに笑うと優しくリアナの頭を撫でた。

「嫌なものか。ふふ、いきなり妹ができたような気分じゃの。で、なんじゃ？」

「あのね、かえ姉。狩りについて聞きたいことが有るんだけど……」

——二人は時間も忘れて話し続けた。

No.13 毒怪竜 ギギネブラ2（後書き）

お気に入り件数50件突破しました！ 皆様ありがとうございます！

せっかくなんで記念に何かやりたいんですが……何しよう（汗）

+

「……いったい温泉に入ってる間に何があったの？」

「べつつに〜？ なんにもないよ〜？ ね、かえ姉」

「うむ。少し狩りについて話しておっただけじゃ。のうリアナ」

身体を洗い終わり再び洞窟内の大きな部屋のような場所。  
リアナと楓は見違える程に仲良くなっていた。

今は楓が洞窟内に有った鉱脈の前でリアナに採掘について教えているところで、文字通り手取り足取り教えている。

「仲良くなるのはいいけど、あまり油断しないようにね」

「そこはししょーの首筋チリチリセンサーにおまかせてことで」

「ふむ。しかし本当にここで待つておれば来るのか？」

楓の言葉にラルドは頷く。

「うん、ギギネブラが逃げた方向と移動速度から考えて、たぶんここを通るはずだよ」

ラルドの言葉に楓は感心したように頷いた。

「その口振りからすると雪山の地形は全て頭に入っておるのか？」

「……『地形を頭に入れるのはハンターの基本』って、僕の先生してくれてた人に叩き込まれたからね」

「おぬしの先生？」

「今はノーティスのギルドマスターをやってるクロウって人のことだよ、ほかに………」と、来たみたいだ」

ラルドは声を潜めた。

リアナはささっとラルドの後ろに隠れるとラルドが見ている方を見る。

視線の先には天井にへばりついたまま、のそのそと部屋の中に入ってくるギギネブラがいた。

リアナは先程食べられかけたのを思い出してしまったのかぶるぶると身体を震わせた。

そんなリアナの背中をラルドは軽く押して前に出す。

「ほら、これも練習。危なくなったら助けてあげるから」

「うゝ……」

リアナは腰の引けたまま前に出る。  
背負っていたヘビイボウガンを展開させた。

「し、ししょー。危なくなったら本当に助けてよ?」

「今まで僕がリアナに大きな怪我させたこと無いでしょ?」

ラルドは安心させるようにリアナに笑いかけた。

「それより、ギギネブラは視力が無くて臭いと音、あとは熱で相手の位置を確認する。それを頭に入れとくようにね」

「う、うん。りょーかい」

リアナは火炎弾を装填するとスコープを覗いた。照準をギギネブラに合わせる。

まだ相手には気付かれていない。リアナはそつと引き金に指をかける。

「じゃ、じゃあいくね!」

リアナは引き金を引いた。

発砲音。火炎弾はギギネブラの頭部に命中し燃え上がる。

甲高い悲鳴のような声を上げてギギネブラは天井から落下し、背中から岩盤に叩きつけられた。

リアナはそれに照準を合わせ直す。さらに立て続けに引き金を引いた。

次々に火炎弾が炸裂し炎が広がる。周囲の氷が炎で蒸発し、ギギネブラは白い蒸気に包まれた。

「や、やったかな？」

リアナはスコープを覗いていた体勢から顔を上げ様子を伺う。

その時、後ろにいたラルドの眼が鋭くなった。

「油断しない」

ラルドはリアナの首根っこを掴むと後ろに引く張った。

その直後に蒸気の中から紫色の毒の粘液が飛んできて先程までリアナがいた場所にベチャリと貼り付く。岩盤が音を立てて溶けた。

「うっわ……」

「攻撃した後は動いて立ち位置を調整するっていつも言ってるでしょ？ ヘビィボウガンはただでさえ動きにくいから早めに動かないと駄目。蒸気で相手を見えなくしちゃうのも危ない」

「う……あう」

「わかったらほら、位置取り。相手はまだまだ元気だよ」

ラルドに背中を押されてリアナはあわてて走り出した。

ラルドは小さく息を吐いてその様子を見守る。

「師弟……というより兄妹か親子みたいじゃな」

後ろから楓が声をかけてきた。

ラルドはギギネブラに弾丸を撃ち込むリアナから眼を離さず「そう？」とだけ返す。

楓はラルドの隣に立つと観察するようにラルドを見る。

「私が言うことではないじやろうが、あまり過保護なのはどうかと思っぞ？」

「何が？」

「おぬし、先程からまばたきすらしておらぬ。リアナに怪我をさせぬよう全神経を集中させている……という感じじゃ」

「……………」

ラルドは少し不満そうな顔をした。

楓は続ける。

「弟子を大切にするというのは構わぬが、リアナの方は『危なくなれば助けられる』と思ってしまっておる。それではいつまでも一人立ちできぬぞ？」

「……よくわかるね」

ラルドはそれでもリアナから視線は外さなかった。

黙ったまま、ほとんどまばたきもせず集中したままリアナの戦いを見守っている。

楓はしばらくその様子を見ていた。

「……過去に何か有ったか？」

「えっ?!」

ラルドは驚いて楓を見た。

楓はため息をつき、眼を細める。

「すまぬな。変なことを言った」

楓はそう言つと腰の太刀に手をかけ、リアナとギギネブラの方に歩き出す。

「楓？」

「リアナには狩りについて協力すると約束したのでな、少し手伝ってくる」

楓はそう言つてラルドに笑いかけた。

「私の誇りに誓つて怪我はさせぬ。じゃからおぬしは少し離れてお

れ、それだけでリアナも戦いの空気を感じられるじやろっ」

ラルドは少し考えた。

リアナと楓を交互に見て、少しためらいがちに小さく頷く。

楓はくすりと笑うとリアナの元に駆けて行った。

——ラルドは集中を解くと近くの壁に寄りかかった。

リアナを見ると、自分が離れたというだけで不安になっているのが一目でわかった。

だがそれと同時に、戦いでの動きが僅かながら良くなっているようにも見える。

「過保護……か」

言われなくてもわかってはいた。自分はリアナの面倒を見すぎている。

だがラルドはリアナから眼を離すことが怖かったのだ。リアナはすでにラルドにとって家族のような大切な存在になっている。

その大切なものを、失ってしまうのが怖くて仕方なかったのだ。

「……僕も成長しないとな……」

ラルドはポツリと呟いた。

No.15 侵入者1

+

「うゝ、つつかれたよゝ」

ノーティスの街の大通り。すでに日は暮れ、空には星が瞬いている。

リアナは疲れはてた様子で、身体を引きずるように歩いていた。

顔を上げ、平然と前を歩くラルドと楓を怨めしそうに見る。

「二人ともなんで全然平気なのさゝ？」

「まあこれは慣れじやろ。おぬしも慣れればましになる」

「いや、リアナの場合は狩りに成功した後でおおはしゃぎしてたのが原因じゃない？」

三人は無事にギギネブラの討伐を達成してギルドに報告し、自宅への帰路についている途中だった。

楓はくすくすと笑いながらリアナの頭を撫でる。

「なににせよこれからじゃ。今日の狩りで自分の良かった場所、悪かった場所、それを考えておくことじゃな」

リアナはこっくり頷く。楓はそれを確認し、十字路になった場所まで来ると立ち止まってラルドの方を見る。

「私の家はこっちじゃ。今日はここで……」

そう言って楓は西地区へ向かう道を指差す。

ラルドとリアナがすんでいるのが東地区なのでちょうど逆方向だ。

「なんなら送っていいとか？ この辺り少し迷いやすいよ」

「馬鹿にするでない。たいした距離ではないし一人で大丈夫じゃよ」

楓は笑ってそう言っつとラルド達に背を向けて夜の街を歩いていった。

ラルドとリアナは楓を見送ると二人で歩き出す。

「ねーねー、ししよー」

リアナは甘えるような声でいった。ラルドは眉をひそめる。

「なに？」

「今日は疲れたし、ししよーの作ったご飯食べたいな」

「……僕だって疲れてるんだけど……外食でいいんじゃない？」

「だってさ、ボウガンって弾いっぱい使うからすぐ金欠になっちゃ

うしお金は節約したいんだよね。それにししょーの料理、並みのお店のより美味しいし」

「……まあ、それはわかったからさ、せめて作る時に手伝ってくれない？ いつも見てるだけだし」

「いいけど前みたいに血を見ることになっちゃうかもよ？」

「……ごめん、やっぱりいい」

二人でそんなことを話ながら歩いていく。

そしてしばらくしてラルドの家の前まできた。

「とりあえずまずは休ませてよ、リアナも疲れてるでしょ？」

入口の扉に手をかけようとした瞬間ラルドはピタリと動きを止め、気配を隠した。

「？ どしたのししょ……むぐ？！」

ラルドは手でリアナの口を塞いだ。

「……中から人の気配がする……」

「へ？」

ラルドは細く扉を開け、中を覗きこんだ。

机の上に置かれた小さなランプがぼんやりと、散らかされた部屋

とアイテムボックスの前に座る人影を照らし出している。

暗くてよくは分らないが、なにやらその人影はアイテムボックスの中を引っかき回しているようだった。

そしてその横には細長く、巨大な鞆のようなものがある。周りにはアイテムボックスから引っ張り出された素材や装備などが散乱していた。

「……泥棒」

「ど……どうするのししょー？」

ラルドは背中から太刀を抜き、刃を逆に向けた。

そして音が立たないよう気を付けながらゆっくり扉を開け、開いた隙間に身体を滑り込ませて中に入る。

アイテムボックスの前の人影がピタリと動きを止め、辺りを見回した。

ラルドは素早く近くのテーブルの陰に隠れやり過ごす。

しばらくして、人影は再びアイテムボックスをあさり始めた。

ラルドは気付かれないように気を付けながら、ソロリソロリと近づく。

そしてゆつくりと太刀を振り上げた。

「くらえ……！」

掛け声と共にラルドは勢いよく太刀を降り下ろす。

瞬間、鋭い金属音が鳴った。

「?!」

ラルドの手から太刀が失われた。

人影が素早く振り返り、繰り出した一閃がラルドの太刀を弾き飛ばしたのだ。

「なっ!？」

——気付かれていた。

ラルドがそれに気づき、次の行動に移ろうとした瞬間。人影が手を伸ばし、ラルドの胸ぐらを掴んだ。

突然の浮遊感、周りの風景がひっくり返る。

「うわあああ?!」

ラルドは勢いよく床に叩きつけられた。背中に鈍い痛みが走り、一瞬息が止まる。

「ぐっ……」

ラルドが痛みに呻くと眼前にライトボウガンの銃口が突き付けられた。

「う……」「ししょー!!」

外で悲鳴のようなリアナの音が響く。

ラルドは思わず眼をつぶった。

「……おや？ 君は……ラルド君じゃないか」

思いもよらない聞き慣れた声。ラルドの眼前から銃口が下げられる。

「……その声……」

「中途半端に気配を消していたからてっきり泥棒かと思ったよ。自分の家なら堂々と入ってくればよかったのに」

さらりと、悪びれた様子もなくそう言うてのけたのは銀縁眼鏡に深い緑色のコートを纏った青年、レイスだった。

「いや、泥棒ってそれ思いつきり僕のセリフですからね?!」

ラルドは痛そうに腰を擦りながら起き上がった。

「で？ なんで人の家のアイテムボックスあさってたんですか？」  
にこやかに笑いながらレイスは答える。

「いやあ、何か珍しいアイテムでもないかと思ってね」

「思いつきり泥棒じゃないですか?!」

「失礼な。君のものは僕のものとか言うじゃないか」

「言いません！！　どこのガキ大将ですか！」

ラルドの言葉を気にした様子もなく、レイスは散らかした素材類をアイテムボックスに放り込んでいく。

「あ、あの〜」

外で様子を伺っていたリアナが入ってきた。警戒心むき出しのままレイスを見る。

「ししよー、知り合い？」

「ああ、リアナは初めてか。この人はレイスⅡエルマリスさん。G級ハンターでギルド本部の職員さんで研究者」

「……なんかすつごい投げやりな紹介……」

「以前レイスさん本人がこれでいいって言ったからね」

ラルドが確認するようにレイスを見るとレイスは満足そうに頷く。

「『初対面で相手の肩書きを正確に知ってしまうと相手の本質を見極め難くなる』というのが最近の僕の持論でね。人はどうも、見た目と肩書きで相手の第一印象を決めてしまい、その第一印象に合わせた接し方をしてしまうところがある。それを避けるためにはとりあえず肩書きを名乗らないことが第一だ。できれば顔も隠して話せれば一番いいんだけどね。そもそもコミュニケーションとは……」

「ふえ？ え……えつと、ししょー？」

リアナは眼を白黒させながら助けを求めるようにラルドの方を見る。

しかしラルドは苦笑いで返しただけだった。

レイスはくすりと笑う。

「細かい事は気にしないということさ。そんなことよりラルド君、今日は凄くいい物を持ってきたんだ」

レイスは素晴らしく上機嫌にそう言いながら、足元に置いてあった巨大な鞆から長さ2m近い細長い包みを取り出した。

しかし、ラルドはビクツと身を震わせる。

レイスがラルドの家を訪ねてきた場合 “上機嫌” と “いい物” は両方が危険信号だ。

ラルドがレイスと出会って約二年、これまでこのどちらかの条件を満たした場合ラルドはろくな目に合ったことはない。

しかも今回はさらに “凄く” 上機嫌で “凄く” いい物のコンボである。

ラルドは首筋の毛がチリチリと逆立つのを感じていた。

「あ、あの……僕、明後日クエストがあるからまた今度に……」

口元をヒクヒクと震わせながら無理やり笑顔を作り、僅かな希望

に賭けてみる。

「遠慮することはないさ、本当に凄くいい物だからね

……とはいえ、ここでは場所が悪いね……。公園にでも行こうか」

瞬殺。一瞬で僅かな希望が粉々に打ち砕かれる。

「さあ、それじゃあ早速行こうか」

レイスはラルドの服の襟を掴んでズルズルと引っ張っていく。

「ちよっ！ ししょー！」

リアナはあわてて後を追う。

三人は夜の街に消えて行った。

No. 17 レイス博士の実験1

+

——ノータイス 中央公園

昼間なら子供達の笑い声が響くその場所も、さすがに夜ともなるとしんと静まりかえり、少し寂しいような不気味なような、そんな雰囲気に含まれていた。

そんな雰囲気をぶち壊すように、鼻歌を歌いながら左手に大荷物を抱え、右手でラルドを引きずるレイスがやって来た。

その少し後ろをあっけに取られながらもリアナがついて来る。

三人はそのまま公園の真ん中にある大きな池の前まで行くと立ち止まった。

「さて、ここなら良さそうだね」

「あの……あんまり無茶なのはやめてくださいね……？」

「科学の発展には犠牲が付き物だ。けど大丈夫。君の犠牲は必ずや科学の発展に繋げてみせる」

「せめて僕優先で考えてください！」

レイスはそんな言葉は聞こえなかったかのように鞆から細長い包みを取り出し、ほどき始める。

かなり嚴重に包装されているらしく少々手こずっているようだ。

レイスは悪戦苦闘しながら、ようやく包みをほどく。

中から出てきたのは鈍い光を放つ、分厚い刀身の黒い太刀だった。

「あれ？ …… 太刀？」

てつきりもつとんでもない物が出てくるものと思っていたラルドは拍子抜けしたように言った。

遠目で見ていたリアナも興味を示したように近寄ってくる。

「うわぁ …… なんかすごそ」

ラルドはその太刀を手を取った。

刃は片刃で反りの無い直刀。形状的には東方で使われるという柳刃包丁に近い。

漆黒に輝く刃、柄の部分は見たことの無い紅い素材が使われている。

重厚感があるが重量のバランスが良いのか、振るのには不思議と抵抗はなく振りやすい。

ラルドは構え、軽く振ると再び刃を見た。

「これ……覇竜の？」

「こ名答」

レイスは上機嫌に笑った。

「あまりに硬すぎるのと、加工する時に釣り合う素材がなかなか見つからなくてね。ずいぶんと時間がかかってしまったけどようやく完成したよ」

レイスはコホンと咳払いした。

「工房の技術とハンターズギルドの秘蔵素材に王立書士団の資料、そして僕の知恵と知識と努力と才能と……その他諸々の結晶にして僕の最高傑作……それがこの“紅覇刀【裂天】”だ」

レイスはそう言って紅覇刀を我が子を見るようにとおしげな目で見つめる。

「覇竜の……か」

ラルドは少し複雑そうな顔をしながら紅覇刀を鞘に納めた。

「……確かにいい太刀と思いますけど、最高傑作と言っちゃうのはどうかと思いますよ？　あまり切れ味はよく無さそうですし属性も無いならクロウ達が使ってるG級武器の方が……」

「チッ、チッ、甘いねラルド君」

レイスは指を振りながら妖しく笑う。

「クフフ……その太刀の真骨頂を見せてあげよう。  
池の前まで行ってその太刀に気刃を纏わせてごらん……そうすれば  
分かるさ……クフフフ……」

不気味な笑み。ラルドの隣にいたリアナは怖々とラルドの服の裾  
を引っ張った。

「ね、ねえししょー？ あの人本当に大丈夫なの？ なんか怖くな  
ってきたんだけど……」

「いや、ああいう時は全然大丈夫じゃない。けど逃げたりしたらよ  
けいに大丈夫じゃなくなるから従うしかないんだ……」

ラルドは池の前まで行き紅覇刀を構えた。

そして意識を集中させ、ゆっくりと気を練っていく。

すると、ラルドが気を練るのに呼応するように紅覇刀の刀身が紅  
く染まり、炎が吹き出して刀身を包みこんだ。

「これは……？」

ラルドは眼を見張る。

もしかやと思い刃に纏わせる気を強くしてみるとそれに合わせて炎  
が大きくなった。

「僕の気刃に反応してる？」

「驚いたかい？」

レイスは満足気に言った。

「柄に使ったギルド秘蔵の紅い古龍の素材の力らしくてね、見ての通り練気に反応して強力な火属性を解放させることができる。ロックラックの方に伝わる“属性解放”の技術に近いかな？」

ラルドは魅いられたように紅覇刀を見つめる。

さらに練気を強力にすると数mの高さまで燃え上がった。

「これは……すごいですね」

お世辞無しの心からの言葉。

ラルドは自身の練気の力に関してはそこいらのハンターの数段上、特に鬼神化時の気刃は誰にも負けない自信が有った。

そして練気に呼応して属性値を上げるといふ紅覇刀。まさにラルドにはうってつけの武器だ。

「ただし少し問題が有ってね」

「え？」

ラルドは嫌な予感を感じてレイスを見る。

レイスは懷から一枚のコインを取り出すとラルドに向けて放った。

ラルドはそれを取ろうと手を伸ばした――瞬間だった。

ボウツと紅覇刀の炎が揺らぎ、ラルドの服に燃え移ったのだ。

「……………わあああああ！?!?」

ラルドの悲鳴が響き渡る。レイスは静かに頷いた。

「うん、見ての通り少しでも集中力が切れるとたちまち炎が制御できなくなるんだ。実験中もそれで何人が大火傷したからねえ……」

「わああああつ?! あつっ! あつっ!」「ししよー!」

炎に包まれパニックになっているラルドを見てレイスはため息をついた。

「……………やれやれ、君も世話がやけるね。すぐそこに池があるんだからさっさと飛び込めばいいのに」

ため息混じりにレイスはラルドを池に蹴り落とした。

派手な水音。少し間を置いてラルドの身体が浮かんできた。ラルドは池の中に立つとじとつとした視線でレイスを睨む。

レイスはまったく悪びれた様子もなくニッコリと笑った。

「とにかく、君には紅覇刀を使ってデータを集めてもらいたい。ただしあの炎を制御できるようになるまでは無闇に練気をしてはいけない、鬼神化なんてもってのほかだ。いいね?」

「……って鬼神化が駄目！？　そんなの困ります！」

「なら早く制御を完璧にするんだね。ああ、もちろん拒否権は無い。なにせほとんどの君専用につった太刀なんだ。君が実験台になるのはもはや義務だよ」

そう言いながらレイスは荷物をまとめ始める。

「それじゃあ僕はここらで帰るよ。他に仕上げなければならぬ武器があるんでね」

レイスは最後に真剣な顔でラルドを見た。

「後で使用した感想をレポートにまとめて提出するように」

「……………鬼だ」

ラルドは小さくそう呟いた。

No.18 白い狩人1

+

——ラルドがレイスから紅覇刀を受け取ってから二日後。  
つまり港街アクリリムに集合するように言われた日。

ラルド達が住んでいる地区とは反対側。主に新しく街に来たハンター達が住んでいる地区にその少女は住んでいた。

「……………ん……………ん……………」

ベッドの上。窓から射し込んだ柔らかな光に少女は眼を覚ました。  
眠たそうに起き上がると絹のような髪が肩を流れる。

薄く開いた眼は宝石のような綺麗な紅色だった。

少女はぼんやりとしたまま周りを見回す。

——ギルドから借りている家。

家具もほとんど置かれておらず、かなりがらんとしている。

少女は眼を擦りながら、もぞもぞと動いてベッドの端まで行く。  
肩に掛かっていた布団が滑り落ちると、白く滑らかな肌があらわ

になった。

(…………今日…………なんだ…………)

本人にしか聞こえない程の声で呟いた。

ゆつくりとベッドから降りると壁にかけてあった純白のローブを手に取り、袖を通した。

柔軟な素材で作られたローブはゆつたりと少女の身体を包み込む。

「ラルド…………私のこと…………覚えてるかな…………」

少女は最後に、枕元に置いてあった白と黒の一对の双剣をローブの袖の中に仕込むとそのまま家を出ていった。

+

「楓……。迎えに来たよ」

ラルドは楓の家の前にいた。以前交わした、アクリリムまで案内するという約束のためだ。

しばらくすると扉が開きひょこつとアイルーのハンゾーが顔を出す。

「ニヤ、ラルドさん？ おはようニヤ」

「おはようハンゾー、楓は？」

「フニヤ……まだ寝てるのニヤ……」

ハンゾーがそう言うとならドは少し苦い顔をした。

「……人に迎えにこさせといてそういうことする人には見えなかったんだけど……」

ハンゾーも苦笑いで返す。

「しょうがないのニヤ、ご主人は二日前ラルドさんと別れた後、案の定迷子になったらしくてニヤ。帰ってきたのはつい三時間前くらいニヤ」

「………は？ え？ 僕達が楓と別れたの二日前なんだけど……？」

「昔、初めてドンドルマの街に行った時は五日間、街中で遭難してたニヤ」

「……ほ、方向音痴って思ったより深刻なんだね……」

ラルドは思わずひきつった笑みを浮かべた。  
ハンゾーは続ける。

「それで今は疲れて死んだように眠ってるニヤ。ちょっと叩き起こしてくるから少し待っててニヤ」

そう言うとハンゾーは家の中に引っ込んでいった。

「……ハンゾーも苦労してるんだな……」

ラルドは細く息を吐き、楓の家の壁にもたれかかりった。周りの景色に目をやる。

レンガ造りの家が建ち並び、朝早いにも関わらず既に活気で溢れている。

街の憩いの場所である噴水はこんこんと水を吹き出していた。

ラルドはグツと伸びをして適当に視線をさ迷わせる。

「……ん？」

ラルドは視線を止めた。

白いフードを被った一人の少女が遠くからこちらをじっと見ていたのだ。

ラルドは周りを見回すが自分を見ているのはどうやら間違いない。

しかしそれでもラルドは最初、あまり気にはしていなかった。

名前もそこそこ知られていることに加え、少女のような見た目もあり人にじろじろ見られるのには慣れていたからだ。

（けどあの子……どこかで見たような……？）

なんとなく見覚えが有る。ラルドは思い出そうと頭をひねった。

（たしか……会ったのは街じゃない。……となると狩場か……  
っ！）

——記憶が一気によみがえった。

二年前、霸竜によってデイベスが殺された時、助けてくれた少女だ。

ちゃんとお礼を言いたくてそれとなく探していたのだが結局見付からず、そのままになっていた。

ラルドはその少女のところに駆け出した。

少女は目の前まで来たラルドの顔を見上げる。綺麗な紅い瞳がラルドを映した。

「……やっぱり……」

ラルドはその瞳をよく覚えていた。

少女は驚きながらもラルドを見ながら小鳥のように小首を傾げた。

「え、えっと、あの……僕のこと……覚えてる？」

突然の再開にしどろもどろになりながらもなんとかそれだけを尋ねる。

すると少女はこっくりと頷いた。それがラルドには嬉しかった。

「本当に？ 良かった。覚えてなかったらどうしようかと思ったよ、えーっと」

「覚えてるし……知ってるよ……？」

少女は柔かな笑顔を浮かべた。

「私の名前……アンセス……。久しぶり……ラルド……ずっとずっと会いたかった……」

## No.19 白い狩人2

自分の名前まで知っているととは思わなかったラルドは面食らった。

「僕のこと知ってるの？」

すると、ラルドの問いに答えるように紅い瞳の少女“アンセス”はローブの袖から一枚のカードを取り出す。

取り出したのは汚れ一つない新品のギルドカード。そこにはHRと書かれていた。

「……HR……？ まさか、君がもう一人のG級ハンター？！」

少女はこっくり頷いた。

「ラルド達のこと……リアナから聞いた……」

ラルドはG級昇格クエストの日、姿の見えなかったリアナが、もう一人の新G級ハンターを気に入って街に連れていったと聞いたのを思い出した。

なるほど、見たところリアナより少し年下といったところか。周りが年上ばかりのリアナにとってはぜひ仲良くなっておきたい相手だったのだろう。

（——けどそれにしても……）

ラルドは眼を白黒させながらギルドカードとアンセスを見比べる。

「……さすがに驚いたな……」

「……どうして……？」

「いや、その……」

ラルドは改めてアンセスの身体を上から下まで見た。

アンセスの持っていた武器は双剣だった。モニカやリアナのようなガンナーならまだしも、その身体は双剣士としてはあまりにも華奢すぎる。

通常、双剣はそれぞれの剣を片手で振り回すため、かなりの筋力がある。

しかしローブから覗くアンセスの手首はハンターとしてでなくともあまりに華奢すぎる。

到底双剣を振り回すのに耐えられるようには見えないし、そもそも小柄で色白なアンセス自身、ハンターには見えない。

「何て言うか……僕も人のこと言えないけど戦いとか苦手そうだし……」

「これこれラルド、人は見かけで判断してはいかんの」

後ろから声をかけられた。ラルドはニツと笑って振り返る。

そこには少し眠そうに眼を細める楓とその肩に乗るハンゾーがいた。

おそらく寝惚けながら準備した為だろう。昨日はピシッと着ていた着物が少しずれている。

「おはよう。……なんか大変だったみたいだね」

「……笑いたければ笑え」

「いや、別に笑わないけどさ、逆にいつたいどうやったら街中で二日間迷えるの？ もう遭難の一步手前だよ？」

「……右側の壁に沿って行けばいつか帰り着くと思っておったのだが……甘かった」

「……なるほど、確かに人は見かけで判断しちゃ駄目だね」

「私を見て納得するでない！」

——少し間の抜けたような会話。

しかしアンセスは油断ない眼で楓を見ていた。

（風牙 楓……この人が……）

アンセスは誰にも聞こえないほど小さな声で呟く。

ちょうどその時、楓がアンセスを見た。

アンセスはびくりと身体を震わせる。

「アンセス……じゃったの？ 私の名は風牙 楓、同じG級ハンター同士、よろしく頼むの」

そう言って楓は手を差し出して握手を求める。

だがアンセスは何かに怯えた様子で一步下がる。

「……別に怯えんでも捕って喰ったりはせんよ」

「人見知りするタイプなのかニヤ？」

楓の肩に乗っていたハンゾーが言った。

その瞬間、アンセスが大きく眼を見開き、驚いた表情になった。

「……喋ってる……？」

「ニヤ？ アイルーなんだから喋って当然ニヤ」

アンセスは先程とはうってかわり、興味深々といった感じでハンゾーを見つめる

「……本物……初めて見た……」

「アイルーを見たことがない？ 変わっておるのう」

楓はそう言う肩に乗っていたハンゾーをひょいと抱き上げた。

ハンゾーも意図を理解したようでおとなしくしている。

「ほれ、そんなに珍しいなら抱いてみるといい。こやつのも皮はなかなか気持ちいいぞ」

楓がそう言うてハンゾーを差し出すとアンセスはおずおずと近付いてきた。

ハンゾーと楓の顔を順番に見て、そつとハンゾーを受け取る。

割れ物を扱うような緊張した動きでアンセスはハンゾーを胸に抱いた。

「わあ……」

アンセスの表情が初めてほころんだ。

おそろおそろハンゾーの頭を撫でてみる。

「すべすべして……ふかふかしてる……」

「フニヤ、自慢の毛皮ニヤ、毎日お手入れは欠かさないのニヤ」

アンセスは少し慣れてくるとハンゾーをギュッと抱き締めた。

「すべすべ……ふかふか……暖かい……」

「ニヤゝ、気に入ってもらえたみたいで何よりニヤ」

「この毛皮……手袋にしたら暖かそう……」

アンセスはそう言うと、片手でハンゾーを抱いたままローブの袖から黒い剣を出した。

サーツとハンゾーの顔から血の気が引いた。

「……ニヤアアア？！ ご主人ゝ！！ ラルドさゝん！！ 助けてくれニヤゝ！ 手袋にされるのは嫌ニヤアアア！！」

「ス、ストップ！ アンセスストップ！」

ラルドはあわててアンセスの手からハンゾーをひったくった。

大切なおもちゃを取られた子供のような表情になるアンセス。

楓は少しあきれたようにラルドを見る。

「何をしておるか？ 冗談に決まっておろう。何を血相変えておる」

「い、いや……なんか首筋がやたらチリチリして……」

「はあ？ 何を言っておる？」

「うニヤ……、今のはおいらも感じたニヤ……なんか本気でヤバかったニヤ……」

アンセスは何も答えずただハンゾーを見つめるだけだった。

何かとても名残惜しそつに

## No.19 白い狩人2（後書き）

セロ「ユニークアクセス10000件突破しました」

ラルド「連載開始から約3ヶ月、長かったような短かったような…とにかく皆さんありがとうございました」

セロ「皆様に感謝の気持ちを込めて、ラルドくん女体化によるR・18話を……」

ラルド「ちょっと待て！！ 誰が喜ぶんですかそれ！！」

セロ「いや、リアルに要望があつたから書いてみるのもいいかなと……うわなにす（ry

気が向いたら本当に書いて活動報告の方で報告します。

## No.20 アクリリム

+

——それから三人は竜車に乗り、揺られること数時間。

海沿いの街道を走る竜車から見える景色は、一面に海が広がっていた。

ところどころに氷は浮かんでいるが、快晴ということもあり海は青く輝いている。

岸からは無数の栈橋が伸び、数え切れない程の大小の船が並んでいた。

「おー！ 海ニヤ海ニヤ！」

「……すごく大きい……」

ハンゾーとアンセスは竜車の天幕から身を乗り出すようにして景色を眺めていた。

「二人共、あまり身を乗り出して落ちてはいかんぞ？」

楓はそう言いながら自分の太刀の手入れをしている。

ラルド、楓、アンセス、ハンゾーの三人と一匹を乗せた竜車は街中に入り、船の停泊所へ向かっていく。

ラルドは最終確認とばかりにレイスから譲られた紅覇刀を眺めていた。

やはり使用に不安が残る。

（少なくとも鬼神化はやらない方がいいか……）

そうして刃の確認をしていると竜車は速度を落とし、止まった。

「お待たせしました！ アクリリム、ギルド船停泊所に到着しました！」

竜車の御者の声が聞こえてくる。ラルドは紅覇刀を鞘に納めると立ち上がり、うんと伸びをした。

「ま、なるようになるか」

ラルドは外に出るとあまり慣れない潮の香りにむせそうになった。

ラルドが立っているのは石のブロックで海を埋め立てて作った船の停泊所。

沖に向かって真っ直ぐに伸びる細長い石の陸地から、枝のように

木の栈橋が伸び、その先に船が停められている。

「ふむ。潮の香りも久しぶりじゃな」

「お魚食べたいニャー」

「……………」

ラルドに続いて楓と肩に乗ったハンゾー、キョロキョロと辺りを見回すアンセスが降りてくる。

「おい！！」

少し離れた場所から声が聞こえた。

ラルド達がそちらを見ると手を振るクロウとレイスがこちらにやってくる。

「うっす！ 新米どもようやく到着か」

「ああ、うん、おはようクロウ」

ラルドはそう言いながら周りを見回す。そしてレイスの方を向いた。

「珍しいですね。見送りに来るタイプじゃないと思ってましたよ」

「ああ、僕は僕の最高傑作の門出を見送ろうと思ってね」

レイスはにこやかに言うたちらりと楓の方を見た。

楓は眉を寄せる。

「ついでに、新しいハンターには綺麗な女性がいると聞いたんで見に来ただけだね、いやはや噂通りの美人だ」

「……………」

楓は何も言わず視線をそらした。

レイスは再びラルドに視線を戻す。

「さて、いいかなラルド君？　もしも紅覇刀を無くしたりしたら……」

「無くしたら？」

ラルドは恐る恐る尋ねた。

「そうだね……僕の作った凄く危険な薬品の実験台と僕の作った凄く危険な武器の的、どっちがいい？」

「……死刑の一択に聞こえるのは気のせいですか？」

そうやって話しているとクロウがクエスト用紙の写しを取り出し、全員に配り始めた。

ラルド達は用紙に眼を通す。

「クエスト内容は……孤島で大量発生したモンスターの討伐？　なんか漠然としてるね」

ラルドの言葉にクロウは頷く。

「その孤島の近くではちょっと前まで人間同士で戦争しててな。モンスターの討伐が長いことされなかったのと、モンスターの食料……まあぶっちゃけ戦死した人間なんだが、それが大量に供給されてモンスターが増えすぎてるって状態だ。で、戦争が終わったら今度は増えすぎたモンスターが食料求めて人間の里を襲い始めてる」

「ふむ、つまり討伐対象は大量発生したモンスター全て。ということかの？」

楓がそう言うのとクロウは歯を見せて笑った。

「おう、まっ、長期の継続クエストになりそうだからお前らは先発隊だ。特にヤバそうなモンスターの討伐と向こうの情報集め終わったら帰ってきていい」

クロウがそう言って指差した先には大きな帆の付いた、立派なギルド船があった。

「ニヤ！　船旅だニヤ？　楽しみニヤ。お魚料理とか食べれるかニヤ？」

ハンゾーがキラキラと目を輝かせる。

「……言つとくけどアイルーは一緒に行けねーぞ?」

「フニヤ? でもそれじゃあご主人がまいご……」

瞬間、まさに電光石火の早業で楓はハンゾーの口を塞いだ。

「ハンゾー? 口は災いの元じゃといつも言っておろう?」

口は笑っているが目が笑っていない。

「んだいたい?」

「気にせんでくれ、こつちの話じゃ。さ、皆船に乗ろうか」

そう言つと楓は足早に船の方に向かって行く。

レイスの横を通りすぎようとした時、レイスは周りに聞こえないような小さな声で楓に声をかけた。

「ずいぶん表情が柔らかくなったね。見に来て良かった」

すると楓は足を止めてレイスを鋭く睨んだ。

「……はて、何の話かの? 会つのは今日が初めてじゃったはずじやぞ? “レイス殿”」

クスリとレイスは笑う。

「おつと失礼。けど初めて会つたのにどうして君は僕の名前を知ってるのかな?」

「……………相変わらずそなたは意地が悪い」

楓は船の方へと向かって行った。

ラルドもその後を追いつながらななしにクロウに声をかけた。

「クロウ、リアナは知らない？　いつも見送りに来るのに今日はいないけど」

「んあ？　そういや見ないな。お前らが来るまでは一緒に準備してたんだが……………なんか用か？」

「いや、気になっただけだよ」

ラルドは楓の後を追って船に向かう。

最後にアンセスがとことこマイペースに歩きながらクロウとレイスの横を通りすぎていく。

クロウとレイスはその後ろ姿を見送った。

「……………なあレイス。あのアンセスってガキ、本当に大丈夫か？　歩いてるの見ただけでも隙だらけだぞ？」

「さあね。そこはラルド君たちに任せるさ」

そうしてアンセスも船に乗り込んで行った。



No. 21 見つめる者

+

——船が港を出てから半日が経った。

日は沈み、月明かりの照らす中、船はゆっくりと目的の孤島に向かつて行く。

その船の甲板にラルドは一人たたずんでいた。

柵に手を乗せたまま何か考え事をするように、ぼんやりと水平線を見つめている。

「……………ラルド？」

声をかけてきたのは楓だった。

黒髪が月明かりに照らされ、幻想的に揺れる。

「何か考えごとかの？」

「ああ、どうも眠れないからちょっとね」

「そうか、私もじゃ」

そう言いながら楓はラルドの隣に立つ。

「邪魔で無ければ、少し話がしたいが……かまわぬかの？」

「ん、いいよ。僕も話し相手が欲しかったし」

ラルドがそう言うと楓も柵に体重を預け、海を眺める。

「何を考えておったのじゃ？」

「ああ……うん……」

ラルドは視線を伏せる。

「もしやリアナのことか？ 見送りに来てくれんで寂しかったとか」

楓は何かを楽しむように聞いた。

ラルドはポリポリと頬を掻く。

「ん〜と……、リアナのこと少しあるけど、今はアンセスのことかな？」

「……アンセスの？」

楓ははっとして後ずさる。

「ま、まさかおぬしアンセスのことが……」

「……ん？」

「いかん……いかんぞ！ それではリアナがあまりに……。いや、それ以前にアンセスに手を出してはさすがに犯罪じゃろうが！ くれぐれも……」「そういう意味じゃない！」

ラルドはあわてて否定した。

楓も冷静さを取り戻したようで、少し頬を赤くしながらこほんと咳払いする。

「ではどういうことじゃ？」

「えーっと……よけいな世話なんだろうけど、あの子狩りに出して大丈夫かな……って。何て言うか……あゝ、歩いてるところか見ると一流のハンターの動きじゃないんだよ。隙だらけというかなんと言うか」

「ふむ……」

楓も心当たりがあり、ラルドの言葉に頷く。

——狩場ではモンスターの奇襲もあるため、隙を作らないようにしながら動く必要がある。

ハンターとしての経験が長いと、自然と日常生活でもその動きが出てくるようになるものだ。

だがアンセスの場合は完全に隙だらけ。周囲にまったく警戒しておらず、一般人と変わらない。

いや、一般人の方がまだましというようなレベルだった。

「正直、あんな子がどうやってG級まで上がってきたんだろう……」。

そもそもまだあんな子供なのに、周りの人もどうして……」

「こら、ラルド」

楓はラルドの頭を軽くはたいた。

「それは私達が口にすることではない。少なくとも今はハンターとして、アンセスに対する侮辱じゃ」

「……けど」

ラルドが不満そうに顔を伏せると楓はふっと表情を和らげた。

子供をあやすようにそつとラルドの頭を撫でる。

「リアナの時もじゃが、おぬしが仲間を本気で心配しておるのはわかっておる。

じゃがそれではいつまでも仲間はおぬしと同じ目線には立ってくれぬぞ？」

「それってどういう……」

ラルドは頭を撫でられてなんとなく気恥ずかしそうに視線をそらした。

楓はクスクスと笑う。

「おぬしなら説明せずともいずれ解るじやろつ。

……アンセスのことは私も心配でないとええば嘘になる。じゃがあの子もG級ハンターまで上がってきておるのも事実じゃし、もし万

が一があれば私たちが全力であの子を助けてやればよい。  
それが仲間としての在り方じゃろう」

「うん……」

十

「かえ姉……あたしのこと応援するって言うてくれたのになんでしょーとちよつといい雰囲気になってんのさ……」

物陰に、人が入れるほど大きな、丸々とした布袋が“いた”。

布袋には覗き穴のような穴が二つ空いており、何やらもぞもぞと動いている。

「やつぱりついてきて正解だったかも。」

……まあかえ姉はあたしの気持ち知ってるからともかく、問題は白ちゃんね。もしもしょーに口り属性好きとか有ったらかなりまずそう」

布袋はラルド達に背を向けるとぴよこぴよこ飛びはねながらその場から離れていった。



## No.22 お荷物登場

+

——さらに数時間後、夜が明けたころ。

ラルドは船室で必要な物を整理していた。

忘れ物がないかを確認し、紅覇刀を背中に差すと船室を出る。

「わあ……」

ラルドは思わず感嘆の声を上げる。

船から見える景色には目的地の孤島が視界いっぱいに広がっていた。

孤島はまるで海の真っ只中に生えた巨大な植物のように、一面にうつそうとした木を生やしていた。

木々が島の地表を覆い隠すように密生し、遠くからランポスと思われる鳴き声が聞こえてくる。

「ここが僕にとって初のG級クエストの舞台か……」

ラルドは船の縁から身を乗り出すようにしながら感慨深そうに呟いた。すると、隣にアンセスがやってきた。

アンセスは無言のまま、真剣な表情で島を端から端まで眺めている。

「アンセス？　どうかしたの」

「気を付けて……」

「……え？」

ラルドがキョトンとした顔で尋ねた。

一方アンセスは島から目を離さず続ける。

「いる……。ラルドと同じ……運命に触れる者……感じる……“運命の戦い”……」

ラルドは眼をぱちくりさせながらアンセスを見ていた。

「??　え、えくと……よくわからないんだけど……。あ、もしかしてアンセスって演劇とかファンタジーとか好き？」

「……………」

ラルドの言葉に対してアンセスは沈黙で返す。

「……え、えつと……」

ラルドは言葉に困って苦笑いを浮かべる。

そうしている間に船はゆるゆると、島から伸びる寂れた栈橋に横付けされた。

「ラルドゥー！ アンセスゥー！ 早く来ぬかー！」

楓の二人を呼ぶ声、見ると楓はすでに島に上陸し、船から荷物を運び出しているところだった。

「あ、ごめん！ すぐいく！」

ラルドはそう言い、アンセスをチラリと見た後、楓の元に駆けていった。

「……………」

残されたアンセスは少ししょぼんとしながら視線をさ迷わせる。  
——と、ある物が眼に止まった。

「??？」

甲板の角に置かれた布袋。アンセスはそれをじっと見つめる。

「……………荷物？」

近づき、軽く指でつついてみると布袋はびくりと震えた。

「……………??？」

アンセスはその袋を掴むとずるずると引きずっていった。

+

ラルドはギシギシと不吉な音を立てる栈橋に降り立った。  
少し体重が重い人なら壊れて海に落ちてしまいそうだ。

慎重に足下を確かめるとあらためて島を見渡してみる。

まず眼に入るのは眩しいぐらい真っ白な砂浜。  
その向こうにはうっそうと巨大な大木が密生する森が広がっている。

その森は砂浜とは正反対に薄暗く、木の陰からチャチャブーでも  
飛び出してきそうだ。

「なんとも自然豊かな島だのう」

楓が森を眺めながら言った。

手にはベースキャンプの組み立てに使うテント用具を持っていた。

「それ重くない？ 持とうか？」

「これぐらいは大丈夫じゃよ、おぬしは他の荷物をたのむ」

楓はそう言つと栈橋を渡り島の方に向かって行く。

「さて、僕も……」「ラルド……！」

——船の上からアンセスの声が聞こえた。

見上げるとアンセスが船の縁から顔を出し、片手に大きな布袋をぶら下げていた。

「荷物……これでいい……？」

アンセスは少し不安そうな表情でたずねてくる。

“何か手伝いたい”という気持ちが伝わり、ラルドは微笑ましそ  
うに笑いかける。

「うん。ありがとう。こっち投げて」

「……いいの？ これ、重い……」

「大丈夫 大丈夫」

ラルドはこの時、アンセスが片手で軽々と持っていることもあり、  
布袋の中身を服が何か、軽い物だと思っていた。

——アンセスがラルドに向けて布袋を放る。

「よっ……と、とおおっ?!」

受け取った瞬間、腕に想定外の重量がかかる。

バキンと音を立て、棧橋が壊れた。

「わあああつ！」

海に落下。盛大に水しぶきが上がる。

少し間を置いてラルドが水面から顔を出した。

「げほっ！ げほっ！ う……く……袋は？」

袋もラルドの近くに浮いてきた。

だがしかし、明らかにおかしいことが一つ。

「袋が暴れてる？」

まるで中に何かがいるように、袋は水の中でのたうち回っていたのだ。

袋の中から悲鳴が聞こえる。

「ひ、ひにゃあああ？！ み、水！ 水だめ！ あたし水だめなんだって！」

ラルドにとってよく聞きなれた声が聞こえた。  
ラルドはぱかんとしたまま袋を見つめる。

「にゃあああ!?! や! ちょ?! 袋の口ほどけない! 助けて  
ししょ〜っ!?!」

「……………リアナ?」

No.22 お荷物登場（後書き）

ラルドくん性転換もの、執筆開始しました  
↑

## No.23 地鳴り

+

——「……………」

白い砂浜の上、びしょ濡れのまま正座させられるリアナとそれを腕組みして見下ろすラルドがいた。

二人の様子を苦笑いしながら額に手を当てる楓と、いまいち状況を飲み込めていないアンセスが見守る。

「し、ししよー？ あんまり怒らないで……ね？」

——話を要約するところだ。

リアナはアクリリムで荷物に紛れて船に乗り込み、下位ハンターでありながらG級クエストについて来たということだ。

ちなみにこれらは全てギルドの規約違反。船への密航や下位ハンターのG級クエスト参加は場合によってはしばらく牢屋に入れられかねない違反だ。

「……………」

「し、ししょー？」

「リアナは……………」

ラルドは静かに口を開いた。

リアナはビクリと身体を強張らせる。

「リアナは、何の準備も無しにここに来て、自分が死ぬとか、自分のせいで誰かが死ぬとか考えなかったの？」

静かな声でラルドは言った。

「え……………あう……………」

「もし、リアナが危ない目に合って、それを僕が庇って死んだら……………どうする？」

リアナは何も答えなかった。

ラルドは続ける。

「狩場ではね。自分の勝手な行動や力不足で仲間を死なしてしまうこともあるんだ。

わかるリアナ？ わからないなら今すぐハンターなんて辞めた方がいい」

静かな、しかし鋭い、突き放すような口調でラルドは言った。

怒鳴られるよりも心に突き刺さる静かな言葉。

リアナの眼にじわりと涙がたまっていく。

「だって……だってえ……」

「もし、リアナのせいで誰かが死んでも“だって”って言うつもり？」

リアナの眼から涙が溢れた。

ぼろぼろと子供のようにむせび泣きながらラルドを見つめる。

「だって……ひつく……だって……ぐす……周りが女の子ばかりで心配だったもん……」

「……はあ？」

「う……ひつく……ひつく……うあ……うああああん！」

いよいよリアナは声を上げて泣き出した。

隣で見守っていた楓がため息をつきながらリアナのところに行く  
と、そっとリアナを抱きしめた。

リアナは楓の胸に顔を埋めて泣き続ける。

「……おぬしの意見には同意するが、少々きつくはないか？」

「……ごめん……ちょっと……ね」

「ふむ……まあ、おぬしの言葉は十分この子の心に刻まれたじやろう。」

のうリアナ？ ほれ、まず言うことがあるじやろっ？」

楓がそう言っけてリアナの頭を撫でるとリアナはそつと楓から離れた。

ぐずりながらラルドの方を見ると深く頭を下げる。

「ししょー、ごめんなさい……」

ラルドはため息をつくと少し表情を弛めた。

「……わかった。もう言わない」

ラルドがそう言っけて笑いかけると、リアナも涙を拭きおすおすと笑顔を返した。

「……けど帰ったらお仕置きはするからね」

「う……うん。……ちなみにお仕置きってどんな？」

「フルフルベビー納品クエスト10周」

「本ッ当にごめんなさい！ すいません反省してます！ だからお願い許してししょっ！」

「……わかったよ。7周に負けとく」

「う……ぐすっ……うええええん！ かえ姉っ！」

再び楓の胸に逆戻りするリアナ。  
ラルドはそれを『ふうっ』とため息をつきながら見守る。

「……………家族みたい」

そんな三人の様子を見ていたアンセスがぼそりと呟いた。

「「「家族？」」」

三人が同時にアンセスの方を見た。

「うん……。以前読んだ本に……。こんな場面……。あった。  
ラルドがお父さん……。楓がお母さん……。リアナがおてんば娘……。」

アンセスはそう言いながら順番にラルド達を指差していく。

リアナが即座に反応してアンセスに詰め寄った。

「ちょっと白ちゃん！ おてんば娘ってなにさ！ とうにかししょーとかえ姉夫婦！？ こんなところで変なフラグ立てないでよー」

「……………白ちゃん？」

アンセスはきょとんと首をかしげる。

「あ、それあたしが付けたあだ名。なんか白いから白ちゃん」

酷いネーミングである。

「ほら、昇格クエストの日に街案内してあげて仲良くなったでしょ？ あたし友達のことにはあだ名で呼ぶようにしてるんだ」

「……………友達？」

アンセスはますます首をかしげる。

「そこ疑問文にしないでよ」

——なにやらリアナが馴染んでしまった。

ラルドはやれやれと首を振る。

その時だった。

「っ?!」

首筋の毛がチリチリと逆立つような感覚が走った。  
いつもと同じ、危険が迫っている合図だ。

ラルドはリアナの元に駆け寄ると腕を掴んだ。

「し、ししょー？」

「リアナ。僕から離れないで。楓とアンセスも気を付けて、何か来る」

ラルドに言われるまでもなく楓も何か感じたようだった。

腰に差した太刀の柄に手を置き、周りに注意を払う。

——対照的にアンセスは構える様子もなくラルドを見つめながら  
つつ立っているだけである。

ラルドはそちらにも注意を払いながら危険が迫っているのを感じ  
ていた。

——そして、地面が揺れた。

No.24 食欲です。

地面が激しく揺れ、ラルドは思わず砂浜に手をついた。  
リアナが悲鳴をあげる。

「わっ！ わわ！ じ、地震？！」

「違う！ これは……………危ない！」

ラルドは素早くリアナを抱き寄せた。

その直後にリアナが先程まで立っていた場所から鋭い角が突きだしてきた。

「ひあ……………」

「っ！ 走るよ！ まだ来る！」

ラルドは素早くリアナを抱き上げると全速力で走り出した。

視界の端で楓もアンセスの腕を引いて走り出すのが見えた。

走り出して数歩。砂の中から無数の角が飛び出してきた。

ラルドの後を追うように砂浜から次々に角が突き出されてくる。

「く……」

ラルドは歯を食い縛り自分の感じる“危険”に集中した。

チリチリと足下、砂の下から無数の気配を感じる。

その内の幾つかが明確に自分に狙いを定めた。

「リアナ掴まって！」

ラルドの進行方向から角が胸に向かって飛び出してきた。

瞬間的に身体を回転させ背中に差した太刀の鞘を使って防ぐ。

ほとんど間を置かず両脇から新たな角が飛び出してきた。

「っっっ！！」

ラルドはリアナを強く抱き締めると飛び出して来た角をしゃがんで避けた。

頭上で二本の角がぶつかり合い砕ける。

ラルドは体勢を低くしたまま角と角の隙間に飛び込んだ。

転がるように、突き出してくる角の林から脱出しすぐさま立ち上がるとその場から離れる。

「楓！ アンセス！」

振り返ると少し遅れて楓とアンセスが飛び出してきた。

楓はアンセスの腕を引きながらラルドの隣まで来ると息を切らしながら他の三人の無事を確認する。

「三人共無事じゃの!？」

楓の言葉に全員が頷き、先程の角の林の方を見た。

まるで砂の中から産み出されたかのように角の主達が次々と姿を現した。

現れたのは砂にまみれた巨大な盾蟹　ダイミョウザザミ。

ヤドカリのような生態をもつ甲殻種で、一角竜の頭骨をヤドにしている。

甲殻に付いた砂が流れ落ちると赤い甲殻が顔を出した。

それが数十頭。砂浜を覆いつくすようにひしめき合っている。

「異常発生とは聞いてたけど、これは行き過ぎじゃない?」

ラルドはリアナを降ろし、太刀に手をかけながら呟く。

リアナは眼を真ん丸にし「うわあ……」と声を上げた。

「うわあ……うっわあ……あれ、ザザミソ汁にしたら何人分だろ……」

「……ザザミソ汁?」

リアナの言葉にアンセスが反応した。  
興味津々といった様子でリアナを見つめる。

「ん？ 白ちゃん知らないの？ ザザミソ汁ってのはザザミソを材料に……『美味しいの……？』」

アンセスがリアナの言葉を遮って尋ねる。

「人の話は最後まで聞こうよ……。……まあ、かなり美味しいかな？ あたしも大好物だし♪」

「二人共……そんな話は後にしてもらえぬかの……？」

楓が苦い顔で二人を見る。

ラルドはまたため息を吐いた。最近ため息を吐きっぱなしである。

「とりあえず、あの数をまとめて相手するのは危険。楓、一度引いて体勢を立て直す……でいい？」

楓が頷いたのを確認し、ラルドはけむり玉を地面に叩き付けた。

+

——ラルド達は砂浜から続く密林へと逃げ込んでいた。

「うむ、ここまで来ればもう大丈夫かの」

しばらく走ると先頭を走っていた楓がそう言いながら立ち止まった。

続いてラルドとリアナが追いついて立ち止まる。

「ハア……ハア……ずいぶん走ったね……」

リアナは息を弾ませながら言った。

ラルドが差し出した水筒を受け取ると一口飲んでホッと一息つく。

「ダイミヨウザザミは意外と行動範囲が広いからね。みんな、大丈夫？」

「うむ、私は問題無い」

「あ……あたしもなんとか……」

……。

その時三人は気付いた。

いるはずのもう一人がいない。

「……アンセスは？」

ラルドの言葉に楓とリアナは辺りを見回した。

暗い森の中にアンセスの白い影は見当たらない。  
どこまでも薄暗い木々が広がっているだけだ。

「……はぐれた?!」

——その頃、砂浜ではアンセスが独りたたずんでいた。

周りはグルリと幾重にも無数の盾蟹が取り巻き、ギチギチと音を  
立ててアンセスを威嚇している。

アンセスはそこでジッと周りに群がる盾蟹達を見つめていた。

……。

……。

(……………ザザミン汁……………)



No.25 危険な視線

+

「ひにゃああああ！？ ヤバい！ ヤバいつて！ 白ちゃんが……  
白ちゃんが……！」

密林にリアナの悲鳴が木霊した。

ラルドと楓も真剣な眼で互いを見る。

「ラルド、どうするのじゃ？ 戻るのも危険じゃと思うが」

「もちろん戻るよ。危険だから行かないなんてあり得ない」

ラルドは迷わず答えた。

はぐれた時の状況から考えてアンセスは盾蟹の群れの中に取り残されている可能性もある。

普通のG級ハンターなら一人でも何とかなるかもしれないが……、正直なところアンセス一人となるとかなり心配な状況である。

「あ、あたしはどうしたら……」

「リアナも来て、モンスターがどこに潜んでるかわからない以上、僕達と一緒にいた方がいい。楓、急ごう」

「うむ。承知した」

三人はそうして再び砂浜に向かって走り出した。

「……………」

——走りながら、ラルドはある疑問を感じていた。

（…………何も感じなかった…………）

状況から考えて今、明らかにアンセスは“危険”な状態だ。

だが仲間に“危険”が迫っているのならラルドは事前にそれを感じることができたはずである。

（なのに今回は何も感じなかった…………今もアンセスに危険が迫っている感じがしない…………）

この場合二つの可能性が考えられる。

一つはアンセスは現在危険な場所におらず、安全な場所にいるということ。

もう一つは——とはいえこちらの可能性はほぼ無いが“盾蟹の群れの中に取り残される”という状況が“アンセスにとって危険でも

何でもない”ということ。

(……さすがにそれはない。　まずは砂浜に戻ってから……)

——この時、ラルドは自分の思考に集中し過ぎていた。

故に、自分の足下に小さな“危険”が有ることに直前まで気付くことができなかった。

「っ?!　しまっ——楓!　リアナ!　止まって!」

だが遅かった。ラルド、楓、リアナの三人の体重がかかった瞬間、地面が突然陥没した。

「く……!」「なっ?!」「ひにゃあ?!」

——落とし穴。

対モニター用に仕掛けられていたそれが、三人分の重量がかかったことにより誤作動してしまったのだ。

「あいたゝ……」

「う……大丈夫?　リアナ」

「うぬう、なぜこのような場所に落とし穴が……」

三人は落とし穴の底で土まみれになりながらもよたよたと身を起こす。

——その時、落とし穴の上に有った木の上から大量の赤い玉が落

ちてきた。

「「「え?」「」」

赤い玉は落とし穴の中に落ちると次々と破裂し、白い煙が吹き出してくる。

「え? ちょ? え? なに?」

「捕獲用麻酔玉のトラップだ! 息止め……て……」

すでに遅かった。

捕獲用麻酔玉の煙を吸った三人は次々と深い眠りの中に落ちていった。

——それから十数分後、十人程のハンター風の男達が落とし穴の中を覗いていた。

「うわっちゃん、モンスターやと思ったら人間やん」

「どうするんです? バーグの兄貴」

「そやな」

バーグと呼ばれた独特の方言で喋る男はボリボリと頭を掻いた。

風貌は一言で表現するなら海賊か何か。

日に焼けて傷んだ髪はボサボサで顎には無精髭を生やしている。

日に焼けた背中には巨大な石の拳を模したハンマー“石拳【愚】”を背負い、上半身にはそれ以外何も着ていない。

「んゝ、めんどいしなゝ。ほっとこか」

「いいんすか？　ここら辺、飛竜とか多いし甲虫種なんかもわんさかいますよ？」

「かまへんかまへん、別にワイらにはなんも関係な……ん？」

バーグは落とし穴の中で眠っている三人に眼を止めた。

「んんんっ！？」

眼を剥いて楓を見て、続いてリアナを見て、最後にラルドを見る。

「……………」

「？　兄貴？」

バーグは眼をつぶった。

大きく息を吸い込み胸の前で全力でガッツポーズ。

「かわええ　おにゃによこ（訳：女の子）三人キタ——ッ！！」

「うわっ！？」

大気を震わす勢いでバーグの咆哮が響き渡った。

「何をやっとなねん！ あの子らはワイらが仕掛けた罠に引っ掛か  
つたんやぞ！ はよ助けんかい！」

「え？ 放っておくんじゃ……」

「アホか！ 何言っとなねんこの人でなし！ この辺り飛竜とか多  
いし甲虫種なんかもわんさかおんねんぞ！ あのおにゃによこ（訳：  
女の子）らに何かあつたらどうすんねん！」

「は、はあ」

バーグは息を荒くしながらそう言つとゴホンと咳払いした。

「一応言つとくけどな。

ワイは別におにゃによこやから助ける訳や無いし。

ましてやアジトに連れ帰つてぬちよぬちよしたいとか嫁にしたいと  
かは全く考えてなくてあくまでも人類愛の……とりあえず助けてこ  
んかい！ 麻酔玉の効果切れへんうちに！」

「……はいはい」

——その頃

真つ白な砂浜に散らばる、焼け焦げた無数のダイミョウザザミの  
死体。

その中をアンセスはキョロキョロと周りを見回しながら歩いていた。

手近にいたダイミョウザザミに近づき剣の先でツンツンつついては残念そうな顔をして他のダイミョウザザミに駆け寄って行く。

すると、ふと足を止め一頭のダイミョウザザミに目を止めた。

「よかった……まだ生きてる……」

アンセスは嬉しそうに顔をほころばせた。

「新鮮な材料……取れた……」 リアナ、ザザミソ汁って……」

しかし、振り返ったアンセスの前にはダイミョウザザミの死体しかない。

アンセスはキョロキョロと周りを見回す。

「……みんな……どこ……？」

「どうかしたの？」

突然声をかけられた。

アンセスが驚いてそちらを向くと、そこにはだぶだぶの黒衣に身

を包んだ少年が立っていた。

No.26 自重を知らない男

+

「う……ん……」

フリルの付いた赤いシーツの敷かれたキングサイズのベッドの上。  
ラルドは薄く眼を開け、ぼんやりと意識がはつきりしないまま身体を起こした。

「あれ……？ 僕どうして……」

周りを見回してラルドは呟いた。

そこは大きなテントの中。テントと言っても、一般的な気軽に持ち運びできる物では無く、遊牧民等が使う数年単位で住むための大型の物だ。

床には牙獣種か何かの皮から作られた絨毯が敷かれ、テントにしてはそこそこ立派な雰囲気である。

「そうだ……。アンセス……わっ!？」

ベッドから降りようとしてバランスを崩した。  
どうやら麻酔玉の影響が残ってるらしい。

——と、その時一人の上半身裸の男が鼻歌混じりに入ってきた。

男はベッドから落ちたラルドを見ると一瞬眉をしかめる。

「ちっ……眼え覚ましおったか……」

「——は？」

「ああ、何もない何もない。ほれ」

男はラルドの身体をひょいと抱き上げるとベッドの上に戻した。

ラルドは眼をぱちくりさせながら男の顔を見る。

「あなたは？」

「ああ、ワイの名前はバーグ、ここの獵団 大バーグ団の団長や。  
なんやワイらが仕掛けた罠にかかってもうたみたいで、悪かったな」

「獵団……大バーグ団」

獵団とはより効率的に多人数での狩獵を行うために、ハンター同士が集まって組織するハンターの集団だ。

規模はピンからキリまでだが、団長というからにはそれなりの実力なのだろう。

「あ、あの、バーグ……さん？ 聞きたいことが……」

「ああ、なんや？」

「えっと……僕はラルドつていいいます。

クエストでこの島に来たんですけど砂浜の辺りで仲間とはぐれてしまつて……何か知りませんか？」

「おおっ?! 僕っ子キタコレ!？」

「……はい？」

ラルドが怪訝そうな顔を見るとバーグはあわてて咳払いした。

「いや、見てへんな。砂浜にも行つたけどダイミヨウの死体しか無かつたで？」

「ダイミヨウの死体？」

「そや、たぶんその仲間つてのがやつたんちゃう? それやつたらとりあえずまだ生きとるやろ」

その言葉を聞いてラルドはホッと胸を撫で下ろした。

（考えてみればアンセスもG級ハンターだ。ちょっと心配し過ぎたかな？）

「ちなみにその仲間つてのは名前なんていうん? あれやつたらうちの団の何人が使つて探したるで？」

バーグの言葉にラルドは表情を明るくした。

「本当ですか? 助かります。なんてお礼を言えばいいか」

「かまへんかまへん。あとで身体でたっぷりお礼してもらってから」

「え？ ああ、労働で返せってことですか？」

「まあそういうこつちな。肉体労働で」

にやけながら答えるバーグを不思議そうにラルドは見ていた。

なぜか先程から首筋がチリチリする。だが麻醉玉の影響か、まだはつきりとは感じられない。

「まあそれは構いませんのでお願いします。仲間の名前はアンセス  
つて言つて……」

「……女の子やな？」

急にバーグは真剣な表情になった。

「？ そうですけど……？」

「かわええ？」

「は？ あ……まあ相当かわいい部類には入ると思いますけど……  
わっ？！」

バーグは弾かれるようにテントの外に出て行った。

テントの外から『今すぐ団のメンバー総動員やあああっ！！  
アンセスっちようおにゃによこ探してこんかあああい！！』という  
叫び声が聞こえる。

「……何？ あの人……」

ラルドは苦笑いしながら身体の状態を確かめた。  
まだ痺れはあるがだいぶ動きが戻ってきた。

合わせて、自身の危険を感じる能力も。

（……何だろう？ 近くにもものすごい危険が迫ってる気がする……）

バーグが戻ってきた。

「さて、ほなさっそく身体でお礼してもらおか」

バーグはにやけながら言った。  
何故か鼻息が荒い。

「あ………すみません。まだちょっと身体が痺れてて、もう少し後に  
してくれませんか？」

「だいじょぶだいじょぶ！ ラルドちゃんは天井のシミを数えてれ  
ば終わるから」

バーグはゆつくりとにじりよって来る。

ラルドは恐怖を感じてベッドのすみに逃げた。

「あ、あの………ちなみに肉体労働って……」

「いやあれや、最近少子化問題が叫ばれとるから、ワイらで微力な  
がらも少子化対策をやな」

ラルドの表情がひきつる。

「え……えっと……つまり？」

「Let's 子作り」

ラルドは声にならない悲鳴をあげた。

「ぼ、ぼ、僕は男ですからね?!」

「ありえん（笑）」

「わかる人しかわからないネタ言わないでください！ ほ、ほら」

ラルドはあわてて服の前を開き胸元を見せた。

しかしバーグはますます鼻の下を伸ばす。

「おほっ!? 意外に積極的！ 大丈夫！ ワイはまな板から爆乳まで余裕で守備範囲やから！」

「そうじゃなくて！」

「ヒャッハーッ!!」

バーグは助走を付けるとラルドに飛びかかった。

「わああああっ!?!」

——が、ピタリと空中でバーグが静止した。

「へ？」

「ずいぶん楽しそうなことをしておるのう……」

——凍えるような冷たい声

楓がバーグの後頭部をわしづかみにしていた。

女性の細腕のどこにそんな力が有るのだろうか？ そのままバーグを片手で高々と掲げ宙吊りにする。

「あ……ども、姉ちゃん眼え覚めたんや」

テント内に充満する楓の鋭すぎる殺気。

バーグは全身に冷や汗をかきながらひきつった笑顔を浮かべる。

楓はにが虫の死体を見るような眼で宙吊りにしたバーグを睨んでいた。

「私はもうバーグとやら……おぬしのような輩は竜に食われて死んでしまえばいいと思うのじゃが、どうじゃろうか？」

「え……あ、いや、ワ、ワイはですね。あくまでもこの国の少子化対策のために……」

——次の瞬間。バーグの顔面に楓の拳がめり込んだ。

ギャグのような吹き飛び方をしてバーグの身体がテントの外に転がっていく。

「この国の未来を想うなら、  
まずはおぬしが腹を切るべきじゃな」

「い、いやゝ。冗談やって！　ワイのちょっとした冗談。イツツァジョーク！」

楓とラルドにボコボコにされたバーグは地面に座らされ、必死に苦しい言い訳をしていた。

楓は腕組みしたままそれを見下ろす。

楓の後ろでは、楓と同じようにバーグのことをにが虫の死体でも見るような眼で見つめるラルドがいた。

「冗談……のう。それはすまぬな、私には本気にしか見えなかった」

「い、いやゝ、気にせんとってください。誰にでも間違いはあるさかい」

「うむ。じゃが私は冗談と本当の区別をつけるのが苦手でのう。次は間違えておぬしの首を跳ねてしまいかも知れぬから気をつけてくれ」

「い、いややわゝ。そんな冗談……」「私はこういう冗談は言わぬ」

お互いに乾いた笑い声を上げた。

——と、その時バーグの部下の少年が駆けてきた。

「兄貴、兄貴の言ってたアンセスって女の子っぱいの見つけましたよ」

「——!!」

——少年の持って帰ってきた情報はこう。

『見慣れない白い髪の子が、黒い服を着た男の子と一緒に北の洞窟に入って行った』というものだ。

「北の洞窟っていうのは？」

ラルドが聞くとバーグは少年に地図を持ってこさせ、面倒くさそうにその一点を指差した。

「ここや、黒蛇団が根城にしている場所やな」

「黒蛇団？」

「この島にいるもう一つの獵団や。……獵団ゆつてもワイらと違ってろくでなしの集まりやけどな。  
モンスターだけやのうて人間とか薬の売り買いまで手え出しとるやばいやつらや」

「ちょ……何でそんな連中がいるのにハンターズギルドに通報しないの？」

ラルドが言うとバーグは顔をしかめた。

「あゝ、それはやな……」

「おぬしも似たようなものじゃからじゃろっ？」

楓はため息混じりに言った。

バーグは苦笑いを浮かべる。

「えゝ？　ワイらをあんなヤバいのと一緒にせんといてゝな。ただワイらはちょゝっとモンスターの素材を裏ルートで流しとるだけで……」  
「要は密猟団じゃろっが、私から見れば変わらぬは馬鹿者」

楓は立ち上がると地図を拾い上げ、丸めると袖の中へ納めた。

「何にせよ、行くぞラルド。急いだ方が良いじゃろっ。どうなるかはわからぬが早い方がよさそうじゃ」

「うん。……リアナはどうしようか？」

「まだ眼は覚めておらんかったの……ならばちようどいい、連れて行く訳にも行かぬしここに残っておいてもらうと……」  
「ホンマに？」

——楓が“リアナには残ってもらう”と言った瞬間、バーグの表情がパアッと輝いた。

楓とラルドは顔を見合わせ、二人同時にバーグの肩を掴んだ。

「「あんだ／おぬしも来い」」

「はえ？」

「おぬしとリアナと一緒に置いておく訳にはいかん」「とりあえずあんたが危険だってことだけは良くわかる」

「え？ 何？ とうか何かラルちゃん口調変わってる？」

「ラルちゃん言うな。あんだみたいな人に敬語使いたくない」

「どうせおぬしのことじゃから私らがいなくなったらリアナに卑猥なことをしようとか考えておったんじゃない？」

ギクツ！ とバーグは身体を震わせた。

「……とにかくアンセス助け出すまでは一緒に来てもらっから。……ちなみに僕の師匠はノーティスのギルドマスターだからね？ 断つたら君たちのこと通報する」

「と、言うより断った時点でおぬしだけはこの場で切り捨てる」

「いや？！ ちょ？！」

「「さあ、行くぞ／行こう」」

バーグは二人に引きずられて行った。

——その数十分後

「えゝ……ししょー、あたし置いてきぼり……？」

眼を覚ましたリアナはベッドの上でバーク団の少年から一連の話を聞いていた。

少年は愛想笑いを浮かべる。

「まあ大丈夫ですよ。うちの兄貴はあれで強いし、リアナさんのお師匠さん達もかなり強そうだし。あ、水飲みます？」

「ん、ありがとう」

リアナは少年から水を受け取るとふうつとため息をついた。

「けどあんた達ってさ、一応密猟団なんだよね？ 全然恐い感じしないけど」

「ああ、あつしらは元々は戦争孤児っすからね」

「戦争孤児？」

「この辺りがちょっと前まで紛争地帯だったのは知ってるっすか？」

「……そういえばクロ兄がそんなこと言ってたっけ」

リアナは港でクロウに教えてもらったことを思い出しながら答えた。

「この団のメンバーはその紛争で親が死んだ子供なんすよ。」

バーグの兄貴はそんなオイラたちを集めて、今まで面倒見てくれたんっす。

しかも、本当ならG級ハンターにだってなれるぐらい強いのに、オイラ達を養うために密猟なんてやってるんす」

「へー、いい人なんだ」

「かわいい女の子の前だと暴走しちゃうのが珠に傷過ぎなんすけどね」

二人で笑い合う。

リアナは水を飲むとホッと一息ついた。

「じゃあ信じてよさそっかな？ 白ちゃん……無事だといいいけど」

「……心配っすか？」

「そりゃ友達だしね。……本当ならあたしも行きたいけど、ししよーにお説教されたばかりだし、あたしまで捕まったら馬鹿みたいだしね」

「……大丈夫っすよ、兄貴達なら……」

「大丈夫だよ、ししよー達なら……」

二人でお互いの信じる者の無事を祈るように眼を閉じる。

二人は理解していた。自分達のやるべきことを。

——必ずみんな揃って帰ってくる。

だから帰って来た時、それを明るく迎えてあげられるように準備する。

それが自分達のやるべきこと——

と、その時だった。

テントの外から聞こえた悲鳴。

バグ団の少女が慌てた様子でテントに飛び込んでくる。

「大変！ 黒蛇団の連中が攻め込んできた！」

「へ？」「え？」

リアナと少年の眼が点になった。

少女は肩で息を切らしながら続ける。

「とにかく抵抗しちゃ駄目！ 抵抗したら殺されちゃう！ 今は大人しく捕まるしか……」

リアナはひくひくと苦笑いを浮かべた。

「え……今の綺麗にまとめるところじゃなかったの……？」



——島の北部。

「あれや、あれが黒蛇団のアジトや」

草場の影からこっそりと様子をつかがいながらバーグは言った。

バーグの指差す先には巨大な鍾乳洞が口を開けていた。

入り口の前には見張りだろうか？ 大柄ないかにも柄の悪そうな男が何人がブラブラと歩き回っている。

「……できれば話し合いですめばいいけど……」

「無理やろな。連中そъいうの全然通じへん」

ラルドはジツと男達を観察するとバーグの方を見る。

「連れてきていて何だけど、協力してくれるってことでいいの？ そちにはメリツト無いでしょ？」

「んあ、別にかまへんかまへん。ワイも連中に散々いらんことされとるし、アンセスっちゅうおにゃによこ助けるついでにお宝でももらってくるわ」

バーグはそう言うのにやけた笑みを浮かべた。

「ま、もちろん楓の姉さんが身体でお礼してくれるっていうんやったらワイは大歓迎……ぬあっ！痛い痛い！」

バーグの耳を思い切り引っ張りながら、何かに気付いたように楓は眼を鋭くする。

「……誰か来た。気をつけよ」

三人は体勢を低くして様子を伺う。

遠くから大勢の人影が近付いてきた。

「あれは……」

大勢の人影。それは黒蛇団らしい男達が十数人と、後ろ手に縛られ首に縄をかけられ引っ張られる、バーグ団の少年少女だった。

「あっんのアホ蛇団！ワイの弟分達を」

「落ち着かぬか！ここで出て行つては返って危険じゃ！」

飛び出して行こうとしたバーグを楓は羽交い締めにして無理やり抑える。

「ぬぐっ！離せや姉さん！………あ、いや、やっぱり離さんとして、胸の感触が……」「こんな時に何を考えておるかケダモノ！」

楓は羽交い締めをほどこきバーグの頭を拳でグリグリする。

——この時、楓は一つ間違いを犯していた。  
本当に止めるべきなのはバグではなかった。

「リアナ……」

縄をかけられて歩く少年少女の中にリアナを見つけ、ラルドは拳を固く握りしめた。

見開いた眼は僅かに赤みを帯び、食い縛った歯はギリリと音を立てる。

——様子を見ると、リアナの前を歩いていた少年が転んだ。

リアナは心配して少年のところにしゃがみこむ。

「だ、大丈夫？」

「何してる！ 早く歩け！」

男がリアナの首にかかった縄を引っ張った。だがリアナはそれに抵抗する。

「この子足に怪我してる！ これじゃそんな歩けないよ！」  
「うるさい！」

男はリアナの頬を殴った。

「っ!!」

ラルドは眼を剥いた。視線で殺そうとするかのように男を睨む。その瞳はさらに赤みを帯びていく。

男は倒れたリアナを見下ろすと他の男達にリアナの身体を抑えさせた。

「ちょ?! な、なに?!」

「いい機会だ、他のやつもよく見とけ、生意気な口を聞いたやつがどうなるか……な!」

男はリアナを押さえ付け、拳を振り上げた。

「鬼神化……!」

ラルドの瞳が深紅に染まる。

楓が止める間も無く草影を飛び出した。

リアナに覆い被さっていた男がラルドに気付く。

「っ?! なんだおま……っ?!」

電光石火。問答無用で男の脇腹を蹴り上げる。  
男の身体が数m飛び地面に叩きつけられた。

「ぐっ……」

男は低くうめいて動かなくなった。

リアナは驚いて眼を見開く。

「し、ししょー？」

リアナが呆けたように呟くとラルドは深紅の眼を細めてリアナを見た。

「じつとしてろ。お前は“俺”が護る」

「え……？」

ラルドは背中から太刀を鞘ごと引き抜いた。  
素早く帯紐で太刀が鞘から抜けられないように縛り、後ろから向かってきた男の顔面に叩きつける。

「この！」「相手は一人だ！ 囲め囲め！」

男達はラルドを取り囲む。

だが次の瞬間、男達の輪が外側から崩された。

「な、なんだ？！」

動揺する男達。

敵の輪の中に楓とバークが自ら飛び込んできた。

三人で背中を合わせそれぞれの正面の敵を睨む。

「おぬしも案外血の気が多いのう……もつとも、おぬしが行かなければ私が行っていたが」

楓はどことなくおかしそうに言った。

敵の男達は三人を囲み直した。

「ふ、ふん！ 相手はたった三人だ！」 「囲んで袋にしまえ！」  
「おう！」

周りの男達は口々に声を上げる。

それを聞きながらバークはニヤリと笑った。

「雑魚のテンプレご苦労さん」

背中ハンマーを手取る。

「ほなワイも言っとこか！ ワイの仲間到手え出すヤツは誰である  
うと許さへん！ 命は助けたるからとつとと死ねや！」

「って命助ける気無いじゃん？！」

リアナに突っ込まれ豪快に笑う。

「おうナイスツックミ、リアナちゃん！　うちの団にほしいわあ」

「……お前にだけは絶対にやらん……」

「頼みますよラルドお父さん。つつかなんかラルちゃん声恐くな  
つてへん？」

「……斬るぞ？」

後ろで行われる会話を聞きながら楓はくすりと笑った。

「なんとも頼もしい限りじゃのう……」

「なめやがつて……かかれ！」

男達は一斉に三人に向かってきた。

No.29 白と黒（前書き）

ノクターンの方にラルドくんTS小説を上げてみた。

反省はしているが後悔はしていない  
↑

——ラルド達と黒蛇団の戦いは一方的だった。

「これで全員じゃの」

ぼこぼこにのした男達を武装解除して縄で縛り上げる。  
適当に積み上げると楓はふう、と息を吐いた。

ラルドは顔をしかめながら鍾乳洞の入り口の方を見る。瞳の色が黒に戻り、しゅんとしたように肩を落とした。

「……けど一人中に逃げて行くのが見えた……ごめん、勝手なことした」

「さっきも言っただじやろう。おぬしがやらんでも私がやっていた。じゃが、意外ではあったの、おぬしがあそこまで怒るとは……」

「僕にとってリアナが一番大切なものの一つだからね」

「……ふえっ?!」

リアナは眼をぱちくりさせてラルドを見た。

「し、ししょー? 今のもう一回」

「？ 僕にとってリアナは一番大切なものの一つだからね？」

「……っ!!」

リアナはじたばた悶え始めた。楓は二人に背を向けてクスクス笑っている。

「あゝ、和んでるところ悪いんやけどこれからどうする？」

「アンセスを助けるのは急いだ方がいいだろうね。助けに来たのが知れたなら人質に使われる可能性もある。

……僕がここで罠をやって敵の注意を引き付ける。楓とバーグは騒ぎに紛れてアンセスを助けて欲しい」

「……おぬし一人で大丈夫か？」

「狭い場所なら数の差は補えるよ。それに僕は“危険”が来る前にわかるしね」

「……承知した。バーグ、他の入り口の場所は？」

「もうちょい西にもう一個有ったはずや。ラルちゃんが罠やってくれるんやったらなんとかなるやろ」

簡潔に打ち合わせを終え、三人は頷き合う。

おいてけぼりを受けたリアナはおそろおそろ手を上げた。

「あの……あたしどうすればいいかな」

「……危ないから帰って」

ラルドは冷たく言った。

だが今回のリアナは首を振って食い下がる。

「やだよ！　だって……私にとってもししょーが……ししょーが私の一番大切なものだもん！　心配しながら待ってるなんてやだよ！」

「……ほほ」「ほう」

楓とバーグの声が揃った。

リアナは真つ赤になって、照れ隠しのように走り出すとラルド達が敵から取り上げた武器の山からサポート向けのボウガンを見繕う。

「ほら、これなら援護とかサポートできるし、絶対に邪魔にならないから。ね？　お願いししょー！」

「……時間もあまり無いか……危ないと思ったらすぐ逃げることで、僕の指示には絶対従うこと、いいね？」

リアナが頷くのを確認し、ラルドは楓の方を見る。

「とにかく急いで。アンセスが心配だ」

一方その頃。

「……まだかな……」

黒蛇団のアジトのとある一室、床一面にひかれた絨毯の上でアンセスは行儀よくちょこんと座っていた。

フカフカの絨毯や暖炉、小さなシャンデリアなど鍾乳洞の中とは思えない豪華な部屋である。

「……………お腹空いた」

アンセスが小さく呟くとお腹の音が鳴る。

ちょうどその時部屋の扉が叩かれた。

「お待たせ！ もらって来たよ」

そう言って、湯気を上げる二つの器が乗った盆を片手に、ぶかぶかの黒衣を着た少年が入ってきた。

少年はアンセスの前に腰を下ろすと慣れない動作でアンセスと自分の前に器を置く。

「あはは、こんなこと普段しないから時間がかっちゃったよ。ほら、欲しがってたザザミソ汁。冷めないうちに食べよ」

ニコニコと笑う少年に対し、アンセスは真剣な面持ちで、まるでザザミソ汁から何か飛び出して来るのではないかと警戒するように

ジツと覗き込んでいる。

「……これが……ザザミソ汁……」

アンセスはそう呟くと、木のスプーンでザザミソ汁を少しだけすくい、恐る恐る口に運ぶ。

「……おいしい……!」

ぱあつと表情が輝いた。

そこからは全ての警戒心を解いたように、夢中で食べ始める。

少年はその様子を嬉しそうにしながら眺めていた。

「気に入った?」

「……こんなおいしいもの……生まれて始めて食べた……」

「ふふ、大げさだね」

少年は器を手に取り、ザザミソ汁を一口すするとニッコリと笑った。

「僕も始めてなんだ。同年代の子と一緒に食事したの。だから……すごく嬉しいよ」

そうしている間にも、アンセスの器の中身はどんどん減っていき、あっという間に空になる。

すると、アンセスはジーツと少年の持っている器を見つめ始めた。

「……もしかして……こっちも欲しい？」

視線に気付いた少年がそう言うと、アンセスは期待に表情を輝かせ、コクコクと頷く。

それを見て少年は悪戯っぽい笑みを浮かべた。

「えゝ、どうしよつかなゝ」

「……くれないの……？」

アンセスは紅い宝石のような瞳を潤ませながら、捨てられた子犬のような眼で少年を見つめる。

「う……」

その顔を見て、さすがに少年も降参した。

「もう……しょうがないな」

「……ありがとう……」

アンセスはザザミソ汁の入った器を受け取ると、幸せそうに食べる始める。

「もっと欲しかったら言ってね？ 僕、ここではお客様だし、だいたいのがままは通るから」

アンセスはこっくり頷く。

「にしても驚いたよ。暇だから砂浜で遊んでようかなと思ったらザミ全滅で君がいて。あれどうやったの？ 相手黒焦げだったけど」

「……ひみつ」

アンセスはザミソ汁を飲み干すと満足したようにホッと息をついた。

少年も釣られたようにホッと息をつく。

「とりあえずまたお話ししようよ、ここまで僕が話しっぱなしだったし君の話も聞きたいな」

アンセスはこっくり頷いて緊張したように笑った。

「うん。じゃあ……話すね？ “イシユティス”」

“黒衣の死神”イシユティスは楽しそうに笑い返した。

ラルドは太刀の握りを確かめる。

剣を抜くことは避けたい。鞘から太刀が抜けないようにしっかりと紐を巻き直す。

最後にリアナが茂みの中に隠れたのを確認した。

リアナは茂みの中でせつせと弾を調合していた。ラルドの視線に気付き顔を上げる。

「あ、し、ししょー！ 硬化弾撃つとく？ あ、いや、鬼人弾？

それとも回復？ え」と

「……そのボウガンの中身、睡眠弾でしたって落ちじゃないよね？」

「……あ」

「……とりあえず誤射だけはやめてね？」

ラルドは鍾乳洞の前で仁王立ちし、近づいてくる“危険”を感知する。

（近づいてくるのは3、4……5。もっと誘き寄せないと）

「いたぞ！ あいつだ！」

鍾乳洞の奥からわらわらと黒蛇団の男がわいてきた。

（“危険”は少ない。問題無い）

ラルドは走り出した。囲まれるとさすがに面倒。その前に蹴散らしにかかる。

——狙うのは……右翼。

「この！」

男が振るった棍棒を伏せて避け様足払いをかけ、さらに男の体勢が崩れたところに後ろ蹴りで蹴り飛ばす。

「ぐあつ……！」

男は壁に叩きつけられ動かなくなった。危険消失。

軽くステップを踏んで飛びかかってきた男をかわし、後頭部に太刀入りの鞘を叩き付けた。

（僕のこと女だと思って襲ってくる連中を蹴散らすために身に付けた武術がこんな風に役立つなんてね）

苦笑いしながら一人の股間を蹴りあげ、後ろに下がりながら背後に来ていた男の足を踵で踏みつけ、肘うちをみまう。

さらに二人、戦闘不能

最後の一人、見るからに逃げ腰になっている男を精一杯の恐い目付きで睨む。

「まだやる気？　こんなのばかりなら何人来ても敗ける気しないよ」

「ひ、ひいいい！？」

男は鍾乳洞の中に逃げに行った。  
それが作戦。囿役なのだからもっとたくさん来てもらわないと困る。

（鬼神化も温存してるし体力も大丈夫。あとは楓達がうまくやってくれば……………っ?!）

チリチリと首筋の毛が逆立った。

「……………この感じ……………まさか“あの子”がいるのか？」

ラルドは小さく呟いた。

再び“危険”に集中。

息を整え、静かに次の敵を待った。

「どうしたんだろ？　なんだか騒がしいね？」

黒蛇団のアジト内の一室。アンセスと談笑していたイシュティスは外の喧騒に会話を止めた。

「……影？」

「はっ」

イシュティスが呼ぶとすぐさま隣に忍装備を身に付けた男が現れた。

アンセスの方に眼をやり、軽く頭を下げる。

「黒蛇団と敵対するグループが襲撃をかけてきたようです。少数ですがかなりの手練れで苦戦している模様ですが……いかがしますか？」

「放つとく」

「よろしいので？」

「いいよ。今は戦うのよりアンセスと話してる方が楽しいし、いざとなったら僕がアンセスを護らないとだしね」

「……………」

影はアンセスをジッと見つめた。

「……………」やはり似ている」

「どうかした？ 影」

「……いえ」

一方のアンセスは何かを感じとるように静かに眼を閉じていた。

「……………イシュティス。行って」

「え？」

イシュティスは驚いてアンセスを見た。

アンセスは少し寂しそうな顔をして目を伏せてる。

「え？ あれ？ どうしたの？」

アンセスの様子を心配したように、イシュティスは顔を覗き込んだ。

「イシュティスにはここで出会ってほしい……………それで、また運命が動く……………」

ボソボソと消え入りそうな声でアンセスは言った。

きょとんとしているイシュティスの服をつまみ、上目遣いにイシュティスを見る。

イシュティスは眼をぱちくりさせた。

「……………お願い……………上に行つて？ きつとそれがあの人を護ることになる」

「え……あ、うん……わかったよ」

はたしてちゃんと理解したかは怪しかったが、イシュティスは少し頬を赤くしながら頷いた。

緊張したようなぎこちない笑顔を浮かべながらふらふら立ち上がる。

「そ、それじゃさっそく行ってくるよ」

「うん……気を付けて……殺さないでね？」

「あ……うん。と、とにかく行ってくるよ。とりあえず殺さないように殺せばいいんだね？」

イシュティスは部屋を出ていった。

「……アンセス様」

影はアンセスに声をかけた。

アンセスは「ん？」と首を傾げて影を見る。

「少し、私についてきていただきたい」



No.31 死神との再開

「リアナ、回復弾お願い。くれぐれも他のと間違えないように」

「う、うん」

鍾乳洞前で、向かってきた黒蛇団をあらかた片付けたラルドは壁に寄りかかって休んでいた。

リアナに回復弾を撃ってもらいながら息を整える。

「大丈夫？ ししょー」

「うん。まだまだ問題ないよ」

そう笑いかけながらラルドはリアナの頭に手を置いた。

「リアナもよく頑張ってたね。しっかり援護できてたよ」

「……えへへ」

ラルドに誉められてリアナはくすぐったそうに眼を細めた。なんだかんだで普段あまり誉めてもらえていなかった分、嬉しさもひとしおのようだ。

だがラルドは鍾乳洞の奥を見ながら真剣な表情で続ける。

「ただどこから先は援護しないで絶対に隠れてて……たぶん、護れる余裕がない」

「え？」

リアナはラルドが見ていた方を見る。  
そこには一人の少年が立っていた。

真っ黒なぶかぶかの黒衣を着て、背中には背丈ほどもある大鎌を背負っている。

少年はにこりと笑うとゆっくりと歩き、ラルドの数メートル前で止まった。芝居がかった動作で手を広げる。

「久しぶりラルドお兄ちゃん」 まさかこんなところで会えるとは思わなかったよ」

「僕もだよ。イシュティス……レイスさんと雪山で戦って以来だね」  
ラルドは油断なくイシュティスを睨んだまま軽くリアナを押し退けた。

リアナは驚いたようにラルドを見るが、ラルドは首を軽く振って“離れる”と伝えただけだった。

リアナが戸惑いながら離れて行くのを眼で追いながらイシュティスは屈託ない笑顔を浮かべる。

「二年ぶりぐらいかな？ 本当に強くなったんだってねラルドお

兄ちゃん。僕も噂は聞いてるよ」

「……何で君がここにいる」

ラルドは普段とはうって変わって鋭い眼でイシュティスを睨んでいた。僅かな隙も見せまいという構えだ。

それを見てイシュティスは嬉しそうに眼を細める。

「いいね。隙が無いや。それに僕がいるってわかってたみたいだけど、逃げずに待ってたね。それだけ自信有るんだ？ あ、何で僕がここにいるかだったっけ？ えっとね、ここの連中が密猟した素材を受け取るためだよ」

「なんのために？」

「それはちよつと言えないかな？」

イシュティスはいたずらっぽく言つと何かを思い出したようにポンと手を打った。

「なるほど、あの子はこのために僕をここに行かせたのか。あの子は本当に何でも知ってるなあ」

「……何を言ってるんだ？」

「何でもないよ。それよりも鬼神化……だっけ？ あれコントロールできるようになったんだよね？ 使ってみてよ」

「やる気……か」

「うん、もちろん」

「そっか……」

すう、とラルドの瞳が真紅に染まる。

纏う雰囲気は刃物のように鋭く研ぎ澄まされたものになった。

「ならお前は……お前だけは殺すつもりでやる」

太刀を固定していた紐を解き、抜刀する。刀身が炎に包まれ一気に燃え上がる。

「いくぞ……」

上段に構え踏み込んだ。

イシュティスはその突進を大鎌で受け止めた。衝撃に大鎌が大きくなつた。だが、ラルドはそれに止まらず、強引に足を進める。

「うお……わわわ!？」

ラルドは一気にイシュティスを鍾乳洞内に押し込んだ。

太刀を振るってイシュティスを弾き、続けざまに攻め立てる。

「……くっ!」

攻撃がイシュティスの頬を掠めた。

イシュティスはいっと笑うと、ラルドの攻撃を避け様に身体を

こまのように回転させ大鎌で切り返す。だがラルドは落ち着いてそれを受け止め、大きく飛び退きいったん距離を取った。

イシュティスは小さく口笛を吹く。

「今は驚いたよ！ 正直油断してたけど、もうちょっとでやられちゃうところだった」

「……そのままやられてれば良かったのにな」

「そんなこと言わずにさ、もっと遊んでよお兄ちゃん」 久しぶりに楽しく遊べそうなんだから」

イシュティスはけらけらと笑うと、トントンとステップを踏み始めた。

「行くよ！」

イシュティスは大鎌を振るった。

鍾乳洞の薄闇を剣閃が走る。

赤い、炎を纏った剣閃と闇のような黒い剣閃は幾度もぶつかり合い火花を散らす。そのたびにラルドとイシュテイス、二人のシルエツトが闇に浮かび上がった。

「いいね！　すごくいい！」

イシュテイスの声が鍾乳洞内にこだまする。つばぜり合って火花を散らし、互いに弾きあつてまたぶつかる。

二人の實力は伯仲していた。イシュテイスが斬りかかり、ラルドがいなし、斬り返し、避け、受け止め、返す。

「あはははは！　楽しいねお兄ちゃん！　こんなの久しぶりだよ！」

「くっ……」

實力は伯仲していたが流れはイシュテイスの方にあった。

ラルドの特殊能力“鬼神化”だがそれは長時間連続使用できるものでもなく、徐々に限界が近付いてきていた。

「く……の……！」

“早く決着を”その焦りがラルドの攻撃を乱した。

「甘いよ！」

イシュティスはラルドの攻撃を体勢を低くして避け、ラルドの懷に飛び込んだ。

拳を固く握り、ラルドの腹に打ち込む。決して強い一撃ではなかったがまともに入った。ラルドの足下がふらつく。

「くっつ！」

「遅い遅い」

一閃。イシュティスの一撃がラルドの太刀を弾き飛ばした。高く舞い上がり、落ちてきたそれを掴み、ラルドに突き付ける。

「えへへ、僕の勝ちつと。変わった剣を持つてるね。気の込め方で炎が出る剣……か」

炎を纏ったラルドの太刀、紅覇刀を見ながら楽しそうに呟く。

「……………僕を殺す？」

ラルドの瞳は元の黒に戻っていた。決してイシュティスから眼はそらさないがその額には冷たい汗が流れていた。

「まさか、殺さないよ」

ケラケラ笑ってイシュティスはラルドの剣を投げ渡した。ラルドが驚きながらも剣を受け取る。

「僕はね。ある意味で君を助けに来たんだよ。きっとそのためにあ

の子は僕と君を会わせただから」

「あの子……？ 助けに……？」

「そ。ん。簡単と言っなら、長生きしたいならあまり……鬼神化だっけ？ あれはあまり使わない方がいいよ」

ラルドの眼がさらに鋭くなった。

「どっという意味？」

「そのまんまな意味。自分の能力をめいっばいまで高める鬼神化。けどそんなのデメリットも無しに使えると思う？ 要するに前借りして使ってるだけなんだよ、この先使うはずの命をね」

「——っ?!」

「おじいちゃんに聞いた話だけだね。

鬼神化っていうのはずっと昔に滅んだ、竜人族よりもっと古い、神の血を引くって言われた種族“龍人族”っていう種族の血を引いてる人だけが使えるんだって。

で、龍人族っていうのが滅びた理由が鬼神化。昔はいろんな小さな国同士が戦争してて、龍人族もその戦争に参加してたんだけど、みんながみんな鬼神化しまくって早死にして、種が滅びちゃったんだってさ」

ラルドは探りを入れるような眼でイシュティスを見ていた。

イシュティスは少しめんどくさそうな表情になる。

「あまり信じてなさそうだね。ならレイスってお兄ちゃんいたよね

？ あの人に聞けばいいよ。おじいちゃん程じゃないだろうけど龍人族についてはいろいろ知ってると思うから」

「……なんでそんなことを知ってる？ 僕のために調べてくれたって言われても信じないよ」

「それはね」

イシュティスは金色の眼を大きく開く。

イシュティスの瞳がまるで龍のように縦に伸びた。手にした大鎌から黒い気刃が溢れだし、イシュティスの腕を覆っていく。

ラルドは全身の毛が逆立つのを感じた。大気が押し退けられ吹き抜ける。ラルドは息を呑み、一歩たじろぐ。“危険”を感じることができなくてもわかるほどの圧倒的な力。それをイシュティスは纏っていた。

「鬼神……化？」

「そ、しかも君よりもっともって完璧で強力な、ね。あまり長続きしないけど」

イシュティスがそう言って笑うと気刃の光が消え、眼も元に戻った。

「これでいいかな？ 要するにさっきの情報は僕のために調べてもらっただ。」

……あの子のお願いってのもあるけど僕はお兄ちゃんのことけっこ

う気に入ってるんだ。使い過ぎてあつさり死なれちゃつまらない。  
だから教えてあげた」

「……………」

「ま、僕が言いたかったのはこんなもんかな？　じゃね、友達を待たせてるから僕はもう行くよ」

残されたラルドは呆然とイシュティスの背中を見送った。

——ちょうどその頃、鍾乳洞のラルド達がいるのとはちょうど反対側、黒蛇団の船が何隻か停められた入り江にアンセスと影はいた。

「もう……こんな時間だったんだ……」

太陽はすでに水平線近くまで沈み、入り江を赤く照らしていた。  
赤い光に照らされアンセスの白い髪が火の粉が散るように幻想的に揺れる。

「イシュティス……大丈夫かな……」

ポツリと眩き、ゆっくりと波打ち際へ歩いて行く。すると、入り江のすみにに何かいることに気付いた。

ジッとうずくまる巨大な黒い影。眠っているのか、呼吸に合わせ

て身体が一定のリズムで上下している。

（なんだろう…？）

アンセスが不思議そうにその影に近づいていく。

（リオレウス……？ でも……）

アンセスは困惑の表情を浮かべた。通常、リオレウスは赤い甲殻を纏っている。一部、亜種や希少種のような蒼色や銀色の個体も確認されているものの、それ以外の体色は確認されていないはずである。だが、そのリオレウスはいずれとも違う、禍々しい漆黒の甲殻を纏っていたのだ。

「……この感じ……」

アンセスがさらにリオレウスに近づくと、リオレウスは僅かに頭を上げアンセスの方を見た。

濁った光の無い瞳だった。リオレウスはそれ以外アンセスに反応も示さず、ただ虚ろな瞳で見ている。

アンセスはそのリオレウスの頭にそつと手を当てた。

「あなたも……心を縛られたの……？」

アンセスは悲しげな表情で優しくリオレウスの頭を撫でる。

「ごめんね……私は……あなたを解放できない……」

アンセスは影の方を見る。その目には先程までと違い警戒の色が浮かんでいた。

「……ここになにするの？」

影は静かに眼を鋭くする。

「……やはり彼の者に似すぎている」

そう言つとゆっくりとした足取りでアンセスに近付いていく。

「私の質問に答えていただきたい」

「質問？」

「ええ……、そうです」

背中に隠した影の右手には鋭い忍者刀が握られていた。

部屋に戻ったイシュティスはポカンと口を開けていた。

「アンセス？」

アンセスの言う通りラルドと会い、おそらくは彼女の望みを叶えて意気揚々と帰ってみれば部屋には誰もいなかったのだ。

「トイレかな？」

しかしそれでも影がいるはずである。両方いなくなるのは考えにくい。

——と、その時イシュティスはびくりと何かに反応した。

「……殺気がする」

じつと感覚を研ぎ澄ます。常に戦いの中に身を置いてきた彼は第六感に近い感覚を身に付けていた。

部屋を出ると感覚に従い、鍾乳洞の奥へ奥へ進んでいく。

「……血の匂い」

イシュティスは走り出した。

すでに場所の目星はついている。奥の入り江だ。

滑りやすい通路を飛ぶように駆け抜け、鍾乳石を避けながら走る。

やがて開けた場所に出た。空が見える入り江。そこでイシュティスが見たものは――

「アンセス……？ 影……？」

身体中血まみれになり膝をつく影と、それを見下ろすアンセスだった。

アンセスはイシュティスに気付くとビクリと身体を震わせた。それを隙と見た影は素早く飛び退き、イシュティスの近くまで下がる。

「影……？ なにこれ……どういう状況……？」

「お気をつけくださいイシュティス様！ やつは……彼の者の代行者です！」

――彼の者の代行者？

イシュティスはその言葉の意味を知っていたにも関わらず、その意味を飲み込めずポカンとしていた。

“彼の者”それはイシュティス達の主が“最大の敵”と漏らしていた相手だった。

イシュティスの主は誰よりも強かった。唯一イシュティスが「こ

の人には勝てない」と思うほどに。

だが、その主ですら“彼の者”との戦いは回避し、手を出せないでいる敵だ。

そして“彼の者の代行者”を発見した場合には速やかに排除か報告をするよう言われている。

イシュティスはあらためてアンセスを見た。

イシュティスは一度だけ“彼の者”を見たことがあった。言われてみれば、白い絹のような髪に紅い眼のアンセスと瓜二つの少年だった。

イシュティスはブンブンと大きく首を振ると、ジッとアンセスを見つめる。

「えっと…正直に答えてね？」

イシュティスは深呼吸すると意を決したように言った。

「君は……彼の者の代行者なの？」

アンセスは僅かに顔をしかめた。しかし、アンセスはすぐに元の表情に戻り、イシュティスの眼を真っ直ぐに見つめる。

「先に…私の質問に答えて欲しい……」

「……うん、いいよ…で、何？」

「イシュティスは……竜操術を研究してる組織……『メシア』の一

員……？」

イシュティスは少しの間眼を泳がせた。そしてためらいながらコックリと頷く。

それを見たアンセスは悲しそうな表情を浮かべ、顔を伏せた。

「じゃあ……私のこと、どれくらい知ってるの……？」

イシュティスは一気に表情を曇らせた。アンセスから視線を反らし、あらぬ方向を見つめる。

「えっと……おじいちゃんは……人間を滅ぼす敵だ。って……」

「そうなんだ……」

アンセスは消え入りそうなほど小さな声で呟くと、そっと白と黒、対の双剣を構えた。

イシュティスは一歩たじろぐ。

「ね、ねえアンセス。こんなこと止めようよ？

僕は君とは戦いたくないよ……」

イシュティスは今にも泣き出しそうな顔で言った。アンセスが一步距離を詰める度に一步下がり、距離を取る。

「イシュティスが戦いたくなくても……私が戦いたくなくても……これが私の存在意義だから……」

まるで自分に言い聞かせるようにアンセスはそう言った。

「それに私が動いてること……あなた達の主に知られたら多分私は殺される……殺されたら私の役目、果たせなくなる……だから……」

アンセスは重心を前に傾けた。双剣を逆手に持ち変える。

「死んで」

次の瞬間二人の武器がぶつかりあい激しく火花を上げていた。アンセスの双剣の斬撃が無数の白と黒の閃光となりイシュティスに襲いかかる。

「アンセス！ 止めてよ！」

イシュティスは攻撃を受け止めながら大きく飛び退いた。それを追いかけてアンセスが追撃する。

「ごめん」

アンセスはそれだけ言うと再びイシュティスに切りつけた。体重を乗せるように身体をひねりながら繰り出される斬撃。

その一撃一撃にイシュティスの大鎌はきしみ、悲鳴を上げる。

「く……」

イシュティスは大きく大鎌を薙ぎながら思い切り後ろに飛び退いた。そして着地すると同時に大鎌から黒い光が溢れイシュティスの身体を包んでいく。

「ごめんね、ちょっと痛いよ?」

——鬼神化

アンセスの視界からイシュティスが消えた。アンセスがそれに反応するよりも早く、アンセスの腹部に逆刃に向けた大鎌がめり込む。

「はああああっ!!」

イシュティスはそのまま力任せに大鎌を振り抜いた。アンセスの身体が吹き飛び、手から双剣がこぼれ落ちる。

そしてアンセスの身体が地面にバウンドすると同時に、イシュティスはそれに追いつき、胸ぐらを掴むとそのまま地面に叩き付けた。

悲鳴も上げずにアンセスは地面に抑え込まれる。

「さあ、掴まえた!」

「……離れた方がいい」

瞬間、アンセスの身体の表面を赤い稲光のようなものが走った。

「っ?!!」

イシュティスは反射的に手を離して飛び退く。ほぼ同時にアンセスの身体が稲妻に包まれた。

「な?!」

まるで伝説の古龍種 キリンのように身体中を稲妻が駆け回って

いる。もし離れるのが遅れていれば感電していたであろう。  
アンセスは身体中に稲妻を走らせたまま立ち上がった。

悲しそうな眼でイシュティスを見た。

「いくよ……そしてさよなら……イシュティス」

アンセスが両手を前にかざすと地面に落ちていた双剣が浮かび、その手に吸い込まれていった。

次の瞬間、何かが軋むような音がした。勢いよくアンセスの背中から何かが飛び出す。

「龍の……翼？」

アンセスの背中から生えていたのは皮膜の付いた白い龍の翼だった。

さらにアンセスの手の皮膚の至るところが裂け、血が滴り始める。大きく腕を振って血を払うとアンセスの小さかった手は二回りは巨大化し、白い鱗に覆われ爪は鋭く伸び、まるで龍の腕のようになっている。

「その翼と爪……おじいちゃんの持ってた本でみたことがある……」

イシュティスは呆けたように呟いた。

「たしか……祖龍っていう……」

「話はおしまい……」

次の瞬間にはアンセスの爪とイシュティスの大鎌が激突していた。

「今から……全力でいく……」

アンセスの両の爪が閃いた。残光すら残さぬ神速の攻撃が立て続けにイシュティスに襲いかかる。

「く……」

イシュティスも大鎌で受け止めるが、みるみるうちに形勢が決まっ  
つていく、徐々にイシュティスが後退し始めた。

「……どうして……本気で戦わないの……？」

アンセスは腕の動きを緩めずに尋ねた。それに対しイシュティスは  
攻撃を受け止めながら悲鳴のように答える。

「さっきからずっと本気だよ……！」

「じゃあ……なんで私に攻撃しないの……？」

アンセスの繰り出した攻撃がイシュティスの大鎌を真つ二つにへ  
し折った。アンセスはそのままの勢いでイシュティスの首をわし掴  
みにし、地面に押し倒す

「もし……イシュティスが最初から本気で戦ってれば……私を殺すチ  
ヤンスはあった……なのに……」

「決まってるでしょ？」

くすりとイシュティスが笑う。

「君が死んだら悲しいし、楽しくないもの」

「じゃあ、イシュティスは…死ぬのが怖くないの……？」

「かもね。ねえアンセス？ 戦争を見たことある？」

「……え？」

「戦争じゃあね、普通に人が死んでいくんだ。

何分か前に食べ物を分けてくれた親切なおじさんも、僕をいじめて嫌なお兄ちゃんも、気がついたらお腹から内臓飛び出させたり、頭だけになったりして死んでるんだ」

イシュティスはまるで思い出話を語るように言った。

「そんな環境で育ったせいかな？

死ぬことを怖いって感じなくなっただ。だから僕を殺すなら遠慮しなくていいよ」

「……………」

アンセスの爪がイシュティスの喉元に突き付けられる。その手は僅かに震えていた。それを見てイシュティスはクスクスと笑う。

「人を殺すの慣れてないでしょ？ 手が震えてるよ？」

「……どうして……笑うの……」

アンセスはゆっくりと腕を上げる。瞳には僅かに涙が浮かんでいた。

「痛くはしないでね。やっぱり痛いのは嫌だからさ」

「……………く……………う……………私は……………」

アンセスは頭を振る。固く眼をつぶり、勢いよく爪を降り下ろした。

「……………っ！」

ビチャリ、と水っぽい音になった。

「え？」

イシュティスは大きく眼を見開く。  
降り下ろしたアンセスの爪に血がべっとりとこびりつく。だがそれはイシュティスの血ではなかった。

「ア、アンセス……………」

口をパクパクとさせながらイシュティスは呟いた。

イシュティスのすぐ目の前にあったのはイシュティスをかばうように出されたアンセスの左手。そしてその手をアンセス自身の右腕の爪が突き刺さっていた。

「やだ……………殺したくないよ……………」

ぼろぼろとアンセスの眼から涙が溢れた。ゆっくりと爪を引き抜くと血が溢れ出す。

「ア、ア……、アンセス!!」

イシュティスは顔を蒼白にしながらアンセスをはね除け、勢いよく起き上がった。

「たたた…大変だ! は…は…早く傷をふさがないと!」

イシュティスは大慌てで自分の着ていた黒衣の袖を引き裂いた。

「別に、これくらいなら……」

「駄目だよ!!」

イシュティスの強い否定にアンセスはビクリと身体を震わせた。

「小さな傷でも油断してたら大変なことになるってお姉ちゃんが言ってたんだ! だから早く手当てしないと!」

そう言つとイシュティスは引き裂いた布をグルグルとアンセスの傷に巻き始めた。

「え…え…つと……たしかお姉ちゃんはこんな感じで…あれ?」

巻き終わった布は太さもバラバラで巻き方も無茶苦茶だった。イシュティスはばつが悪そうに頭をかく。

「えゝ、あゝ…と、とりあえず傷はふせげたいのかな? アンセス、傷は痛む?」

アンセスはジッと腕に巻かれた布を見つめた。

「これ、きつい……巻いてる布の方が……痛い……」

「あ……うゝ、ごめん……」

シヨボンとしたようにイシュティスは眼を伏せた。それに対しアンセスはフルフルと首を振った。

「でも……一生懸命やってくれたのはわかるから……だから……ありがとう……イシュティス」

その言葉にイシュティスは途端に元氣を取り戻した。アンセスに応えるようにその瞳を見つめながらニッコリと笑い返す。

「ねえ、イシュティス……？」

真剣な顔に戻ってアンセスが言った。

「誰にも言わないで欲しい……今日見たこと絶対に……そうすれば……これ以上戦わなくてすむ……」

「うん、わかった」

イシュティスは即答した。あまりの早さにアンセスの方が戸惑ってしまったほどだ。

「もう、それでいいなら早く言ってよ。僕、絶対誰にも言わないからさ。もしうっかり誰かに言っちゃったらその相手を殺しちゃってもいいよ?」

「でも……それだとイシュティスは仲間を裏切ることになるんじゃない……」

「それはそれ、これはこれ」

イシュティスは箱を置くようなジェスチャーをして嬉しそうに笑った。

「僕と君は今日、たまたま出会って仲良くなった友達……それでいいよね?」

「うん、うん」

おずおずとアンセスが頷いた瞬間、いきなりイシュティスが抱きついてきた。

「イ、イシュティス!？」

驚いて声をあげるアンセス。しかしそんなことはお構い無しでイシュティスは嬉しそうにアンセスに頬擦りする。

「やったやった! 友達ができた♪ 僕の初めての友達だ!」

「イシュ…ティ…苦し…」

イシュティスが我に返るとアンセスの華奢な身体が潰れそうになっていた。あわててイシュティスが手を離す。

「ご、ごめん。大丈夫?」

アンセスはケホケホと咳き込むと軽く首を振って微笑んだ。

「いい、私も……初めての友達で嬉しかったから……」

そう言つとアンセスの翼と爪が徐々に小さくなり、元の皮膚へと戻った。自分の手が元に戻ったのを確認してイシュティスに手を差し出す。

イシュティスはそれを握り返すとはにかみながら眼をそらす。

「……それじゃあ私……もう行くね?」

「え？ 行っちゃうの？」

「うん……私も果たさないといけない役目があるから……」

「ん……わかった。仕方ないね」

そうしてアンセスは再び黒蛇団のアジトへと戻って行く。イシュティスはアンセスの姿が見えなくなるまでずっと手を振っていた。

「……ふう、あゝ今日は楽しかった」

グツと伸びをしてイシュティスは影の方を向いた。

影は鋭い眼でイシュティスを見る。

「イシュティス様……どうなさるつもりですか？」

「うん、そうだね。とりあえず……」

瞬間、イシュティスは瞬時に踏み込み影の胸にナイフを突き立てた。

影の眼が大きく見開かれる。

「な……」

影の口から血が溢れた。

「ごめんね。影はおじいちゃんにアンセスのこと報告するでしょ？  
それだけはさせられない」

「貴……様っ！」

影は忍者刀を振るう。だがそれはイシュティスを捉えることはなかった。

イシュティスは鬼神化を発動させ、瞬時に影の背後をとっていたのだ。

「さよなら。君はいい従者だったよ」

イシュティスは真つ二つになった大鎌で影の背中を深々と切り裂いた。

影の身体から力が抜け、倒れ込む。

イシュティスは無言のまま影を掴むと、入り江の隅にいる黒いリオレウスの方に引きずっていく。

「リオレウス！」

イシュティスが声をかけるとリオレウスはそちらへ頭をもたげた。イシュティスはそのリオレウスの元に影を投げ捨てると小さくため息をつく。

「食べていいよ」

## No.36 (前書き)

こんだけ書くのにどんだけかかってんだorz

現在スランプ真っ盛り、少し更新遅くなります。

+

「ししょー、大丈夫？」

「……………」

リアナの言葉にラルドは答えなかった。

岩に体重を預けたまま、ぐったりと空を見上げる。

彼はイシュティスとの戦いで精神も肉体も疲弊していた。

鬼神化の反動による重い疲労。そしてイシュティスが話した鬼神化は命を削るという言葉。

（あの言葉……たぶん本当だ）

確証があるわけでは無いが自然とそう感じた。

（なら僕は、今までにどれだけ命を削ったんだろう……）

初めて鬼神化を発動させてから、ラルドはなんとかそれをコントロールしようと努力し、かなりの回数使ってきた。

それが全部命を削ってきたと考えると口の中に酸っぱいものが溢れてくる。

「くそっ！」

ラルドは岩を殴り付けた。リアナが身体をビクリと震わせる。

「し、ししょー？　だ、大丈夫だよ。ししょーはあれ使わなくても十分……」

「お前に何がわかる！！」

ラルドは怒鳴り付けていた。

リアナが身体を怯ませた。だが一度溢れだした感情は止まらなかった。

「僕は二年間あれを使いこなすために努力してきた！　ちよつとでも強くなれるように、少しでも前に進めるように……。けど無駄だった。それどころか命を削ってた？　この気持ちがわかるか！」

一気に感情を爆発させた。

だが言い終わり、リアナの表情を見てハッと我に帰った。

「う……あ……ごめん……な……さい」

ポロポロと涙を流すリアナ。

いつも元気なリアナの見たこともない泣きかたにラルドは胸を締め付けられた。

「あ……」

リアナはラルドに背を向けると走り出し、そのまま森の中に入ってしまった。

ラルドはすぐに追うことができなかった。肉体と精神の疲労、それに罪悪感が足を止めさせる。

「……僕は……」

ラルドはその場に座り込んだ。

「僕は……どうすればいい？」

「——きゃあああ？！」

リアナの悲鳴がした。

「リアナッ?!」

今度はラルドも迷わなかった。重い身体を引きずり、一気に駆け出す。気が付けば首がチリチリとする。あまりに動揺して感じるこ  
とができなくなっていたのだ。

木々をかわし、林を抜けると——そこには雌の火竜がいた。

リアナは腰を抜かしたようで地面に座り込んでいる。ラルドは紅  
覇刀を抜いた。

まだ気付かれてはいない。ラルドは思い切り雌火竜の首に紅覇刀を振り下ろす。

その一太刀は雌火竜の首を切り裂き致命傷を与える……はずだった。

ギャリン！ と火花が散る。

ラルドの一撃は雌火竜の甲殻を削っただけだった。

「っ！」

雌火竜がラルドに眼を向け、大きく息を吸い込むと連続で炎を吐いてきた。

ラルドは身をよじって炎を避ける。そしてもう一度雌火竜に切りつけた。

だがそれも甲殻を削るだけで大したダメージにならない。

（気が……練れない）

ラルドは気を乱し過ぎていた。

元々、そこまで力も強くなく、切れ味もたいして良くない紅覇刀を使うラルドにとって、人並み外れて鋭い氣刃が生命線だった。

だが、まともに気を練れなくなってしまっでは――

「くそ！」

力任せに紅覇刀を叩きつける。だがそれも大したダメージにはならない。

——その瞬間だった。

「何をやっ取る！」

ラルドの脇を楓が駆け抜けた。

楓は腰に差した太刀を抜く。

刹那に一闪。雌火竜の身体が切り裂かれる。

——だが致命傷ではなかった。いや、致命傷にしなかった。

楓はあえて雌火竜を殺さず、まるで手術でもするように極めて正確に内臓や急所を外したのだ。

雌火竜は慌てたように翼を広げ逃げていく。

「まったく、おぬしらしくもない」

楓は太刀を鞘に納めた。刃に血すら付いていない。

「……これだ」

ラルドは小さく呟いた。

No. 37 (前書き)

すみません。さっき未完成のやつ送っちゃいましたf^  
|^  
;

「では、例のクエストはお前に任せてかまわないのじゃな？ レイスや……」

時刻は深夜、そこはドンドルマ ハンターズギルド本部の中、許可なき者は立ち入ることが許されないギルドマスターの私室

「ええ、その点については構いませんよ。それに研究の方もね」

そう言ったレイスはソファーに深く腰掛け、一人の老人と長テーブルを挟んで向かい合っていた。レイスは長テーブルに置いてあるティーカップから紅茶を一口すすり、自分と向き合って座っている老人に眼を向ける。

すでに真っ白に染まった髪、これまでの人生を表す年輪のように顔に深く刻まれたしわ、それらは紛れもなく老人のものだが、それらの老いを示すパーツとはあまりにも不釣り合いなほど、老人の体つきは精気に溢れていた。

広く、筋肉の詰まった肩、レイスに負けない長身、よどみない滑らかな動作。

（本当に……何度見ても老人のものとは思えないね）と、レイスは誰にも聞こえない声で呟いた。

「ふむ、やはりお前は頼りになるのう……お前が我々の元に来てくれてよかったわい」

「とはいえ今はお互いに利害が一致してるだけですけどね。まあ、竜操術と封神術の研究には全面的に協力しますよ、ギルドマスター」

そう言うつとレイスは少し意地の悪い眼をした。

「おっと、今は立場的に“メシア総帥”レイザー殿とお呼びした方がいいですか？」

「……誰か聞いておるかもしれん。その呼び方は止めるように言うておるじゃろう」

「これは失礼、では僕はそろそろ。クエストの準備がありますので……」

そう言うつとレイスはスツと立ち上がり、芝居がかったように恭しく頭を下げた。

「では、失礼しますよ？ “メシア総帥”レイザー殿」

レイスはそのまま、レイザーが何か言おうとするのを振り切つて、さっさと部屋から出ていった。

独り取り残されたレイザーは深くため息をつき、ティーカップを手取る。

（……彼の者達が出てこぬのならわしらの計画も平和に進むじゃろう。じゃが……もしも現れれば……）

レイザーはもう一度ため息をつき、紅茶の水面に映る自分の顔をしばらく見つめていた。すると不意に、コンコンと窓の外からノックする音が聞こえた。

何も知らぬ者なら相当に肝を冷やしただろう。

その部屋はギルドの四階、地上十数メートルの位置にあるのだから。しかしレイザーは先ほどまでの厳しい表情を和らげ、手早く窓の鍵を開けた。

すると部屋の中に一人の少年が身を躍らせる。

レイザーはその少年に近づくと、まるで祖父が孫にするように優しくその少年の頭を撫でた。

「よく帰ったのう……ご苦労じゃったな、イシュティス」

「えへへ、ただいま！ おじいちゃん」

イシュティスは頭を撫でられるとくすぐったそうに眼を細めた。

レイザーはふと何かを気にするように辺りを見回した。

「影の姿が見えんが……」

イシュティスは一瞬身体を硬直させた。

「え、えつとね……」

イシュティスの眼が泳ぐ。それをレイザーはいぶかしむような眼

で見つめた。

「えと……！ 影は……その、黒蛇の連中に」

イシュテイスは咳払いして大きく頷いた。

「順番に説明するね？」

数分後

「というわけで、影は黒蛇団の連中に裏切られて殺されちゃったんだ。……で、敵討ちで黒蛇団の連中皆殺しにしたんだけど、その時にミラザーゲスパノンを折れちゃって」

レイザーは手渡された折れた大鎌ミラザーゲスパノンを見ながらイシュテイスの言葉を黙って聞いていた。それにイシュテイスは少しだけ不安そうな眼を向ける。

「え、えと、僕のミラザーゲスパノン……直るよね？」

「うむ……まあこれなら三日もあれば直るが……」

レイザーはチラリとイシュテイスに視線を向けた。

「戦っておったのは……いや……」

レイザーは言葉を切り、もう一度軽いため息を吐くと、イシュテイスにニツコリと笑いかけた。

「ご苦労じゃったな、さぞや疲れたじやろう？ ミラザーゲスパノンはわしに任せてお前は休んでおくといい」

「う、うん」

イシュティスはホツとしたようにそう言つと、逃げるように窓から外に飛び降りる。

一方、レイザーはそれを見送ると自分の手にあるミラザーゲスパノンに眼を向けた。

（ミラザーゲスパノン……五神の石柱、黒龍の鎌……並みの力では破壊できぬはずじゃが……む？）

レイザーは大鎌の刃に付いた何かに目を止めた。刃に引っ掛かっていたそれを取る。

白い鱗だった。純白の、龍の物にしては妙に小さな鱗。

「これは……」

レイザーはチラリとイシュティスが出ていった窓に視線をやった。遠くの方に民家の屋根を走るイシュティスが見える。

「……イレギュラーが出たか」

小さくそう呟いた。

「——さあ！！ 次の試合はなんと…………… G級ハンターの登場です！！！」

施設内に拡声器を通して実況の声が響きわたる。ラルドは入場口を抜けると太陽の眩しさに眼を細めた。巨大な岩の真ん中をくりぬいたようなその施設の名は“闘技場”ラルドは馴らされた白砂を踏み締め、闘技場の中央に向かって歩いていく。

見回すと四方に設けられた矢倉の上から大勢の観客が歓声を上げ、双眼鏡を覗きこんでこちらを見ていた。

「——ご紹介しましょう！！  
本日この闘技場にやってきたG級ハンター、名はラルド！！ 強そうじゃない……… とうかが可愛い見た目に騙されちゃいけない！！  
なんとあのアカムトルムを倒したG級ハンターだ！！！」

——実況の紹介に観客はさらに大きな歓声を上げる。ラルドは居心地悪そうに頬を掻くと四方の岩の壁を見た。見えにくいが壁の向こうにボウガンを装備した闘技場職員がいる、ボウガンに装填されているのは麻酔弾。いざというときは助けてくれるということだ。

「——さあて！！  
そろそろ相手を紹介しましょうか？  
ラルド選手の相手はこいつらだ！！！」

実況の言葉と同時にモンスターを入れた檻へと続く扉が開く。そ

して中から独特の鳴き声を上げ、三頭のイャンクックが飛び出してきた。

「——今日のモンスターは怪鳥“イャンクック”下位しか捕獲できなかったので出血大サービス！！  
三頭セットでお届けします！！」

観客から再び歓声が上がる。

「……出血大サービス要らないでしょ普通……」

ラルドは一人小さく呟くと、背中の鞘から紅覇刀を抜いた。剣を地面と水平に構え、氣刃を練る。

イャンクックにむけて走り出す。三頭のイャンクックも接近してくるラルドを視界に捉えた。それぞれ僅かに時間をずらして大きく息を吸い込み、口から炎弾を連発で放つ。その数六発。しかしラルドはスピードを緩めることはしなかった。

炎弾の軌道を瞬時に見極め、隙間を縫うようにして走り抜けて五発を回避し、最後の一発は太刀の鞘を足場に空高く跳躍してかわす。ラルドは太陽の光を背に受け、先頭にいたイャンクックめがけて落下する。放たれた炎弾を素早く斬り払い、空中から剣を投げつけた。

投げられた剣の切っ先は正確にイャンクックの額を貫いた。ラルドはそのイャンクックが崩れ落ちる前に頭部に着地すると一気に剣を引き抜き、次の一頭に殺到する。

目標のイャンクックはラルドを潰さんとハンマーのように嘴を振るい、向かえ打つ。

「……遅い!!」

地を蹴ると振り下ろされる嘴を一瞬でぐり抜け、力任せにイヤンクツクの足を風ぎ払った。悲鳴を上げてバランスを崩すイヤンクツク。ラルドは返す勢いでその胸を切り裂く。血が飛散し、闘技場の白砂に降り注いだ。

「——次!!」

ラルドが振り向くと最後のイヤンクツクがこちらに突進してくるところであった。前かがみの全体重を乗せた突進、当たればさすがに潰されかねない。

しかしラルドはかわす素振りも見せず、剣を逆手に持ち身体の後ろに構える。

「——風牙一刀流。返し刃……」

イヤンクツクが向かってくる。ラルドはまるで動く気配を見せない。観客の何人かが悲鳴を上げて眼をつぶった。瞬間——

「——巻き風!」

刹那、すれ違うようにしてイヤンクツクの喉を切り裂いた。ラルドが剣についた血を飛ばすと同時にイヤンクツクは一步前にぐらつき、前のめりに地に沈む。

「……ふう」

ラルドは周りを見回した。地に沈む三頭のイャンクック、どれも身体を痙攣させ、白砂を血に染めている。

闘技場は爆発したような歓声に包まれた。

「彼に稽古を付け初めてから二週間、だいぶ形になったね」

「稽古を頼まれた時はどうかと思ったが、もともと才能はあったから」

観客席、その中でもVIP仕様の天幕に革張りのソファの置かれた場所に楓とレイスはいた。

闘技場で観客に恥ずかしそうに手を振るラルドを見て楓は微笑ましそうに笑う。

レイスは「ふむ」と顎に手を当てた。

「鬼神化が見れないのは残念だったけど、G級ハンターとして通用しそうで良かったよ。これならクエストも大丈夫そうだ」

「とはいえ未熟は未熟じゃ。まだまだ覚えることは山ほどある」

「……まあ、楽しみにしてるよ」

レイスはそう言ってその場を後にした。

歩きながら懷から取り出したメモ帳に目を通す。

（……彼らが帰って来てから二週間。ラルド君から鬼神化のことを聞いた時は肝を冷やしたがなんとかかなりそうか……後は……）

レイスはメモ帳の別のページを開く。

（彼女がどう動くか……だね）

+

ラルド達が孤島でのクエストから帰ってから二週間が経過していた。

鬼神化が寿命を縮めるということを聞いたラルドは、街に戻ると真っ先に楓に弟子入りを頼み込んでいた。

ラルドは力は大して強くなく。下手をすれば上位ハンタークラスでも下の方だ。G級ハンターとしては正直なところ安定感に欠ける。

だが、女性であるがゆえにラルドよりもさらに力で劣る楓は、剣の技術を徹底的に突き詰め、力の有無に関係なく勝てる剣術を確立していた。

孤島で楓の剣術を見てそれを見抜いたラルドはそこに自分が進む道を見出だしたのだ。

楓も最初は難色を示していたが炊事、洗濯等の家事全般と街でのナビ役をラルドがするという事で話は落ち着いた。

——本来、ラルド程の有名な男性ハンターが女性と四六時中仲良くしていれば雑誌などで取り上げられたりギルドで噂になったりと、ちょっとした騒ぎになるのだが今回はかりはラルドの少女のような見た目が幸いした。

つまり、ラルドは世間一般で“天才美少女ハンター”などと認知されているため、単に同性同士で仲がいいとしか見られなかったのだ。

ラルドのことを良く知っている面々も大抵は事情を知っている上に、ラルドがどちらかと言うと僕念仁の部類に当たるというのはリアナとの関係を見て周知の事実だったことと、楓の性格から考えて間違いは起こらないだろうとそれほど気にもしなかった。

——ただしもちろん例外もある。

「ししょー……」

雪の降りしきる中、リアナは物陰からソツと仲良く買い物をしているラルドと楓を見ていた。

街で買い物をしていた時に偶然見かけたのだが思わず隠れてしまったのだ。

ラルドが楓に弟子入りしてから、リアナはまともにラルドに会えていない。孤島での一件から仲直りもできていないのだ。

「……はあ」

リアナはため息をついた。

「二人とも……恋人みたい……」

心底そう思う。仲良く並んで夕飯の話をしている姿はもはやそうとしか見えない。

「ししょー……もしかしてかえ姉のこと好きなのかな……かえ姉もまさかししょーのこと……」

「どうしたの……？」

リアナは思わず悲鳴を上げそうになった。  
振り返るとそこにはアンセスがいた。紅い眼を丸くし、きょとんと首を傾げる。

「な、なんだ白ちゃんか。驚かさないでよ。どうしたの？」

「……リアナ、悲しそうだった」

リアナは言葉に詰まった。出会ってから数週間、アンセスはのんびりマイペースな性格だが人の感情面には妙に鋭い。

リアナはため息をつくと観念したようにアンセスの手を引き、手近な喫茶店へと入っていった。

「……どうして、ラルドと楓が仲良くしてたら嫌なの？」

全部を話終わり、返ってきたその質問にリアナはテーブルに突っ伏した。アンセスはホットミルクをコクコク飲みながら不思議そうに「うーうー」唸っているリアナを見つめる。

「……リアナは、ラルドと仲直りしたい……？」

「うん……そりゃ、ね。ただきつかけが無くてさ」

リアナがぐったりしたまま言うアンセスは何かを考えるように天井を見上げる。そしてその何かを思い付いたのかパアツと表情を輝かせると椅子から降りテーブルを回り込み、リアナの隣に来た。

「……あげる」

「ふえ？」

アンセスが差し出していたのはクシャクシャになった何かのチケツトだった。リアナはその文面を見て目を見開く。

「ポツケ温泉一泊二日旅行ご招待券……白ちゃんこれどうしたの？」

「福引きっていつので……当てた。……あげる」

「……いいの？」

アンセスはこっくり頷く。

「これで……仲直りできる？」

「う……」

リアナは答えに躊躇った。なにせ温泉旅行である。一泊二日であ

る。相当にハードルが高い。

「……だめ？」

アンセスが不安そうに言った。リアナは大きく深呼吸して笑いかける。

「ううん。あたし頑張ってみるよ。ありがとね白ちゃん！」

リアナは招待券を受け取った。

No.39 (後書き)

女性主人公の話とか書いてみたくて、“神さまとゲーム脳と過守護な殺戮竜の物語”っていう小説上げてみました。

神狩書けよって言われそうですけど、気が向いたら読んでやってくださいなm(\_\_\_\_\_)m

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5619q/>

---

モンスターハンター 神ヲ狩ル者

2011年6月26日20時58分発行